



李太白

田中克己 (たなかかつみ)

1944年

# 目次

李太白	6
李太白	6
一 序説	18
二 生立ち	22
三 遍歴時代	34
四 戦ひの詩	44
五 徴に就くまで	56
六 大都長安	68
七 李白と道教	88
八 失意の十年	108
九 閨怨の詩人	132
十 茫茫走胡兵	144

十一 水軍

十二 夜郎への流謫

十三 晩年・あとがき

李太白



# 李太白

評伝『李太白』

昭和十九年四月二十一日 日本評論社（東洋思想叢書 15）刊行

302頁

18.5cm × 並製力八一

5000部

2.32円

評伝『李太白』再版

昭和29年7月10日 元々社（民族教養新書 9）刊行

241頁

17.4cm × 新書版並製

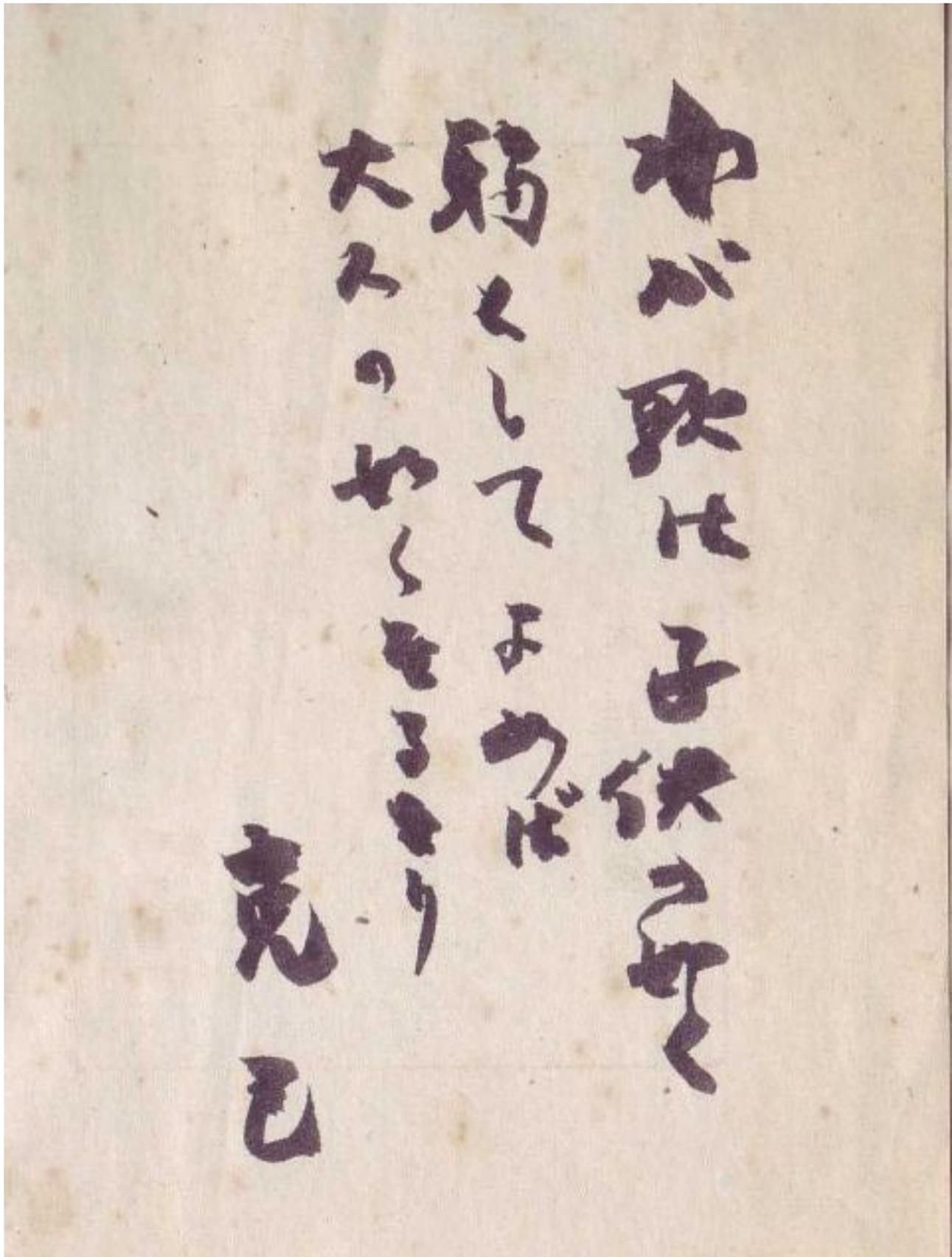
1000円

田中克己著

李太白

日本評論社版

東洋思想叢書 15



## あとがき

三〇二

幸ひに歸還した後、出發前のまゝに殘されてゐた原稿を読みかへして、その不十分なのは憤ろほしく思つたが、從軍中に痛感した支那民族の理解の一助にもなるならばと、書き改め得る限りは改めてこれを梓に上す。最後ながら参考書や忠言で助けてくれた小山正孝、小高根太郎、竹内好の三友、ならびに日本評論社の赤羽尙志氏に對する感謝を述べさせていただきます。

昭和十八年十月

田 中 克 己

(出版會承認 400089)

昭和十九年四月十日 第一刷印刷  
昭和十九年四月廿一日 第一刷發行  
(五、〇〇〇部)



發行所

東京都京橋區京橋三丁目四番地

株式會社 日本評論社

出版協會登記第一二二五四〇號  
電話 京橋區六一九一—四  
振替口座 東京一六番

配給元

日本出版配給株式會社

印刷者

白井 赫太郎

發行者

鈴木 利貞

著者

田中 克己

定價 貳圓貳拾錢 合計  
特別行爲 拾貳錢 貳圓參拾貳錢  
稅相當額

(和田製本)

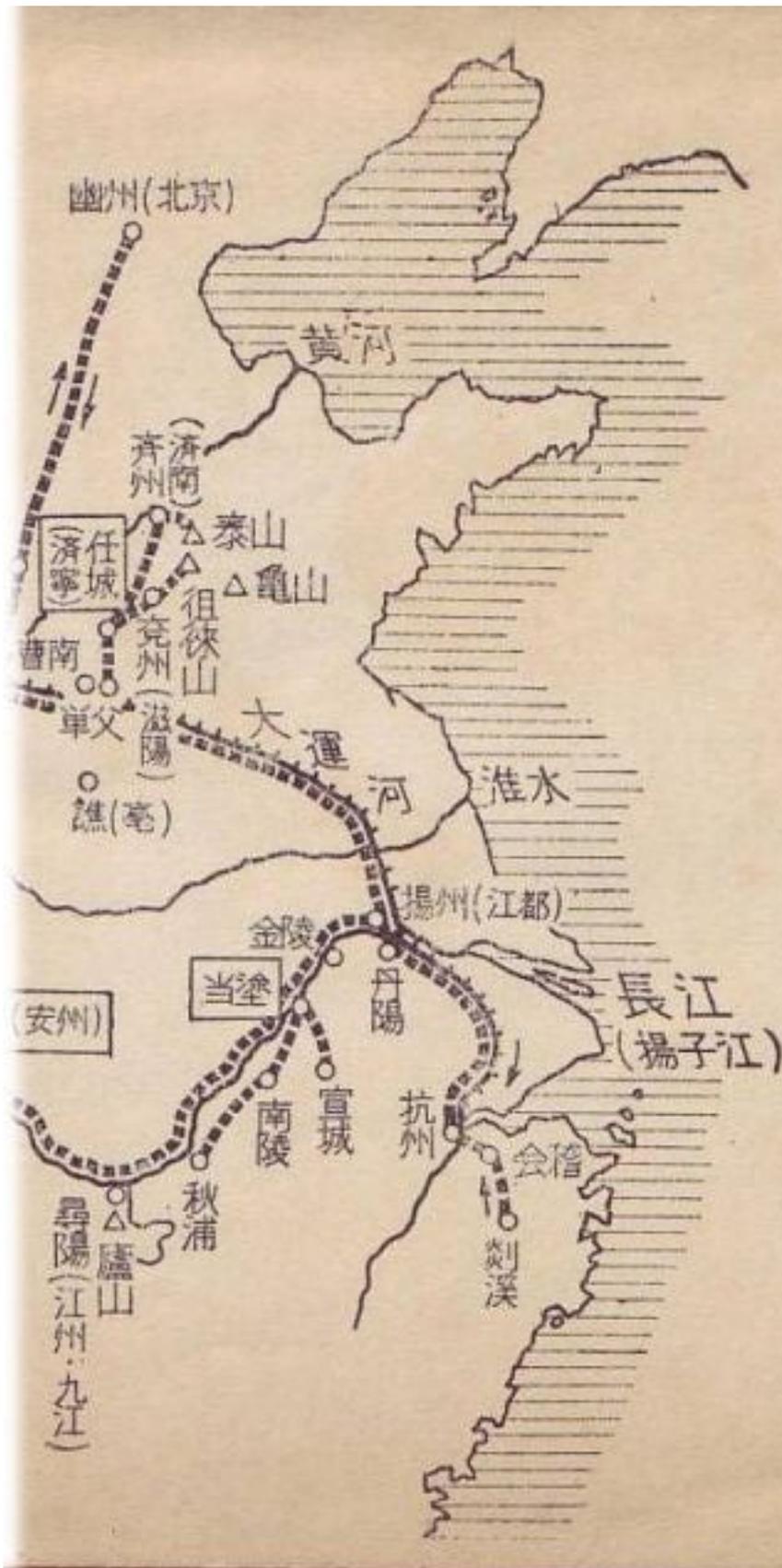
(精興社印刷・東京41)

# 李 太 白

田中克己著



元 々 社

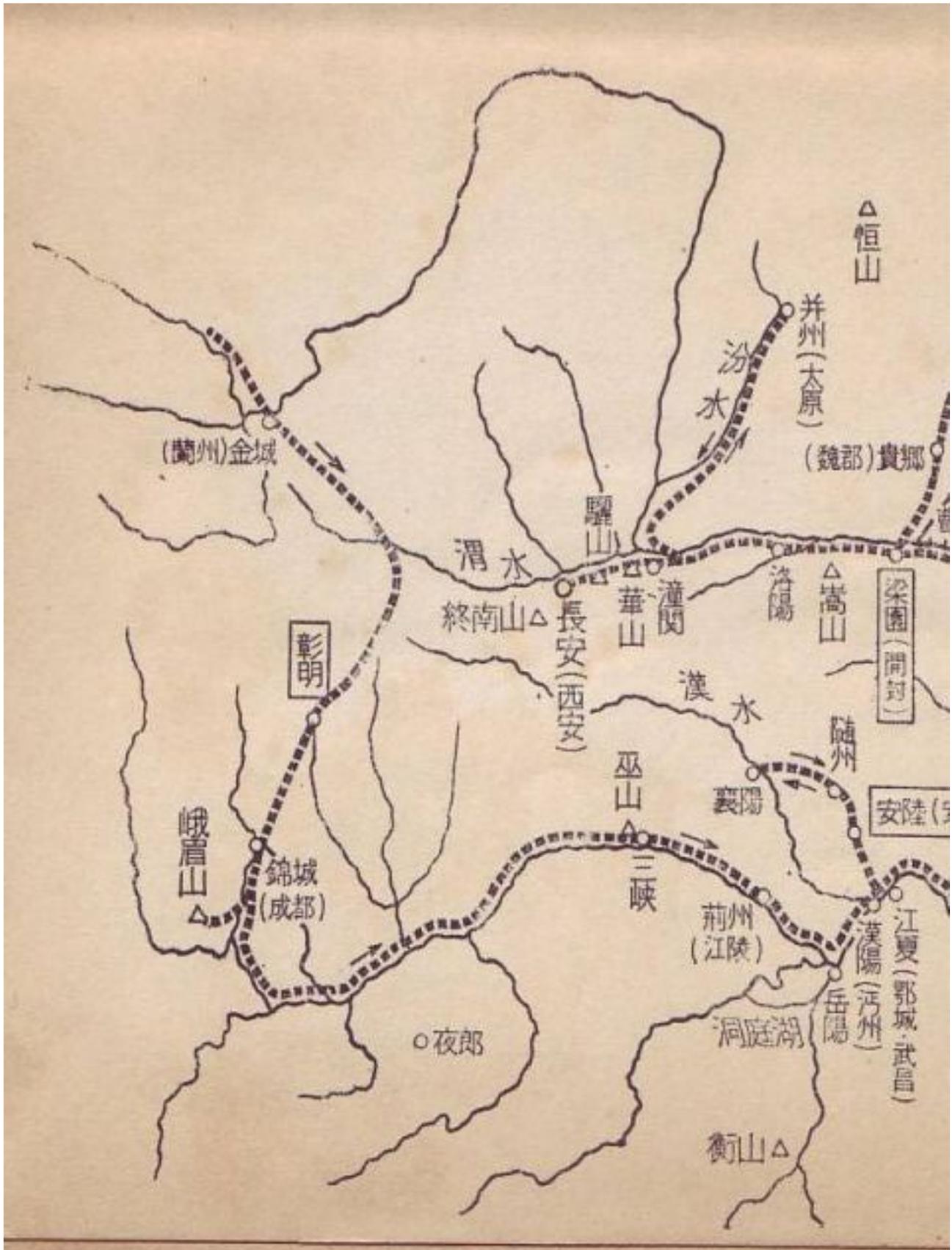


李白關係地図

地名



李白的足あと(推定)  
 李白の家をもったところ



## 民族教養新書を刊行する主旨

日本の歴史がこれまで経験したことがないやうな悲惨極まる敗戦の結果、既存の權威は地に落ち、道徳の支柱は折れ、国民的結合の原理は解体された。若い人々は何を信頼し何に依存してよいのか、目標に迷つてゐる。ニヒルな気持から目前の享樂に耽るか、手取早く破廉恥な犯罪者になりさがるか、さもなければ赤い国から与へられた侵略主義的指令に従つて無自覚的に躍らされるロボットと化し去るか、いづれを見ても自己の理性に従つて思惟し、自己の意志に従つて行動することが甚だ困難になりつつある。

自己の理性に従つて思惟し自己の意志に従つて行動するには、どうしても自分自身が如何なる存在であるかについて誤らざる自覚と反省を前提とし、同時に世界各国に於ける正確な客觀的事実の認識が必要である。この叢書を刊行するに至つた動機もまたここにある。従つて叢書の果すべき課題を次のやうに要約することができよう。

- 一、世界の現実的情勢と日本人の置かれてゐる立場について眞実なる事実を報告すること。
  - 二、世界的視野の下に最も本質的な文化的教養を身につけるために公平にして正確なる基準を提  
供すること。
  - 三、終戦以来の卑屈な劣等感を払拭して日本人の独立人格としての人間性の尊嚴を確立すること。
  - 四、不安定な動揺と混乱の中に自己を喪失せる疑似インテリの植民地型文化を清算して一般民衆の  
ための健全なる常識の涵養に資すること。
- 幸にこの叢書が広く読者の支持を得て光榮ある祖国日本の再建に一つの礎石たらんことを切望するものである。

(監修者 民族学術協会)

田中克己

明治44年(西紀1911年)大阪に生る。  
 今宮中學,大阪高校を経て東大文學部東洋史學  
 科卒。蒙古研究所,亞細亞文化研究所,天理圖  
 書館研究員を経て,現在帝塚山學院短大教授。  
 著書 詩集「西康省」ほか三冊。「楊貴妃とク  
 レオパトラ」等。  
 譯書 ノヴァーリス「青い花」シロコゴロフ  
 「北方ツングースの社會構成(川久保悌郎と  
 共譯)」徳齡「西太后に侍して(太田七郎と  
 共譯)」「ハイネ戀愛詩集」蒲松齡「狐の詩  
 情」等。

民族教養新書

9

李太白

¥100

著者

田中克己

東京都千代田區神田三崎町(櫻門ビル)

行者

沼田千之

東京都千代田區神田三崎町東京印刷KK

印刷者

守安巖



東京都千代田區神田三崎町2の34(櫻門ビル)

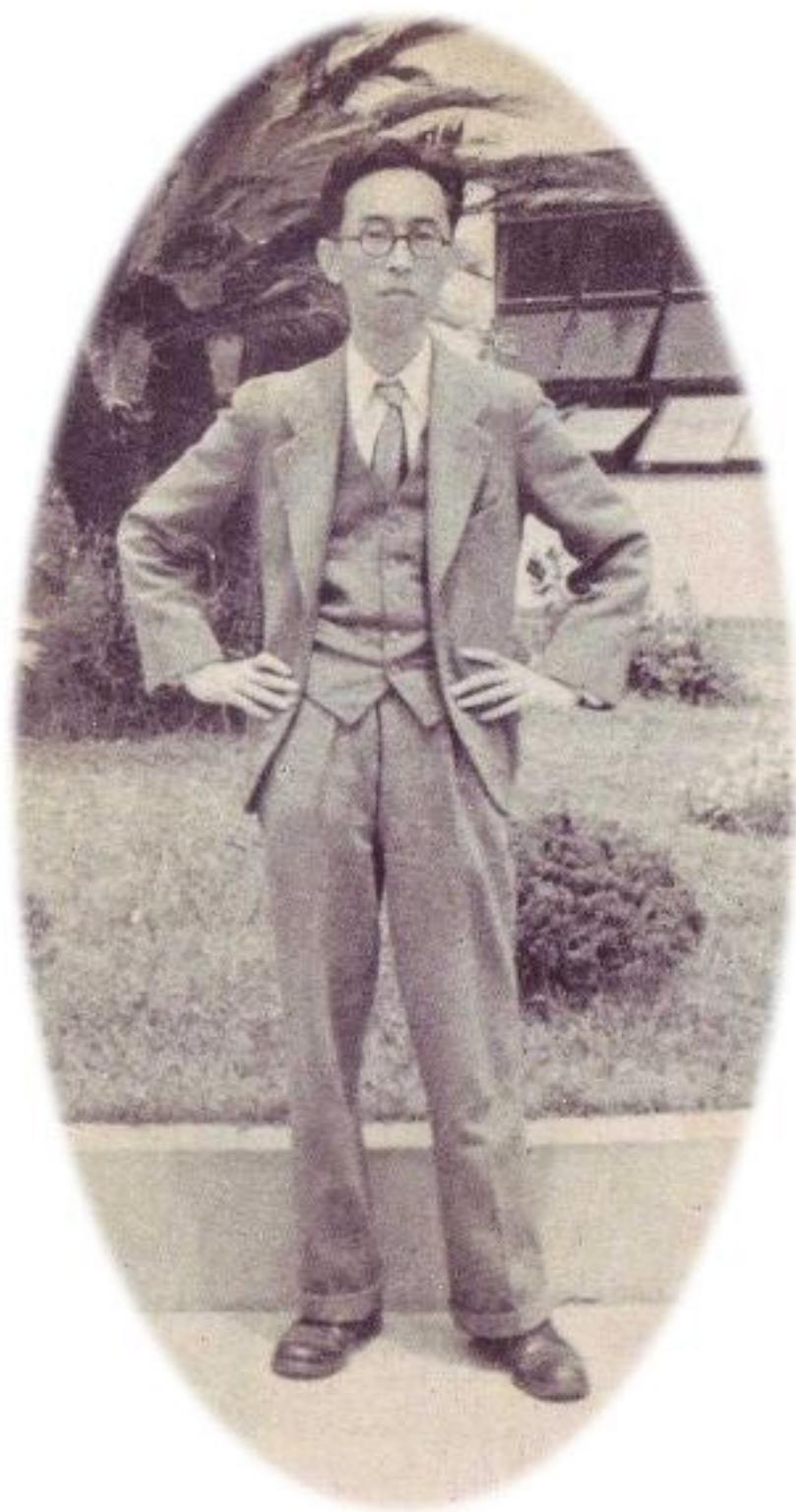
發行所

元々社

落丁本, 亂丁本は  
お取替え致します

振替東京 17355 番  
電話九段 03 9664 番

昭和29年7月10日 發行





# 一 序説

## 一 序説

永い中国の歴史とともに、中国の文学も盛衰の姿を見せるが、その最も多彩な、最も盛んだった時期を挙げよと云はれれば、誰しも唐詩のことを云はずにはをれまい。

また唐詩といへば、すべての人の脳裏には李白と杜甫の名が浮ぶ。この二人の文学史上の位置は、すでに唐代の人も知つてゐたのであつて、李白より六七十年の後に出て、みづからも唐詩に光彩を添へてゐる一人たる韓退之が、その詩で「李杜文章在、光燄萬丈長」といつてゐるのがこれを証明してゐる。

李白も、自分が後世はともかく、中国詩文壇の当代に於ける正統者であり、自らの存在によつて伝統を、更に豊かならしめるべき任務を帯びた者であることは、自覚してゐたらしく、彼の「古風」の第一篇は、中国詩の歴史をのべ、この自信をもいつてゐるものと解される。

大雅久不作 大雅久しく作らず

吾衰竟誰陳 われ衰へなばつひに誰か陳べなん。

王風委蔓草 王風は蔓草に委し

戰國多荊榛 戦国には荊榛多し。

龍虎相啖食 龍虎あひ喰食し

兵戈速狂秦 兵戈狂秦に速ぶ。

正聲何微茫 正声なんぞ微茫たる

哀怨起騷人 哀怨、騷人を起せり。

揚馬激頽波 揚・馬、頽波を激し

開流蕩無垠 流を開きて蕩として垠りなし。

廢興雖萬變 廢興、万変すといへども

憲章亦已淪 憲章もまたすでに淪へり。

自從建安來 建安よりこのかたは

綺麗不足珍 綺麗なれども珍とするに足らず。

聖代復元古 聖代、元古に復し

垂衣貴清真 衣を垂れて清真を貴ぶ。

群才屬休明 群才、休明に屬し

乘運共躍鱗 運に乗じてすべて鱗を躍らす。

文質相炳煥 文質あひ炳煥して

衆星羅秋旻 衆星、秋旻に羅なる。

我志在刪述 わが志は刪述にあり

垂輝映千春 輝を垂れて、千春を映さんとす。

希聖如有立 聖を希つてもし立つことあらば

絶筆於獲麟 筆を獲麟に絶たん。

大雅は詩経の篇名だが、ここでは調べ正しく美しき詩をいひ、「われ衰へなはつひに誰か陳べなん」といふあたり、李白の自信をあらはす。中国の詩は詩経に於いて既に完成してゐたが、戦国と秦代とに衰へた。ただこの間、離騷を作つた屈原があり、漢代には蜀の地より揚雄と司馬相如の二人を出して、僅かに詩の命脈を繋いだが、後漢の建安の頃よりは綺麗、即ち美辞麗句に流れてしまった。しかし唐代になつて、はじめ復古の氣運がおこり、群才が運に乗じて鱗を躍らせた、とのべてあるのである。この最も簡明な詩史が、同時に公正でもあることは、李白・杜甫等の崇拜し、時には模倣につとめたいはゆる建安以後の詩人、謝朓、鮑照、庾信、何遜、沈約等の名をも挙げないことから知られる。これらの詩人中、特に謝朓は李白の最も崇拜した者で、晩年そのゆかりの地に住み、つひにそこで死んだことから、その崇拜の程が思ひやられるが、しかも李白がこの詩で彼の名をも出さなかつたことは、天公が彼をして、詩人としての位置を自然にいはしめた感が深い。唐

代の群才とは陳子昂、盧照鄰、駱賓王、沈佺期等を指すのであらうが、これとても遂に李白の詩の光輝の前には影を潜める。ただ彼と同時代の杜甫だけは彼と名を等しうして、この二人の優劣は後世の文学史家や詩人たちの興味ある話題をなした。

この優劣の議論が既に唐代にはじまってゐたことは、元稹、白居易(樂天)の如きが、これを論じてゐることから知られる。但し二人はともに杜甫を勝れりとしてゐるのだが、白居易の好んだ杜詩が「新安吏」「石壕吏」「潼關吏」「留花門」等の時事詩であることから、その慷慨悲痛の詩を好んだことが知られ、これらの言によつては、李杜の優劣を定めることはもとより不可である。

従つてその後もこの二人を併せ論ずる者は多く、明・清にまで及んだが、この評論の中、一つの流派をなしたものに、李白には憂国の詩が少いから杜甫に劣るといふのがある。その代表的なものとしては、かの宋代の王安石があげられよう。彼は唐宋の詩人の代表者として、李白、杜甫、韓退之、歐陽修の四人をあげながら、李白をその最下位に置いた。その理由は、彼の詩が十中八九までは婦人と酒のことを云つてからだつたといふ(冷齋夜話)。従来の杜甫崇拜者が得々として引くこの態度が、詩の鑑賞の態度としては誤りであることは勿論であるが、同時に李白と杜甫の生涯をもよく知らぬことから起つたものである。

李白と杜甫とは同じく盛唐の詩人と称せられるが、李白は杜甫より十一歳年上で、従つてその詩人としての全盛期は、開元・天宝の世、上下すべて唐の国力に酔ひしれてゐた時代である。この頃に憂国の詩を作らなかつたといふのは、云ふ方が無理であると同時に、安祿山が乱を起した時、李白が勤王の軍と誤解してではあるが、直ちに永王の軍に参加した心情をも認めてやらない苛酷さは責めねばなるまい。

この間、美しいのは李白に対する杜甫の敬慕である。その李白を歌ふ詩は十四首に上り、名高い「飲中八仙歌」もその中の一篇であるが、就中「李白を夢む」二首の如きは、その題がすでに杜甫の李白に対する情を思はせる。これは蛮地に流された李白をおもつての夢なのである。生きてゐれば、李杜の優劣の議論を杜甫は喜ばなかつたことと思ふ。殊に彼の詩、例へば「李十二白と同じく范十の隠居を尋ぬ」中の「李侯佳句有り、往々陰鏗に似たり」の句などを引いて、杜甫は李白を劣つた詩人陰鏗にたくへてゐる、などといふ輩などに対しては、杜甫は陰鏗に対する自らの尊敬とで、よけい怒ることと思ふ。

私自身も李詩を読むとき参考とした書中に散見する、いはゆる放治的批評には不快を感じることが多かつたから、ここではその見解を排し、李白の生涯をくはしく述べる方に力を費したことをいつておく。

李白の詩に対する批評の今一つの態度には、彼が道教を信じて儒教を奉じなかつたことから起るものがある。道教のことも、後に詳述するが、唐の皇室の尊崇の大であつたことから考へても、その時代に生きた李白を批評するに、かかる態度は誤りといはねばなるまい。これらの者は反対に、杜甫を儒教的として賞しようとするが、杜甫も決して儒教一本ではなかつた。悲観的なのが杜甫、樂天的なのが李白、といへば當つてゐようが、唐の最盛時の人間は、上下おしなべて悲観的でなかつた。その意味で、李白の詩は時代をあらはしてゐるとは云へ、まずまず彼の詩の意義を深からしめる。

李白と杜甫とをくらべて、もう一つ気附くことは、杜甫の生涯が比較的判明してゐるのに対し、李白の生涯の不明なことである。現存

する一千三百篇の杜甫の詩には、時事を詠ずるものが多く、しかもそれを直裁にいつてゐるので、自然と作詩の時期もわかり、閲歴を考へる資料となることが多い上に、またみづから詩に註を附して作詩の地や時をいふことがあるのに対し、李白は時事を詠じてゐるやうな時も、時代を前代にかへ、地名をも改めたりして、その詩想は明らかにするが、生涯の方を明らかにしてくれない。胡適博士がなした如く、李白と杜甫とを象徴派と写实派といふ風に分類することには、私は反対であるが、かりにも象徴派といはれるものをもととするのでは、伝記を書くにも苦心せざるを得ない。従つて年譜も杜甫よりずっと少なく、僅かに宋の薛仲【セツチュウ】、清の王【オウキ】と李調元の三人の作があるだけのやうだが、私は王・に拠り得たのみである。しかし王・の年譜も薛の年譜の不完全なのにあきたらずして作られた由ながら、なほ完全でなく、この伝記を書くには苦しむことが多かった。

李白の詩人としての位置はすでに明らかである。伝記としても、従来のものに一事も加へ得るとは思はぬながら、この評伝では少しく異なる点を表はしたく思つたのである。

## 二 生立ち

### 二 生立ち

李白の素姓は明らかでない。

かう云ひ切ってしまうことが、却って詩人李白に似つかはしいことのやうに思はれる。始めて李白に会った時、賀知章は「あなたは謫仙人だこと云ったといふ。罪によって天上か下界へ追放された仙人にとっては、素姓の如きは問題でない筈である。それがあらぬか、李白の履歴は深い霧の中に閉ざれてゐて、真相を極めるのが非常に困難である。

はじめに云ったやうに、彼の素姓は明らかでない。しかしこの断言に至るまでの経路を、一応なるべく簡単に記しておくことも必要かと思ふ。

李白の伝記の中では、次のやうなものが比較的信用するに足るものである。

「旧唐書」フタトツゴ 卷190下 文苑列伝李白伝

「唐書」卷203 文藝列伝李白伝

「草堂集序」(唐の李陽冰撰)

「李翰林集序」(唐の魏・撰)

「唐左拾遺翰林学士李公新墓碑並序」(唐の范伝正撰)

その他に李華や劉全白の碑銘、宋の樂史の「李翰林別集序」なども参考に足るものである。しかし以上の諸史料を綜合した結果が、李白の素姓は明らかでないとの結論なのである。

「旧唐書」の「李白伝」は僅か三百字余りで、その中に不確かな点があるといふのであつて、「唐書」は李陽冰や范伝正の所記を採用して改め、字数も六百字余りに増してゐる。簡単にして要を得てゐる点では、正史であるだけにこの二書が優つてゐるが、史料としては、李白

の臨終の床にあつて、詩集のことを遺囑されたといふ李陽冰の所伝や、李白の二孫女を親しく訪ねて、その蔵してゐた李白の子、伯禽の自筆の十数行の所記を得たといふ苑伝正の文に直接当る方が捷徑である。しかしそれに先立って、李白自身が自己の素姓に関して発言してゐないかどうかを、調べて見る必要がある。

さてこの問題に關しての発言と認めるべきものが、李白集中に二個所だけある。一は彼が肅宗の時の宰相張鎰に贈った詩で

家本隴西人 家はもと隴西の人

先爲漢邊將 先は漢の辺將たり。

功略蓋天地 功略、天地を蓋ひ

名飛青云上 名は青雲の上に飛ぶ。

苦戰竟不侯 苦戰、竟に侯たらず

當年頗惆悵 當年頗る惆悵。

といつてゐる箇所である。自分の家は隴西の李氏で、先祖は漢の武將であり、大功があつたが侯になれず、残念がつた者である、といつてゐるのである、これが誰しもの氣づく如く、漢の武帝の時の勇將李広を指してゐることは明らかである。李広の伝記は「漢書」卷、五四に詳しく見えてゐて、隴西の成紀(甘肅省天水県)の人で、秦の將軍李信の子孫であり、若くより從軍して匈奴を伐ち、武帝の時、右北平郡の太守となるや、匈奴はこれを呼んで漢の飛將軍といひ避けて侵さぬこと数年であつた。名高い石に矢を立てた話もこの頃のことだつた。しかし征戰四十余年、大小の戰七十余戰にして、從弟李蔡の如き凡庸の者も桑安侯になれたのに、彼は遂に封侯を得ず、元狩四年の匈奴大遠征に、大將軍衛青に從つて塞を出で、道を失つて自殺した。彼の長男当戸の子が、蘇武と匈奴中で詩の贈答をしたので有名な李陵であつて、その蘇武に与へた書に、「陵ノ先將軍八功略、天地ヲ蓋ヒ、義勇、三軍ニ冠タリ」といふ語が見えるから、李白がこの語を取つて用ひたことも疑ひなく、かたがた李白自身が李広をその先祖と稱したことが知られる。

もう一つの箇所は、李白が三十歳の時、安州(湖北省安陸県)の長史といふ官の裴某に上つた書といふのがあり、その中で「白ハモト金陵ニ家シ、世々右姓タリ。沮渠蒙遜ノ難ニ遭ヒテ奔リテ咸泰ニ流シ、官ニヨリテ寓家シ、少クシテ江漢ニ長ズ」といつてゐる箇所である。金陵は周知の如く南京であるが、ここにゐて沮渠蒙遜の難に遭つたといふのが怪しいといつて、この書を偽作とする者と、金陵を金城の誤りとする者がある。後者によるとすれば、金城は今の甘肅省の蘭州であるから、つじつまがあふ。さてここにゐて沮渠蒙遜の難に遭つたのは、どつちいふ人であらうか。

沮渠蒙遜といふのは、東晋の時、甘肅省の甘州、涼州に拠つて、北涼の国を建てた匈奴の酋長である。この時、西隣の肅州、沙州(敦煌方

面)に西涼の国を建てたのが、李広の十六世の孫と称する李・であった。相隣りする二国の憤ひとして、北涼と西涼とは常に睨み合ひの状態であり、李・の在世の間は無事だったが、その死後、子の李歆が嗣ぐと、たちまち西涼は北涼に亡ぼされてしまった。

沮渠蒙遜の難に遭ったとは、このことを指すに違ひなく、従って李白は李・の一族と称してゐるのである。李陽冰や苑伝正は一層はつきりと、李白を李・の九世の孫といつてゐる。前述の李白の文によれば、この西涼の亡ぼされた時、彼の先祖は咸秦、即ち秦の旧都咸陽を中心とする陝西方面に逃れ、ここに官たり家居してゐたが、李白自身は幼時は江漢、即ち楊子江・漢江流域で育った、といふことになる。これを信じてしまへば、問題はなくなるが、この文の後半は李陽冰や苑伝正の所伝とも矛盾し、信じ難い点が多く、この書の偽作であるとの説も根拠がないとはいへない。そこで最も信頼すべき筈である李白自身の所記を去つて、李陽冰や苑伝正の所記を考へて見る必要が生ずる。

前述の如く、この二人はともに李白を李・の九世の孫とする点に異りはないが、その後のことになると、伝へる所に多少の相違がある。先づ李陽冰によれば「李白の家は唐の皇室の一族で、世々名門であつたが、中ごろ罪に非ずして條支に流され、姓と名とを変じ、五代の間は、士族の身分をも離れて庶民となつた。唐の神龍(中宗の年号)の初め、李白の父が蜀に逃れ帰つてまた李姓に戻り、そのうち李白を生んだのである」といふ。

苑伝正によると「隋末の戦乱に当り、隴西の李氏の一支が、碎葉に竄され、困苦窮乏して姓を変じたため、その同族たる李氏が唐朝を創立しても、一族の籍には載せられなかつた。神龍の初め、広漢(四川省)に帰り、客が李白を生んでのち、復姓したのである」といふ。

この二説はちよつと見ると同じことを述べてゐるやうで、こまかに読んで見ると、互ひに矛盾する点が多く、しかも両方とも疑はしい点が多い。一は李白の臨終の床にあつたといふ者の所記であり、一は李白の嫡子の所記に基いたといはれるのに、これは一体どうしたことであらうか。

まづ李陽冰の文を検討してみよう。

唐の皇室の一族といふのは、唐の皇室は隴西の李氏の出で、高祖李淵は李・の七世の孫といはれるから、前述の李白の言と矛盾しない。しかし中ごろ罪に非ずして流されたといふ條支とは一体いかなる地であらうか。條支は漢代に既に中国人に知られてゐた地名であるが、故白鳥庫吉博士は、これをアラビア語の「島」の訳字として、チグリス、エウフラテス二河の川中島たるメソポタミアのメセネ国にあてられた。漢人はここを世界の極西なる西王母の国の隣と考へてゐたのである。唐人の考へてゐた條支は、これと少しく概念を異にし、恐らく波斯のことであらうと思はれるが、いづれにしても歴代中国王朝の勢力外にあり、中国人がここへ流されることはありやうがないし、商人、捕虜としての往来もまづ絶無と考へていい。もし李白の祖先が中国人でありながら、当時この方面に住んでゐたとしたら、この浪漫的な詩人には大いにふさはしいことだが、これは残念ながら殆ど信じ難い。またもしその波斯移住を西涼の滅亡と関係づければ、在留およそ三百年、中国に舞戻つて来た彼の祖は殆どイラン人化してゐたことであらう。

以上のやうなわけで李陽冰の所伝は容易には信じ難いが、苑伝正の方はどうかといふと、これもやはり李白の祖先が隴西の李氏の一族であつ

て、塞外に流されたものであるといひ、その時代を隋末、その場所を碎葉といつてゐる。隋末は天下麻のごとく乱れ、そのため安住の地を塞外に求めた漢人もなかつたわけではなく、殊に北方の突厥は隋の皇室と関係があつたので、皇子楊政道をはじめ后妃皇族の避難したのもおあり、唐になつてもその民族下に付いてゐた遺民一万人と「旧唐書」には記されてゐる。しかし彼等の住地は中国内地に近く、楊政道の居住した定襄城も長城の近くにあつたと思はれる。しかるに碎葉城はこれと異り、唐の太宗が貞觀十四年に北庭大都護府を置いた今のトゥルファンより、天山を越え、西のかた遙かのイシククリ湖(唐代の熱海)に遠からぬチュウ河(唐代の碎葉水)畔にあり、今のトクマクの近くである。ただし隋唐時代の西突厥の王庭はこの付近にあり、捕虜となり、もしくは投降した中国人がゐたことも想像されるので、李白の先祖をさういふ風に考へて見ることも、可能であり、李陽冰の所伝よりは遙かにこの方が合理的である。

しかし苑伝正の方が後に書かれたものである点から、この合理化をも一応疑つてかかる必要がないとはいへない。そこで以上のことから結論して見ると、李白の素姓に關して、少なくとも唯一つ信じていいと思はれることは、彼の家が彼の生時を去ること遠からぬ神龍の初めに、異民族の住地たる西方から移つて来たといふことである。このことは李白自身は云ひたがらなかつたやうだが、殆ど疑ひを容れない。しかし李白の民族は漢人か、トルコ人か、イラン人かといふ問題は、今のところいづれとも断定し難い。とまれ民族が何であらうと、彼の詩が中国文学の最高峰であり、中国詩の美しさを極度にまで生かしたものであることには、なんら問題はなく、血統の問題はともかく、藝術家としては、李白は純血の漢人だと云へる。

この問題に關しては次の人々の間に論戦がある。興味のある方は就いて見られたい。

陳寅恪 李太白氏族之疑問(「清華學報」十卷二期)

李懷琛 李太白國籍問題(「逸經」一期)

王立中 李太白國籍問題之商榷(「學風」六卷七・八期)

幽谷 李太白(中国人)突厥人(「逸經」十七期)

さて民族さへ不明な位であるから、李白が隴西の李氏の一族であるか否かは、彼の言にも拘らず、全く不明であるが、少くも隴西の李氏であると認められるか否かは、李白自身にとつては大問題だったのである。

このことを明らかにするために、李白の生れた時代を一応ふりかへつて見なければならぬ。彼の活動した開元・天寶の時代は社会に色々の改革のあつた時代であるが、それまでの数百年間は大体、閩族政治の社会であつたといへる。江南にあつた六朝がすべてさうだったが、華北の社会もその例に漏れなかつた。王朝の興亡と係はりなしに、名門貴族はずつとその栄位を保持して来た。就中その代表的なものは隴西の李氏、太原の王氏、滎陽の鄭氏、范陽の盧氏、清河の崔氏、博陵の崔氏、趙郡の李氏等七姓十家で、後魏の王室、北齊・北周の王室はすべて

鮮卑（蒙古とツングースの雑種）の出であったから、これを軽蔑してたやすく結婚せず、天下の士人もみなこれら（七姓十家）の家と婚を通ずることを光栄の至りとする有様で、家門の貴さのおかげで代々みな高位高官を占めた。

北周のあとを受けて華北を占め、ついで南朝の陳を亡ぼして天下を一統した楊氏の隋朝も、そのあとを継いだ李氏の唐朝も、家門の点では彼等に及ばなかった。否、近ごろの研究によれば、この二朝はともに塞外民族たる鮮卑族の出身であることが、十中八九まで疑ひないとされてゐる（岡崎文夫博士「支那史概説」上、173-174頁）。

ただし唐の皇室は李氏を称したことから、いつの間にか隴西の李氏に系譜をつなぎ、高祖李淵は前述の李・の七世の孫といふことにしてしまつたのである。かく皇室さへも家門を貴くするためには、家系を偽り、赤の他人の系譜に自己の系譜をつけねばならなかつたのである。李白がその真偽は知らず、隴西の李氏の一族と称したがつたのも、むりはない。ただ彼は皇室の如く権力をもち、しかも最近に塞外から来た家の出であることが知られてゐたため、これが公認されなかつたのである。門閥万能の時代に生れた李白にとって、このことは大打撃であつたに相違ない。

前述の李白自身による家系に関する発言も、一は時の宰相への、一は青年時代、住地の地方官への、自薦的な意味を含むものだつたことが知られるので、益々信用し難くなるのである。

素姓を明らかにしない李白は、また出生の地に関しても、二説を有する。蜀の生れといひ（李陽冰）、綿州の生れといひ（魏・）、巴西の生れといひ（「唐書」）、広漢の生れといふ（苑伝正、劉全白）のは、みな矛盾しない。といふのは蜀は四川省のことで、巴西はその綿州の郡名、広漢も同地方の旧称だからだが、ここに一つ「旧唐書」のみは次の如くいつてゐるのである。

「李白、字太白、山東ノ人ナリ。……父八任城ノ尉タリ。ヨリテココニ家ス。少クシテ魯中ノ諸生ナル孔巢父・韓準・裴政・張叔明・陶沔等ト、徂徠山ニ隠レ、酣歌縱酒ス。時二竹溪ノ六逸ト号ス。……」

「旧唐書」は五代の劉昫の撰で、古くから杜撰のそしりがあり、またこの記事は拠つた材料を明らかにしないから、これだけなら黙殺してもいいが、ここに無視できないのは、李白と親交のあつた杜甫が、同じく彼を山東の李白と呼んでゐるのである（蘇端・薛復ノ筵、薛華ノ醉歌二簡ス）。また中唐の詩人元稹の「杜甫碑銘」にも「山東ノ李白」といふ語が見える。唐代の山東は大行山以東を一般的に指したのであつて、必ずしも今の山東省の任城（濟寧）生れたることを云つてゐるわけではないが、かといふことで山東説も一概には捨て難い。

なほ四川生れといふ説の大弱点は、李白の家が四川に遷つたのは神龍の初年であつたといふ（李陽冰・范伝正）のに、李白はその寿六十二歳（李華の墓誌）、没年は宝応元年（李陽冰）といふことから逆算してみると、唐の中宗の長安元年の生れで、この年には既に五歳だつた筈だといふことである。ここに於いて色々な憶測が唱へられてゐるが、断論を伴はない考証にはもつ倦いたから、私はここではこのことをそのままに受取つて、李白の生れたのは家の四川移住の、九年前、おそらく塞外でのことであつたとしておかう。或ひはその家の数代の住地であつたといふトクマク付近のキルギス式の穹廬の中で生れたと考へてみるのも浪漫的で宜しからう。

母がみこもる時、太白星が懐に入った夢をみたといふ。太白星は金星である。西洋では Venus と呼ばれ、美と恋愛との象徴なのだが、中国や中央アジアではこのことが何を意味するのか、私は浅学にして知らない。彼の字の太白はここから来てゐるといふのである。序であるが号には青蓮居士、酒仙翁等がある。酒仙翁は詩酒の生涯にふさはしい号であるが、青蓮居士は、どこから来たのだらう。普通に李白の生地とされてゐるのは、四川省の彰明県青蓮郷であるが、この郷名は或ひは李白の生地であるといふことから起つたので、李白自らは他の典拠によつてこの号を付けたのではないかと思ふ。しからば青蓮とは何かといへば、これは仏典中に多く出て来る花の名であり、梵語では優鉢羅花といふ由である。印度には多いが、中国の内地には産しないやつである。高名でありながら珍しい花であることは、李白と同時代の詩人岑参が、この花を実見して驚喜した様を、次のやうに述べてゐることで知られる。

「自分は嘗て仏経をよみ、優鉢羅花といふもののあることを聞いてゐたが、見たことがなかった。天宝景申歳(十三載)大理評事・撰監察御史・領伊西北庭度支副使の官に任ぜられ、公務の暇が多かつたので、役所内の庭に樹や薬草を植ゑ、築山や池を掘つて楽しみとしてゐた。この時、交河(今のトルファン)の近傍のヤルホト)の小吏でこの花を献するものがあり、云ふには『この花は天山の南麓で見つけました。その姿が普通の草と異り、冠弁のやうにつき立つて、衆草の上にぬきん出てをります上、葉に異香がふいました』と。そこで自分は歎じて『汝は中国に生れず、辺土に生れ、そのため牡丹や芙蓉の如く汝より劣つた花をして、価高く栄誉あらしめてゐる。天地が公平で陰陽が偏つてゐないのは実に残念なことで、僻地にもかかる花を惜気もなく咲かせるのだ。もしこの花が小吏に会はなければ、終に山谷に棄てられたままであつたらうことは、これを譬へれば才能ある士が明主に遭はずして山林に退けられてゐると等しからう』と云つた。」(「岑嘉州集」卷二「優鉢羅花歌」の序)。

またその詩は

「白山ノ南、赤山ノ北、其間ニ花アリテ人識ラス。緑茎碧葉好顔色、葉八六弁、花九房。夜掩子朝開キ異香多シ、……」

といふのであつた。かく唐代の人士に珍重された花であるから、李白がこれをその号としても、大してふしぎなことはないと思はれる。それにしても、生地といひ、号といひいづれも西域に関係があるとすれば、金星を表はす太白といふ字にも、何となくイラン風な感覚があると思ふのは、私一人の考へであらうか。

神龍元年には李白は五歳で、前述の如く、この年に彼の父は四川に移住した。これ以前のこととは伝へられてゐないが、この年以後の生活については、彼自身が前に引いた安州の長史の裴某にたてまつつた書の中で述べてゐる。

「五歳ニシテ六甲ヲ誦シ、十歳ニシテ百家ヲ觀ル。軒轅(黄帝)以来、頗ル聞クラ得タリ。」

六甲とは悪神を避ける呪文のやうなものを云ふのだらう、道教関係の簡単な経文であることには間違ひがないやうだ。従つて十歳にして読んだといふ、百家の書、老子、莊子をはじめとする老莊の徒の著作を主とするものだったらう。彼が詩に心を用ひしたのは、十五歳前後のことらしい。前に引いた張鎬に贈つた詩に

十五觀奇書 十五にして奇書を觀作賦凌相如概 賦を作つて相如を凌ぐ

の句が見える。相如とは蜀の人で、漢の武帝の時の有名な詩人司馬相如である。彼はまたこの詩人の代表作であり、六朝の詩人が金科玉條とした「子虚ノ賦」を父から親しく教へられたことを

「余ノ小時、大人、子虚ノ賦ヲ誦セシメタレバ、私カニ心ニ之ヲ慕ヘリ」

(秋、敬亭ニ於テ從姪ノ盧山ニ遊ブラ送ル序)

と云つてゐる。彼はまたこの頃、劍術をも習つた。

「白八隴西ノ布衣(フイ)、楚漢ニ流落シ、十五ニシテ劍術ヲ好ミ、諸侯ニ徧リ干リ、三十二ニシテ文章ヲ成シ、卿相ニ歴リ抵ル」(韓 荊州ニ与フル書)

といふのがその自述である。これで見ると十五歳の頃までには既に四川を出たやうであるが、後に述べる如く、開元八年、その二十歳の時、四川の益州の長史たる蘇頲に會つたといふ記事があるから、どもらとも定め難い。

四川にゐた少年時代に関しては、やはり後述に譲るが、四川の風物を詠じた詩が多くないのは、早くここを出て、その後、晩年に夜郎に流される途中、三峡の險を過ぎるまで、四川の山河を望み見ることもなかつたのであるから、当然のことと云へる。即ちその数百編の詩の中、四川を歌つたもので、有名なのは「蜀道難」と「峨眉山ノ月歌」とがあるくらゐにすぎない。

蜀道難 蜀道難

噫吁戲 危乎高哉 ああ 危いかな 高いかな

蜀道之難 難於上青天 蜀道の難きは青天に上るより難し。

蠶叢及魚鳧 蠶叢と魚鳧

開國何茫然 國を開くことなんぞ茫然たる。

爾來四萬八千歲 爾來、四万八千歳

不與秦塞通人煙 秦塞と人煙を通ぜず

西當太白有鳥道 西のかた太白<sup>2</sup>に當つて鳥道あり  
 可以・絶峨眉巔 もつて峨眉の巔に横絶すべし。<sup>3</sup>  
 をゆけば峨眉山の頂に横わたりしてゆけるとの意。  
 地崩山摧壯士死 地、崩れ山摧<sup>4</sup>け、壯士死す  
 然後天梯石棧相鉤連 然る後、天梯と石棧とあひ鉤連<sup>5</sup>す。  
 上有六龍回日之高標 上には六龍、回日の高標<sup>6</sup>あり  
 下有衝波逆折之回川 下には衝波、逆折の回川あり。  
 黄鶴之飛尚不得過 黄鶴の飛ぶもなほ過るを得ず  
 猿猱欲度愁攀援 猿猱<sup>7</sup>度らんと欲して攀援<sup>8</sup>を愁ふ。  
 青泥何盤盤 青泥<sup>8</sup>なんぞ盤盤<sup>9</sup>たる  
 百步九折縈巖巒 百歩に九折して巖巒<sup>9</sup>を縈る。  
 捫參歷井仰脅息 參<sup>10</sup>を捫し、  
 井を歴<sup>10</sup>て、仰いで脅息し<sup>10</sup>。  
 以手撫膺坐長嘆 手をもって膺<sup>10</sup>を撫し坐して長嘆す。  
 問君西遊何時還 君に問ふ西遊していつれの時か還る  
 畏途巉巖不可攀 畏途<sup>11</sup>の巉巖<sup>11</sup>

2 山の名、陵西の郿県の東南にあり。

3 峨眉は四川の山名、太白山から鳥の通ふ道

4 秦王が蜀王に五女を嫁すこととなり、蜀王は五人の壯士を遣して迎へにゆかせたが、途中で大蛇に会ひその尾を引くと地崩れ山くだけたと。

5 引きつらなる。

6 日の御者なる羲和が六龍の曳く日車を運転してゆくが衝突して進めなくなる高峯がある。

7 猿は手長ザル。

8 嶺の名

9 道が曲りくねってゐる様。

10 おそれて肩で息する。

11 けはしい道のけはしく高い巖。

攀よづべからず。

但見悲鳥號古木 ただ見る悲鳥の古木に号まび

雄飛雌從繞林間 雄は飛とび雌は從まつて林間を繞めぐるを。

又聞子規啼夜月愁空山 又聞く 子規の夜月に啼き空山に愁しふるを。

蜀道之難難於上青天 蜀道の難きは青天に上るより難し

使人聽此凋朱顏 人をしてこれを聴けば朱顏を凋しほましむ。

連峰去天不盈尺 連峰 天を去ること尺に盈みたず

枯松倒挂倚絕壁 枯松 倒さかし 倒さかしに挂かか 挂かか 挂かかして絶壁に倚よる。

飛湍瀑流爭喧壑 飛湍ヒタシと瀑流と争まつて喧壑ウツク

砢崖轉石萬壑雷 崖を砢うち石を転まらばして万壑雷マンカクカミナ。

其險也若此 其の險なるやかくのごとし

嗟爾遠道之人胡爲乎來哉 ああなんぢ遠道の人よなんすれぞ來るや。

劍閣崢嶸而崔嵬 劍閣13崢嶸13として崔嵬サイカ14

一夫當關 一夫関に当れば

萬夫莫開 万夫も開くなし

所守或匪親 守るところ或ひは親シにあらずんば

化爲狼與豺 化してならん狼と豺サイ。

朝避猛虎 朝あしたに猛虎を避け

夕避長蛇 夕ゆふに長蛇を避く。

磨牙吮血 牙を磨き血を吮すひ

12 さはがし

13 劍閣道。蜀道の最難所。

14 けはしく高大な様。

殺人如麻 人を殺すこと麻の如し。

錦城雖二云樂 錦城は樂しといふといへども<sup>15</sup>

不如早還家 早く家に還るに如かず

蜀道之難 難於上青天 蜀道の難きは青天に上るよりも難し。

側身西望長咨嗟 身を側て西望して長く咨嗟す<sup>16</sup>。

この詩はすばらしい詩である。長安より成都に至る蜀道の困難と、古来おのづから一国を成した四川盆地の形勢とが雄渾なる句調で浮彫のやうに描き尽されてゐる。詩中の三ヶ所に繰返されてゐる「蜀道の難きは青天に上るより難し」といふ句も、非常に効果的である。私は特に「参を捫(手探り)し井を歴て仰いで脅息し」といふ句に、空気の希薄な高地で喘ぐ旅人と、その手の届きさうなほど近くに輝いてゐる参星(オリオン星座)、井宿などの星辰を捉へ来て、蜀道の困難をこれ以上ない位、鮮やかに写し出してゐるのに感心してゐる。後に都を失ひ、楊貴妃を失つた玄宗皇帝がこの道を辿つたことなども、この詩の背景感を与へてゐるのであらうが、李白の製作はこれに遙か先立つてゐるのだから、これは詩人の予感でなければ、全くの偶然にすぎないのだが、この詩の暗鬱悲壯な調子は全篇を通じて漲つてゐて、一言一句もその調和を破る箇所がないのに気づく。しかし、この詩の傑作であることは全く別なことであるが、蜀道の困難と蜀の政治的地位の特殊性とをかくも巧みに歌ひながら、この詩は思郷の作にはなつてゐないのである。これは古楽府の題意に拘束されたせるもあらうが、また李白が四川を必ずしも心の故郷としてゐない証拠ではないかと考へさすものである。その他に彼が實際四川にゐた時代の作と見られるものには「戴天山ノ道士ヲ訪テ遇ハズ」「峨眉山ニ登ル」「錦城ノ散花楼ニ登ル」などがあるが、その中、峨眉山の詩を除く二首は、第一流とはいひ得ないまでも佳作であつて、李白が少年にして既に天才の実を具へてゐたことを示すものである。錦城は「蜀道難」にも見えてゐたが成都のこと、散花楼は城中にあつた高樓である。また戴天山は綿州の北五十里にあり、一名を大康山と呼ばれ、李白の讀書の処といはれる。おそらく李白はこの山中の大明寺の寺僧や道士から多くの書の訓読を授けられたのであらう。

登錦城散花樓 錦城の散花楼に登る

日照錦城頭 日は照らす錦城の頭<sup>17</sup>

朝光散花樓 朝光 散花楼。

金窗夾繡戸 金窗 繡戸を夾み<sup>17</sup>

<sup>15</sup> 成都の異名

<sup>16</sup> 長いため息する

<sup>17</sup> 黄金の窓に色づくし戸がはめこまれ

珠箔懸銀鈎 珠箔シユハク 銀鈎ギンコウに懸る。<sup>18</sup>

飛梯・雲中 飛梯 緑雲の中<sup>19</sup>

極目散我憂 極目<sup>20</sup> 我が憂を散ず。

暮雨向三峽 暮雨 三峽に向ひ

春江繞雙流 春江 双流を繞めぐらす。<sup>21</sup>

今來一登望 いま来つて一たび登望すれば

如上九天遊 九天22に上つて遊ぶがごとし。

訪戴天山道士不遇 戴天山の道士を訪ひて遇はず

犬吠水聲中 犬は水聲の中に吠え

桃花帶露濃 桃花は露を帯びて濃こまやかなり。

樹深時見鹿 樹深くして時に鹿を見

溪午不聞鐘 溪たに 午ひるなれど鐘を聞かず。

野竹分青霽 野竹 青霽セイアイを分ち

飛泉挂碧峰 飛泉 碧峯かみに挂る。

無人知所去 人の去る所を知るものなし

愁倚兩三松 愁へて倚る兩三の松。

後の詩の方は、王維の詩のやうな趣があつて好いと、乾隆帝もほめてゐる。私は特に最後の行に少年李白の姿がありありと見えるやうに思へて好きである。

<sup>18</sup> 美しいすだれが銀のかけがねにかかつてゐる

<sup>19</sup> 高い梯を上つて雲の中に入つてゆき

<sup>20</sup> 見わたすかぎり眺めれば

<sup>21</sup> 春の大河は二すぢの流となつて成都をめぐる

<sup>22</sup> 天の最も高いところ

四川時代の作がこれだけしか知られてゐないことは、考へて見ると残念であるが、畢竟するに、李白は四川が故郷であるにしろ、ないにしろ、真の意味の故郷といふものをもたなかつた人である。もし彼にそれがあつたとすれば、当時の文化の中心であり、帝王の居であつた長安がそれであらう。しかし彼はそこに到達するまでにこの後数十年を経てゐるし、そこでは忽ち極度の失望落胆を味ははねばならなかつたのである。

## 三 遍歴時代

### 三 遍歴時代

李白が四川に在ったのは、少年時代だけで、やがて諸方への遍歴の途に着いた。その理由、その道筋などに関しては、これまでに引いた彼の「安州裴ノ長史ニ上ル書」が解答を与へてゐる。この書には偽作の疑があることは前にも述べたが、他にはこの詩人の遍歴時代、しかもただの放浪ではなくして、ゲーテの小説「ヴィルヘルム・マイスタ」の主人公に於ける遍歴時代と同じく、詩人李白の大成を約束せしめる重大な期間であつたと見られる時代についての史料がないのであるから、ここでは止むを得ずこれに語らせることにしよう。初の方は前にも引いたが重複を構はず録すると、まづこの書を記す際の心境を述べ、ついで

「自分の家は金陵にあり、世々名族であつたが、汨渠蒙遜の難に遭つて、咸秦に遁れ、官吏となつてここに住まつた。自分は少年時代江漢で生長し、五歳にして六甲を誦し、十歳にして百家を觀、軒轅以来のことに頗る通じた。常に経書を手から放たず、文章を考へ作つて倦まずに過して来たが、年を数へてみると今で三十年になる。士は生れると桑の弓、蓬の矢で四方を射るが、そのことから考へると、大丈夫には必ず四方の志があるべきである。それゆゑ自分は劍を杖いて国を去り、肉親を離れて遠遊しはじめ、足跡は南は蒼梧、東は溟海に及んだが、同郷人なる司馬相如が雲夢沢のことをほめて、楚には七沢があるといつてゐるのを読み、これを見に来たのである」

といつて湖北省方面にやつて来た理由をのべ、ついで

「許相公(安陵の人なる許圜師、高宗の時の宰相)の家に招かれ、孫女を妻あはされたので、ここに留り、三星霜を過した。」  
 といつて、彼の伝記にとつて重要な資料を提供し、筆を続けて、安陸に至るまでの遍歴時代の逸話を次のやうに色々物語つてゐる。

「昔、東のかた揚州に遊んだ時には、一年とたたない中に三十余万金を散じた。この頃、落魄した公子がゐれば、みな救つてやつたからである。これは自分が財を軽んじ施しを好む証拠である。またかつて四川時代の友人呉指南と、ともに楚に遊んだが、指南は洞庭湖のほとりて死んだ。自分はまるで肉親の死に会つたやうに、喪服をつけ慟哭し、涙がかれて血が出るほど泣き悲しみ、指南の屍骸を湖畔に仮葬してから、金陵(南京)に行った。数年して歸つてみると、屍骸には筋肉がまだ残つてゐたから、これを洗ひ削り、骸骨を負つて鄂城(武昌)の東に葬つてやつた。これが李白の存交重義のよい証拠である。」

といて、四川時代の友に呉指南といふ者のあつたこと、洞庭湖、南京、武昌と往来した事実を提供し

「また昔、逸人東巖子と岷山シジヤンに隠棲すること数年、城市に足をふみ入れず、奇禽数千を飼ひ、呼べばみな掌から餌をついはむやうになつた。広漢（綿州）の太守がこれを聞いて感心し、樓家スミカに来て会ひ、二人を有道科（唐の時の官吏選衡の一科）に推薦しようとしたが、二人とも断つた。これが自分の道を好み、尊貴に屈しない証拠である。」

と、出郷以前の逸話をのべる。岷山は彰明県の北方に連る山である。また曰く

「また前の礼部尚書の蘇公（蘇頌）が益州（唐代四川省北部の称）の長史（州の次官）になられた時、自分は途中、名刺を通じて面会を求めたが、蘇公は自分を待遇するに布衣の礼を以てされ、部下の官吏たちに云はれるには『この人は天才英麗、筆をとれば中途で滞ることなく、その詩文は風力は未完成だが、特殊の骨をそなへてゐる。これに学問を加へたら、司馬相如に比肩し得るであらう』と。またこの安陸郡の前の都督馬公（名不明）は朝野の名士であつたが、自分を一見すると礼を尽くして、奇才の名を許され、長史の李京之には『諸人の文はたとへれば、山に烟霞がなく、春に草樹のない如く物足りない点があるが、李白の文は清雄奔放で、名章俊語がつづいて起り、光明洞徹し、句々人を動かす』と。これは自分と親交ある元丹邱が親しく聞いて来たことである（元丹邱との交際は後述する）。蘇、馬二公が愚人ならばともかく、賢人だとすれば、自分もとりえがあると申さねばなるまい。」

といふ。この書はその内に記してゐる如く、李白の三十歳の時のものだから、開元十八年までの彼の閲歴はあらましこれで尽きてゐると見て良い。安陸に来て、許圜師の孫女を娶つてから三年が過ぎたといふからには、彼の安陸に来たのは開元十五年、二十七歳の時のことであつたと見ねばなるまい。益州の長史となつた蘇頌に途中で謁したことが事実ならば、蘇頌が宰相を罷められて礼部尚書に遷り、また俄かに益州大都督府の長史となつたのは、開元八年だ（「唐書」巻125）から、李白の、二十歳の時のことである。この中間の十年足らずが湖南・湖北方面から揚州・南京方面へかけての、遍歴に費されたわけである。

岷山での、隱遁生活は恐らくそれに先だつ数年間のことであらう。いづれにしても二十歳にして早くも、当時の大官であり、有名な文人でもあつた蘇頌から才能を認められた彼の得意は如何ほどであつたらう。

後年の奔放不羈の生活もまたこの青年時代から連続したものであつた。常時の揚州の全盛は、後代の人ではあるが、于鄴（于鄴）の小説「揚州夢記」につくされてゐる。さうしてこの小説の主人公で晩唐の詩人たる杜牧の作つた

落魄江南載酒行 江湖に落魄し酒を載ちて行く

楚腰織細掌中輕 楚腰 織細にして掌中に軽し。

十年一覺揚州夢 十年一たび覺む揚州の夢

贏得樓薄倖名 贏かち得たり青樓薄倖の名。

といふ詩は、読者に青春の儂さを切々と感ぜしめるが、李白の当年の放埒もこの類のものであったらう。李白自身に銀鞍白馬、得々としゆく少年貴公子を歌った詩が多いのも、後にひそかに当年の自らの姿をなつかしむ心から出たのであらう。

たしかにこの時期の作と推定されるものは多くない。「安州ノ李長史ニ上ル書」には「春、救苦寺ニ遊ブ詩一首十韻」「楊都尉ニ上ル詩一首十韻」「石巖寺ノ詩一首八韻」を見せると記し、確かに安陸に至るまでの作だと思はれるが、二首とも今は伝つてゐない。ちなみに救苦寺は常德府(湖南省)の西四支里にある寺で李白は洞庭湖畔に遊んだ時に立寄つたのであらう。

なほまた詩の題材によつてこの時期の作に違ひないと思はれてゐるものに「古風」五十九首中の「蟾蜍、大月に薄る」の句を以てはじめる一篇がある。この詩は玄宗皇帝が王皇后を廢したことを、諷してゐると思はれるから、そのことがあつた開元十二年七月の直後の作とすれば、李白がわづか二十四歳だつた時のものである。詩としてあまり面白くも思はれないが、二十四歳にしてこの風格を具へてゐたとすれば、安州の前の都督馬公の言葉も決してほめすぎとは云へなからう。

安陸の地は武漢三鎮の西北百余支里、雲夢沢の北に位し、北して信陽の三関を越えれば河南省で、洛陽への途に當る。李白が裴長史に、雲夢沢を見て計らずもここに留ることになつた、といつてゐるのは或ひは事實であらう。滞留の理由は、ここで許圜師の家に婿となつたからであつた。

許氏は安陸の名家で、圜師は高宗の顯慶四年に擢んでられて宰相となり、李義府、盧承慶および同族許敬宗と職を同じうした。帝の信任も篤かつたと見えて、龍朔元年九月には、皇后と共に李勣の家と其の家とに行幸があつた。李勣は太宗時代の武將として李靖とともに誰知らぬ者もない大功臣である。以て許圜師の寵遇を知るに足りよう。しかし早くもこの翌二年十一月には李義府の排斥によつて宰相を罷められ、虔州(江西省贛州)の刺史に左遷された。その後、相州(河南省彰徳)の刺史に遷り、上元中には再び中央に還つて戸部尚書に任ぜられた。「唐書」卷33及び「旧唐書」卷59)が、開元年間には存命の筈はなく、家はその子の代になつてゐたに相違ない。「唐書」の宰相世系表及び「旧唐書」に拠れば圜師には自牧、自遂、自正、自然の四子があつた。李白の舅となつたのはこの中の誰かであらう。

安陸時代の作と明らかに決定し得るのは、  
 「安陸ノ白兆山ノ桃花巖ニテ劉侍御縮ニ寄スル詩」、「安州ノ応城ノ玉女湯ノ詩」、「安州ノ般若寺ノ水閣ニ涼ヲ納レ薛員外又ニ遇フテ書フノ詩」

の三首である。李白の言によれば、彼のこの地に留まつたのは十年に近かつたから、作の亡くなつたものはこの数十倍に上つたのであらう。その他、湖北省の襄陽、荊州、武昌付近にも往来しただらうから、これらの地の詠物詩の或るものはこの期のもものと見て宜しからう。安州の三首はそれぞれ相当の出来であるが、その中、劉縮に寄せた詩のみを録しよう。

雲臥三十年 雲に臥すこと三十年

好閑復愛仙 閑を好みまた仙を愛す。

蓬壺雖冥絶 蓬壺<sup>23</sup>冥絶<sup>24</sup>すといへども

鸞鳳心悠然 鸞鳳心悠然<sup>25</sup>たり。

歸來桃花岩 歸り来る桃花岩

得憩雲窗眠 雲窓<sup>26</sup>に憩<sup>27</sup>うて眠るを得たり。

對嶺人共語 嶺<sup>28</sup>に対して人と共に語り<sup>29</sup>

飲潭猿相連 潭<sup>30</sup>に飲んで猿あひ連る。<sup>31</sup>

時昇翠微上 時に翠微<sup>32</sup>の上に昇れば

邈若羅浮巔 邈<sup>33</sup>バクとして羅浮<sup>34</sup>の巔<sup>35</sup>のごとし。

兩岑抱東壑 兩岑<sup>36</sup> 東壑<sup>37</sup>を抱き

一嶂・西天 一嶂 西天に横はる。

樹雜日易隱 樹<sup>38</sup> 雜<sup>39</sup>りて日隠れやすく

崖傾月難圓 崖<sup>40</sup> 傾きて月円<sup>41</sup>かなりがたし。

芳草換野色 芳草<sup>42</sup> 野色<sup>43</sup>を換<sup>44</sup>へ<sup>45</sup>

飛蘿搖春烟 飛蘿<sup>46</sup> 春烟<sup>47</sup>を搖<sup>48</sup>かす。<sup>49</sup>

入遠構石室 遠きに入<sup>50</sup>つて石室<sup>51</sup>を構<sup>52</sup>へ

23 蓬萊に同じ、仙境。

24 はるかに離れてゐる。

25 靈鳥に乗らうとの志はかほらない。

26 嶺こしに人と語りあひ

27 猿が手をつらねて溪の水を飲む。

28 山の八合目

29 はるかな様

30 広東省増城県にある山の名、晋の葛洪が仙術を修めたところ。

31 香のいい春の草が芽ぶいて野のありさまも改まり。

32 根なしのつたが飛ぶので春のかすみもゆらく。

選幽開山田 幽を選んで山田を開く。

獨此林下意 ひとりこの林下の意

杳無區中縁 杳として区中の縁なし。<sup>34</sup>

永辭霜臺客 永く霜台の客を辞し<sup>35</sup>

千載方來旋 千載<sup>36</sup>まさに來り旋らむ。

白兆山は安陸の西二十支里にあり、その山下に桃花巖があり、今もここに李白讀書堂がある由である。春日煦々たる丘陵中の坐臥は李白にとつては實蹟との交際よりはるかに楽しかつたらう。

襄陽は安陸の西三百支里にある。漢江の右岸に臨み、三國の諸葛孔明の隱棲の地なる隆中山もその西にある。李白は襄陽を訪れた時、必ずこの山にも行ったであらう。「襄陽曲」四首及び「襄陽歌」はここに成った。「襄陽歌」は各首、この地の旧蹟を述べ、高陽池、岷山、墮淚の碑を点出してゐる。「襄陽歌」は長篇だが、彼の傑作の一であり、詩酒を以て生涯とした彼の酒に対する觀念をよく表はしてゐるから引いて見よう。

落日欲沒岷山西 落日 沒せんとす岷山の西<sup>37</sup>

倒着接花下迷 倒まに「セツリ」を着けて花下に迷ふ。<sup>38</sup>

襄陽小兒齊拍手

襄陽の小兒齊しく手を拍ち

攔街爭唱白銅鞮 街を攔って争ひ唱ふ白銅鞮。<sup>40</sup>

旁人借問笑何事 傍人借問す<sup>41</sup>

何事をか笑ふと

33 深遠の様。

34 俗界の塵縁。

35 霜台は御史台。その役人たる侍御史劉綰の食客の意。

36 容易に得難い好機會として

37 襄陽の東南九里にあり。

38 上四下離

39 白帽、晋の山簡の故事を引く。

40 曲の名。

41 問つてみる。

笑殺山公醉似泥 笑殺す 山公<sup>42</sup>酔つて泥のごときを。  
 鷓鴣<sup>43</sup>ロジの杓 鷓鴣<sup>44</sup>の杯

百年三萬六千日 百年三万六千日

一日須傾三百杯 一日すべからく傾くべし三百杯。

遙看漢水鴨頭・遙かに看る漢水鴨頭<sup>45</sup>の緑。

恰似葡萄初發醋 あたかも葡萄の初めて発醋<sup>46</sup>するに似たり。

此江若變作春酒 この江もし變じて春酒と作らば

壘麴<sup>47</sup>便築糟邱臺 壘麴<sup>47</sup>すなはち築かん糟邱<sup>48</sup>台

千金駿馬換小妾

千金の駿馬は小妾<sup>49</sup>を換へ

笑坐雕鞍歌落梅 笑つて雕鞍<sup>50</sup>に坐して落梅<sup>51</sup>を歌はん。

車旁側挂一壺酒 車旁<sup>52</sup>かたはらに挂<sup>か</sup>く一壺の酒

鳳笙龍管行相催 鳳笙龍管<sup>52</sup>ゆくゆく相催す。

咸陽市中嘆黃犬

咸陽の市中に黃犬を嘆するは<sup>53</sup>

42 山簡。

43 鷓の形をした酒をくむひしゃく。

44 鷓鴣貝の杓。

45 鴨の首の毛のやうな緑色をしてゐる。

46 醱酵する。

47 つみかさねた麴。

48 殷の紂王が酒の粕で罎を築いたやうにつてなを築かつ。

49 後魏の曹彰の故事。

50 玉をちりばめた鞍。

51 曲の名。

52 笙と笛と。

53 秦の宰相李斯は刑場に牽かれるとき、子にいった「吾なんぢとまた黃犬を牽いて上蔡の東門を出で狡兔を逐はんと欲するもあに得へけんや」と。

何如月下傾金壘 なんぞしかん月下に金壘を傾くるに。

君不見晉朝羊公一片石 君見すや、晋朝の羊公の一片の石<sup>55</sup>

龜頭剥落生莓苔 龜頭剥落して莓苔を生ず。<sup>56</sup>

淚亦不能爲之墮 涙もまたこれがために墮つる能はず

心亦不能爲之哀 心もまたこれがために哀しむ能はず。

清風明月不用一錢買 清風明月<sup>58</sup>

一錢も買ふを用ひず

玉山自倒非人推 玉山おのづから倒る、人の推すにあらず。<sup>59</sup>

舒州杓力士鎗 舒州の杓 力士の鎗<sup>61</sup>

李白與爾同死生 李白なんぞと死生を同じくせん。

襄王雲雨今安在 襄王の雲雨いまいづくにか在る<sup>62</sup>

江水東流猿夜聲 江水は東流し猿は夜声<sup>な</sup>く。

この詩をよむと、大伴旅人の「讚酒歌」十三首がただちに連想されるが、これは更に徹底してゐる。古の山簡の如く襄陽の街上を小児から歌ひはやされつつ蹠跟と歩み、人生三万六千日、一日に三百杯を傾けて一千万杯を飲み尽さんと願ひ、漢江を望見してその色よりこれがすべて酒と変ずればと連想し、威勢天下を圧した秦の宰相李斯、頌徳碑を建てられた晋の名吏羊祜のいづれたるをも願はず、酒器を指してなんぞと死生を共にせんといふあたり、誠に酒仙の名にそむかない。ただ遺憾なのは私が全然の下戸で、この詩の真の趣は遂に解し得ないのでないかといふことである。

54 雲雷の形を画いた酒樽。

55 晋の時の太守羊祜。死後その頌徳碑が岘山に立ち、みるものみな悲嘆したので墮涙碑といはれた。

56 碑をのせた龜の頭。

57 莓は苔に同じ。

58 また朗月に作る。

59 嵇康の酔つた様は、玉山のまさに崩れんとするやうだったと。

60 舒州は今の安徽省潜山、酒器の産地。

61 今の江西省南昌より産した力士の形を刻した酒器。

62 楚の襄王と恋愛した巫山の神女は朝には雲となり夕には雨となつたと。恋愛もはかなしとの意。

李白と孟浩然とが知己になったのもこの頃であらう。孟浩然諱は浩、この襄陽の人で、字を以て知られてゐる。永く鹿門山に隱棲してゐたが、四十にして長安に遊び、太学で詩を賦したところ、一座が感嘆して對抗しようとするものもない。張九齡、王維に崇敬せられ、一度宮廷に導かれて入ったら、俄かに玄宗皇帝が出御になった。孟浩然是無位の身とてこれを避けようとして、牀下に匿れた。王維が事実を申上ると、帝は喜んで曰く

「朕その人の名を聞いて未だその人を見なかった」と。詔して牀下より出でしめ、その詩を誦せしめたが、「不才にして明主も棄つ」といふ句に至つて、玄宗は不快がり還らしめた。また韓朝宗と共に長安に赴くことを約束しながら、友人と酒を飲む方に氣をとられて、遂に赴かなかつたため、その怒を買つたこともある。この人が李白と相許したであらうことは想像に難くない（『唐書』巻203）。

孟浩然の死は開元二十八年であり、その時、年五十二であつたといふから、この四十歳の出盧は、李白の二十八歳であつた開元十六年のことである。安陸にゐた李白が襄陽の鹿門山に彼を訪ねた時の作と思はれるものに、「孟浩然二贈詩」があり、その後、彼がおそらく都に赴くために広陵（揚州）に向つた時には、武昌の黄鶴樓で宴を開いて送つてゐる。

黄鶴樓送孟浩然之廣陵 黄鶴樓に孟浩然の広陵にゆくを送る

故人西辭黄鶴樓 故人西のかた黄鶴樓を辞し

烟花三月下揚州 烟花三月 揚州に下る<sup>63</sup>

孤帆遠影碧空盡 孤帆の遠影 碧空に尽き

唯見長江天際流 唯だ見る 長江の天際に流るるを<sup>64</sup>

この詩は李白の絶句の例にもれず、見事な作で、東に去る友の孤帆を見送る離愁がよく表はされてゐる。二人の交情が決して薄くなかつたことも明らかである。

孟浩然に怒つた韓朝宗は、中宗玄宗の代に二度襄州の刺史となつた韓思復の子である。思復は地方官として名声あり、その死するや玄宗は親ら碑に題して「有唐ノ忠孝ノ韓長山之墓」といひ、孟浩然等も碑を峴山に立てた。朝宗は初め右拾遺（諫官）となつて、屢々諫言を呈し、次いで荊州の長史となり、開元二十二年には襄州の刺史となつた。李白は荊州の長史たりし彼に知られたのである。大体、朝宗は人を識るの明があり、後進を抜擢することが多かつたから、当時の士人は喜んでこれに帰したのである。その有様は李白の「韓荊州二与フル書」にも見えてゐて

「白聞クナラク、天下ノ談士、相聚レバ言ツテ曰ク『生キテ八万戸侯ヲ用ヒズ、タダ願ハクハ一タビ韓荊州ニ識ラレンコトヲ』ト」

<sup>63</sup> 霞たち花ひらく三月  
<sup>64</sup> 天のはて

とある。李白もこの風潮に促されて、会ひたがったのである。ただし朝宗は大した人物ではなく、開元の終りに、訛言が起つて、天下に乱が生ずるゆゑ、官吏はみな世を避ける計をしなければならぬ、といふのを聞いてこれを信じ、終南山に隠れてゐたのを告発されて左遷されたこともある。李白も彼から特別な待遇は受けなかつたであらう。

いま一つ安陸時代の李白にとって重要なことは道士胡紫陽やその弟子元丹邱等との関係であるが、これは後に李白と道教との関係を述べる際にゆづることとする。

安陸にゐる中に、李白は夫人許氏との間に一男一女を儲けた。男児を明月奴といひ、女兒は嫁したが早死した。この明月奴は前述の伯禽とは別人で、異母兄に当ることはほぼ確実である。

かくて安陸の十年は、彼をして詩人として成立せしめ、妻子を支へたが、不羈奔放なる詩人はここに生涯を託すべくもなかつた。彼の遍歴はその三十五歳なる開元二十三年ころから再び始まつた。



## 四 戦ひの詩

### 四 戦ひの詩

李白が安陸を去った理由は明らかでない。既に二人の子までなした妻のいる地を去るには、何らかの理由があったので、芭蕉の如く風雲に誘はれたのではなからうと思はれるが、彼自身はこれについて、何ら語ってゐない。しかし彼がこの後、三度も娶つてゐることや、再びと安陸へ赴いた様子のないことから、許氏一家との不和が原因かとの想像が可能である。

安陸を去った彼がまづ赴いたのは、北のかた并州(唐代北都とも称するの太原)である。ここに行った理由は、安陸時代に嘗つて洛陽に遊び、天津橋南の酒樓で知合となり、のち随州の道士胡紫陽の所にも共に遊んだことのある元某から、その父がこの時、北都尹(長官)として并州にあるとて、誘ひを受けて同行したもののやうである。この交友と太原での饗応と、城西の祠にもに見物に行った時の趣とは、元某が後に譙郡(安徽省亳縣)の參軍となつてから贈つた「旧遊ヲ憶ヒ譙郡ノ元參軍ニ寄ス」といふ長詩に見えてゐる。

太原は北のかた直ちに塞に接し、東突厥に対する作戦上の基地として、奚や契丹の侵入に備へる幽州(北京)と共に、唐代の北方の重鎮をなしてゐた。南方の揚子江流域ののどかな眺めとは趣を全く異にした北方の風物、とりわけ塞に上つて北望した時の荒涼たる胡地の様は、詩人の胸を種々の感慨で躍らせたに相違ない。また各地に転戦した将兵の手柄話も酒宴の間に聴かれたであらう。李白の長ずる所とした塞上の詩も、ここでの感興をもととして生れたものがあらう。

開元の末年は唐の国勢の概も振つた時であつた。内の太平はしばらく措く、外に向つての征伐は殆ど功を奏せぬはなかつた。この大唐の勢威は「旧唐書」の「玄宗本紀」が非常な名文を以て頌へてゐる。

「コノ時ヤ、烽燧(のろし台)驚カズ、華戎軌ヲ同ジウシ、西蕃ノ君長八繩橋ヲ越エテ、競ヒテ玉關ヲ款キ、北狄ノ酋渠八羣幕ヲ捐テテ、争ヒテ雁塞(地名)ニ趨ク。象郡・炎州ノ玩、雞林・鯤海ノ珍、象胥(通訳官)ニ結轡シ、典属ニ駢羅(馬を並べ)セザルナク、丹墀(天子の殿階)ノ下ニ膜拜シ、立杖ノ前ニ夷歌ス。冠帯百蛮、車書万里ト謂フベシ。」

実際、朝鮮半島は高宗の代には全く服属し、新羅王は北隣の渤海王とともに、王子を遣して朝貢し、その西隣のツングースと蒙古の雑種な契丹の二酋長はいつれも李姓と公主とを賜つて帰順の意を示し、更に今の全蒙古地域に国を建て、唐と対抗する勢を示したトルコ族の突

厥も、ビルゲ可汗の即位後は和親策を採つたし、チベット人は先年、唐の將軍に青海のほとりで破られてから、唐を侮ることをしなくなった。また南の南詔、安南はともに恭順であり、カントウ広東の港では波斯やアラブ大食の商人が五色の鸚鵡や獅子を朝廷への献上物として貿易を願ひ出る。これがほ開元二十三年の唐の対外関係のあらましであつた。ただし西北の守備は一日も撤することは出来ないが、この方面を守る將兵の意気は盛んであつた。李白もこの前線に近い太原に来て、これらの有様を見聞し、豪壯雄大な詩想を得たであらう。唐代の戦ひの詩では自ら塞外に従軍した高適や岑参センセンの作品がすぐれてをり、王昌齡も巧みであつた。しかし僅々数句の中に大規模の場景を盛る手際に至つては、李白になふものがなかつた。人口に膾炙した多くの傑作がかくて作り出された。それらの中いくつかをあげて見よう。

代馬不思越 代馬は越を思はず<sup>65</sup>

越禽不戀燕 越禽は燕を恋はず<sup>66</sup>

情性有所習 情性習ふ所あり

土風固其然 土風もとよりそれ然らむ。

昔別鴈門關 昔は鴈門の関に別れ<sup>67</sup>

今戍龍庭前 今は龍庭<sup>68</sup>の前に戍(まも)る。

驚沙亂海日 驚沙<sup>ケイサ</sup>海日を亂し<sup>69</sup>

飛雪迷胡天 飛雪胡天に迷ふ。

蟣虱生虎鶻 蟣虱<sup>キシツ</sup>虎鶻<sup>コカヅ</sup>に生じ<sup>70</sup>

心魂逐旌旗 心魂<sup>セイセン</sup>旌旗<sup>セウ</sup>を逐ふ。<sup>72</sup>

苦戰功不賞 苦戦すれども功 賞せられず

忠誠難可宣 忠誠<sup>シュウテイ</sup>宣<sup>イ</sup>ふべきこと難し。

65 山西方面産の馬は浙江方面をなつかしからないし。

66 浙江方面の鳥は河北方面をこひしがらない。

67 山西省代県の雁門山上の関

68 匈奴の天地を祭る場所

69 騒ぎ立つ沙塵で北海の上の目も暗くなり

70 だにとしらみ

71 後漢の時、近衛兵は冠にやまどりの尾をつけ、服には鹿の絵が描いてあつた、ここでは丘士の衣冠の意。

72 心は軍旗やさしものあとばかりつけてゐる。

誰憐李飛將 誰か憐れむ李飛將<sup>73</sup>

白首没三邊 白首<sup>74</sup>にして三邊<sup>75</sup>に没するを。

「古風」五十九首中の第六である。杜甫の「前出塞」「後出塞」「兵車行」などと併せて、征伐のために人民の疲弊したことを諷した詩といはれる(統国訳漢文大系「李太白集上」<sup>56</sup>頁の久保天随博士の説)が、私はさう取るのは当たらないと思ふ。将士の労多くして報いられること少なきを憐れんであるが、自己及び唐の皇室の祖先と称する李広などを例に引いたため、他の意味も加はって来てあなたがち反戦の詩とも見られない。

同じく「古風」の第十四も戦争を題材としてある。

胡關饒風沙 胡關には風沙饒<sup>76</sup>く

蕭索竟終古 蕭索<sup>77</sup>つひに終古<sup>78</sup>。

木落秋草黄 木落ちて秋草黄なれば

登高望戎虜 高きに登りて戎虜(西方のえびす)を望む。

荒城空大漠 荒城むなく大漠

邊邑無遺堵 邊邑には遺堵だになし。<sup>79</sup>

白骨・千霜 白骨千霜<sup>80</sup>に横はり

嵯峨蔽榛莽 嵯峨<sup>81</sup>として榛莽<sup>82</sup>蔽はる。

借問誰陵虐 借問<sup>83</sup>す誰か陵虐する

73 漢の李広

74 白髪頭

75 中国の北辺、幽州、并州、涼州

76 北の蛮族の侵入を守る関

77 ものさびしい様

78 古より永久にかうである。

79 辺地の町の城は崩されて垣さへ残ってゐない。

80 千年

81 高く積み重って

82 やぶ草むら

83 馬鹿にしていちめる。

天驕毒威武 天驕威武を毒す。<sup>84</sup><sup>85</sup>

赫怒我聖皇 我が聖皇を赫怒せしめ<sup>86</sup>

勞師事鼙鼓 帥を勞して鼙鼓を事とす。<sup>87</sup>

陽和變殺氣 陽和 殺氣に變じ<sup>88</sup>

發卒騷中土 卒を發して中土を騷がしむ。<sup>89</sup>

三十六萬人 三十六万人

哀哀淚如雨 哀哀として淚雨のごとし。

且悲就行役 かつ悲んで行役に就く

安得營農圃 いづくぞ農圃を営むを得ん。

不見征戍兒 征戍の児を見ずんば

豈知關山苦 あに關山の苦を知らんや。

李牧今不在 李牧いま在らず

邊人飼豺虎 邊人豺虎を飼ふ。<sup>90</sup>

この詩は三十六万人を發して築造したといふ秦の万里の長城の址を見ての感慨に加へて、戦国の趙の李牧のやうな名将のいまぬないことをそしつてゐるのであつて、愛国の情は見られるがあなたがち反戦の詩とはいへまい。李白の詩でそれに当るものがあるとすれば「戦城南」であらう。

去年戰桑乾源 去年は桑乾の源に戦ひ

84 匈奴の単于は自らのことを天の驕子といつた。

85 たけく勇ましい力を悪用する。

86 ばげしく怒る。

87 軍用のつつみ

88 あたかかないなこやかな気

89 中国

90 豺や虎を飼つてゐるのと同じく危険な思ひをしてゐる。

91 山西省大同のころを流れる河

今年戰葱河道。 今年は葱河の道に戦ふ。

洗兵條支海上波 兵を洗ふ條支の海上の波

放馬天山雪中草 馬を放つ天山の雪中の草。

萬里長征戰 万里長しく征戦し

三軍盡衰老。 三軍ごとごとく衰老す。

匈奴以殺戮爲耕作 匈奴は殺戮をもつて耕作となす

古來唯見白骨黄沙田 古來ただ見る白骨黄沙の田。

秦家築城備胡處 秦家 城を築いて胡に備ふるの処

漢家還有烽火然。 漢家また烽火の燃ゆるあり。

烽火然不息 烽火燃えて息まず

征戰無已時。 征戦已む時なし。

野戰格鬪死 野戦に格鬪して死す

敗馬號鳴向天悲。 敗馬<sup>94</sup>

号鳴して天に向つて悲しむ。

烏鷲啄人腸 烏鷲 人腸を啄み

脚飛上挂枯樹枝。 脚み飛んで上り枯樹の枝に挂(か)く。

士卒塗草莽 士卒 草莽に塗るも<sup>95</sup>

將軍空爾爲。 將軍むなしくしかなす。

乃知兵者是凶器 すなはち知る兵はこれ凶器

92 葱嶺すなはちパミール高原から流れ出る川、黄河の上流と考へられてゐた。

93 第二章生立ちの条に記した如くイラン方面か。

94 戦死者のつれてゐた廢馬

95 戦死して草原に肝腦膏血をぬりつける。

聖人不得已而用之。 聖人已むを得ずしてこれを用ふるを。<sup>96</sup>

「戦城南」はもともと漢の楽曲で、君のため戦死するも意としない、との歌であったのをかういふ風に作り、最後には道教の中心思想をなす無為から考へれば、「已むを得ずして用ふる兵」が、はたしていまその本義になつてゐるか、どうか反省せしめようとしてゐる点、なかなか意義があり、杜甫の「兵車行」などにも劣らない。

しかし李白の戦ひを取材した詩にはこんなのは珍しい。「行行且ツ遊獵篇」、「胡二人無し」、「出自劔北門行」、「従軍行」、「白馬ヲ発ス」、「紫驪馬」、「塞下曲」など沢山ある戦ひの詩は概ね勇壮で戦士を鼓舞し、督励し、賞讃する側にまはつてゐて、この点、やはり戦争に反対する儒教の側からも非難されよう。とりわけ問題になるのは杜甫との比較から来る非難である。杜甫は忠君愛国者であるが、「人民に関心をもち、一個の人民を愛する政府のあることを希望し、この希望のかなへられんことを皇帝の身上に寄せた」(馮至「杜甫伝」頁)として、その忠君をば中共の文学史家からも認められてゐる。これに反し、李白は酒と女とのみに関心をもちてゐたといはれるのであるが、私はこれらの戦争詩がやはり愛国者としての李白の姿を伝へてゐるのだと思ふ。戦争の惨苦、とりわけ崩壊に瀕した唐の国内状況に暗かつたとの非難は、天宝十載ごろまでの盛唐の時代につたふ詩人に責める方が無理である。とまれ李白が感歎し後世に伝へようとした唐の将兵の勇敢をつたふ詩として、「胡二人無し」一篇だけでも代表として挙げておかう。

嚴風吹霜海草凋 敵風霜を吹いて海草凋む。<sup>97</sup>

筋幹精堅胡馬驕 筋幹精堅にして胡馬驕る。<sup>99</sup>

漢家戰士三十萬 漢家の戰士三十万

將軍兼領霍嫖姚 將軍兼ねて領す霍嫖姚。<sup>100</sup>

流星白羽腰間插 流星白羽を腰間に挿み。<sup>101</sup>

劔花秋蓮光出匣 劔花秋蓮 光 匣を出づ。<sup>102</sup>

96 「六韜」や「老子」に見える語

97 冬のきびしい風

98 北海の草

99 弓の各部が冬になると完全に腐り、

100 漢の名將、嫖姚校尉霍去病のごとき部下を將軍は多くつれてゐる。

101 流星のごとく早くとぶ白羽の矢

102 蓮花のやうなほひのある劔を箱からとり出して帯びてゐる。

天兵照雪下玉關 天兵雪を照して玉関を下れば<sup>03</sup>

虜箭如沙射金甲 虜箭沙のごとく金甲を射る。

雲龍風虎盡交回 雲龍風虎のごとく交回し<sup>105</sup>

太白入月敵可摧 太白月に入つて敵摧くべし。<sup>106</sup>

敵可摧 旄頭滅 敵擢くべし 旄頭滅す<sup>107</sup>

履胡之腸涉胡血 胡の腸を履み胡血を渉る。

懸胡青天上 胡を懸く青天の上

埋胡紫塞旁 胡を埋む紫塞の旁。<sup>108</sup>

胡無人 漢道昌 胡に人なく 漢道昌なり

陛下之壽三千霜 陛下の寿三千霜。

但歌大風雲飛揚 ただ歌はんだ風 雲飛揚す

安得猛士兮守四方 いづくんぞ猛士を用ひて四方を守らしめんと<sup>109</sup>

李白の詩中、王昭君のことを引いたものが多く、直接これを題材にした作も三首ある。即ち「王昭君」といふのが二首と「于闐(ウテン)花ヲ採ル」の詩がそれである。これらの詩が出来たについては当時の対外関係が働いてゐる。唐人は必ずしも戦争ばかり好んだわけではないので、外交にも力を用ゐてゐる。ただし中国と自ら称し信じてゐるからには平等な交際は考へられない。最も普通なのは豊かな産物や文化財を与へて懐柔するやり方で、わが遣唐使派遣などは大唐の文化に垂涎して行はれたのであるが、北西の勇敢な蛮族にはこれだけでは駄目だと、皇帝のむすめ、即ち公主またはこれに准ずるものをその酋長に賜はり、これによつて懐柔するといふ漢代以来のやり方が行はれた。玄宗は即

103 天子の兵

104 玉門関

105 雲龍陣、風虎陣などの陣形をかはるがはるとりかへ。

106 金星と月が合すれば勝利の兆か。

107 胡星の光がうせた。

108 秦漢のとりでは土の色が紫だったと。

109 漢の高祖の歌を引く。

位の後、たびたびこれを行つてゐるが、李白がこの事実からこれらの詩を作つたとすれば、天宝四載に帝の外孫揚氏を宜芳公主として、奚の  
主李延龍に、同じく独孤氏を静樂公主として、契丹の主李懷秀に嫁せしめたことが、これに当てはまる。当時、唐人の間ではかかる政策を屈  
辱として大なる反対があつたらうことは想像に難くない。李白も公主たちを隣れんでこれらの詩を作つたのかもしれない。しかし私はこれら  
の詩を必ずしもかかる政治的な意味で見ず、はじめて塞北の地を見た李白が、戦ひを想ふとともに、かかる荒涼の地に赴いて美貌を空しくし  
た悲劇の主人公王昭君を想ひ起したといふことも十分あり得ると思ふ。それゆゑこれをもここに録して置かう。

## 王昭君一首 王昭君一首

漢家秦地月 漢家秦地の月

流影送明妃 影を流して明妃を送る。<sup>10</sup><sup>11</sup>一上玉關道 一たび玉関の道に上れば<sup>12</sup>

天涯去不歸 天涯に去つて歸らず。

漢月還從東海出 漢月はまた東海より出づるも

明妃西嫁無來日 明妃は西に嫁して来る日なし。

燕支長寒雪作花 燕支<sup>13</sup>長く寒く雪は花となる蛾眉憔悴沒胡沙 蛾眉<sup>4</sup>憔悴して湖沙に没す。生乏黄金柱圖畫 生きては黄金に乏しく柱<sup>14</sup>けて図画せられ死留青塚使人嗟 死しては青塚<sup>15</sup>を留めて人をして嗟<sup>16</sup>かしむ。

昭君拂玉鞍 昭君 玉鞍を払ひ

110 月光

111 王昭君の昭が晋の文帝の名と同じとて、明君、明妃と呼ぶやうになった。

112 玉門関

113 山の名、匈奴の王庭があつた。ここから出るのでサフラン顔料を嚙脂といふと(江上波夫学士「ユウラシヤ古代北方文化」123-132頁)。

114 蛾眉柳腰明眸皓齒は美人の資格

115 王昭君の沙漠内の塚は草色常に青かつたので青塚といふと。

上馬啼紅頰 馬に上りて紅頰啼く。

今日漢宮人 今日漢宮の人

明朝胡地妾 明朝は胡地の妾。

この二首の中、後の方の絶句は李白の最傑作の一であり、また古来多くの王昭君を詠じた詩の中で最上のものである。周知の如く、王昭君の悲劇は詠史の好題目となり、中国のみでなく、我国でも漢詩を作る者の必ず詠ずるところで、「和漢朗詠集」にも王昭君の條がわざわざ設けてある。それら多くの詩の中、僅々二十字のこの五絶ほど、昭君の憐れな身の上と心境とを詠じ出したものはない。李白の天才は測り知られぬといって宜しからう(田中克己「王昭君の悲劇」楊貴妃とクレオパトラ 191頁)。前の方の詩も、後に掲げる「于闐花ヲ採ル」も、いづれも作品としては上々である。特に後者は王昭君に借りて、才ありて用ひられぬ己が身を嘆じたのであるから、別の趣も加はって面白い。

于闐採花 于闐花を採る

于闐採花人 于闐 花を採るの人

自言花相似 自らいふ花とあひ似たりと。

明妃一朝西入胡 明妃一たび西のかた胡に入れば

胡中美女多羞死 胡中の美女 多く羞ぢて死す。

乃知漢地多名姝 すなはち知る漢地の名姝<sup>16</sup>多く

胡中無花可方比 胡中に花の方比<sup>16</sup>ふべきなきを。

丹青能令醜者妍 丹青よく醜者をして妍<sup>17</sup>からしめ

無鹽翻在深宮裡 無塩<sup>18</sup>のかへつて深宮の裡<sup>18</sup>にあるを。

自古妬蛾眉 古より蛾眉を妬<sup>19</sup>み

胡沙埋皓齒 胡沙 皓齒を埋む。

116 美人

117 赤と青の糸のく

118 齋の宣王の妃で、有名な不美人

于闐は今の新疆省のコータンにあった国名であるが、李白はこれらの地名を引く時には実に無造作に引いてゐるから、別に深く咎めるに  
も当るまいが、王昭君の行った匈奴とはちがふ方面である。とまれ美人におのれをたとへた李白が得意の時は、後述する如く天竺の初の僅か  
な期間のみで、その前後おしなべて不遇であつたから、この感慨はいつのことと考へてもよい。

李白の太原滞在のいま一つの收穫として伝へられるものに、郭子儀との知己の交がある。郭子儀は後の汾陽郡王で、安祿山の乱後、契丹出  
身の李光弼とともに忠戦して、唐の天下を再興せしめた功臣であるが、この時は哥舒翰の部下の一將校であり、一隅に小さくなつてゐた。李  
白は彼を一見すると、すぐに座の中央に連れて来て、「この壯士は目の光が火のやうに人を照してゐる。十年とたたない中に大將軍となるだら  
う」といひ、またしばしば哥舒翰の叱責から庇つてやつた。この因縁から、後に李白が永王の謀叛に連坐して流刑となると、郭子儀が自分の  
賞とひきかへにその罪を贖つたのであるといふ(裴敬「翰林学士李公墓碑文」)。しかしこの話には少し誤りがある。郭子儀が哥舒翰の部下で  
あつたといふことは伝つてゐない上に、このころ哥舒翰は既に西方の軍を率ゐてゐたやうであるから、李白が太原方面で哥舒翰の一座に入つ  
て飲んだことはあり得ない。ともかくこの話は、李白が太原で軍人たちと交際してゐたことを想はずものである。

太原での作と考へられるものは、いま一つあつて「太原ノ早秋」がそれである。

歳落衆芳歇 歳落ちて衆芳歇み<sup>120</sup>

時當大火流 時は大火の流るるに當る。<sup>21</sup>

霜威出塞早 霜威 塞を出でて早く

雲色渡河秋 雲色 河を渡りて秋なり。

夢繞邊城月 夢は繞る邊城の月

心飛故國樓 心は飛ぶ故國の樓。

思歸若汾水 歸るを思ふこと汾水のごとく<sup>122</sup>

無日不悠悠 日として悠悠たらざるはなし。<sup>23</sup>

119 一年も半ばすぎて

120 もろもろの花がなくなり

121 大火は心星ともいはれ秋七月から西に流れる。

122 太原を流れる黄河の支流

123 憂ふる様

この詩の示すやうに、南に輝く大火（蝎座アンタレス）の星を望み、南に下る汾河を羨んでゐる詩人は、秋が深まるとともに北方に居たままれずなつたことだらう。まもなく彼の姿は山東省で見出される。



## 五 徴に就くまで

### 五 徴に就くまで

山東は前述したやうに、四川の彰明とともに、李白の故郷の候補地となつてゐる処である。しかしこの二説に合理的な解釈をつけようとすれば、四川が実際の故郷であるが、李白の山東に住むことが永く、加ふるにこの地方には趙郡の李氏の一族が多くゐたので、杜甫も誤つて彼を山東の人と認めたのだ、と、でもすれば宜しからう。李白の滞留の永かつたことは、彼がここで一人を娶つて、一男を生んだことで知られる。彼は先に許圜師の孫女を娶つたが、恐らくこれとは離縁したのであらう、再び劉氏を娶り、ここに於いて三たび娶つたのである(魏・)。男児の名を頗黎といふ。頗黎は玻璃に等しく、ガラスのことで、このころには甚しく珍らしく寶石の扱ひを受けたものであり、それが愛児の名に付けられた理由である。この子はのちには伯禽と呼ばれた。この地では実はもう一人、女兒が生れ、伯禽の姉で、平陽と呼ばれたことは、後に金陵での作といはれる「東魯ノ二稚子ニ寄ス」といふ詩によつて知られる。仙人李白は骨肉を歌ふことが杜甫より稀であるから、この詩はその意味でも珍重されねばなるまい。曰く

呉地桑葉・ 呉地桑葉緑に

呉蠶已三眠 呉蚕すでに三眠す。

我家寄東魯 わが家東魯に寄す

誰種龜陰田 誰か種つる龜陰の田。

春事已不及 春事すでに及ばざらん<sup>124</sup>

江行復茫然 江行また茫然。<sup>125</sup>

<sup>124</sup> 春の農事はもう手おくれだらう。

<sup>125</sup> 揚子江辺の旅もはるかな道のりだ。

南風吹歸心 南風 帰心を吹き

飛墮酒樓前 飛びて墮つ酒樓の前。

樓東一株桃 樓東 一株の桃

枝葉拂青煙 枝葉 青煙を払ふ。<sup>126</sup>

此樹我所種 この樹はわが種つるところ

別來向三年 別れてこのかた三年ならんとす。

桃今與樓齊 桃はいま樓と齊しきに

我行尚未旋 わが行なほいまだ旋らず。

嬌女字平陽 嬌女<sup>127</sup> 字は平陽<sup>あざな</sup>

折花倚桃邊 花を折りて桃辺に倚る。

折花不見我 花を折りて我を見ず

淚下如流泉 涙下ること流泉のごとし。

小兒名伯禽 小兒名は伯禽

與姊亦齊肩 姐とまた肩を齊しくす。

雙行桃樹下 ならび行く桃樹の下

撫背復誰憐 背を撫してまた誰か憐まん。

念此失次第 ここを念ふて次第を失し<sup>128</sup>

肝腸日憂煎 肝腸 日 憂ひに煎らる。

裂素寫遠意 素<sup>し</sup>を裂いて遠意を写し<sup>129</sup>

<sup>126</sup> 青い霞を払ふやうに立ってゐる。

<sup>127</sup> かあいむすめ

<sup>128</sup> 物事の順序がわからなくなり。

<sup>129</sup> 遠くにゐる者の気持

因之汝陽川 よりて汝陽川にゆかしむ<sup>30</sup>

私の好みからいへば、李白の詩が全部なくなつたとしても、この詩だけは留めておきたい。彼は無情な父である。家にゐても酒を飲むばかり。詩と仙とを語るばかり。生業をも修めぬ無頼の父である。旅に出て、三年と妻子の顔を見ないでゐる無常な父である。それがこの詩を作る。してみると、父としての愛情の表現には欠けたところがあるとはいへ、いやそれだけによけい恩愛の情は強かつたと見るべきである。この詩は詩として見るも、上々のものである。呉の地の桑と蚕とから歌ひ出したのもいい。日毎に行つてゐた酒樓を思ひ出し、その前の桃の花の時候といふことから、忽ちに家を思ひ出すところもいい。少女と少年とが桃の花の下で帰らぬ父を思つて慰めあふ、と一幅の絵のごとき状況を想像するのもいい。詩酒の仙人、閨怨と塞上とを歌ふに巧みだつた詩人、として以外に、父親であつた李白をもこの詩で知らねばならない。

「旧唐書」が記してゐる徂徠山の竹溪の六逸のことを、この時期のこととして考へるのも、可能である。六逸とは前述の如く、李白と孔巢父(ホ)・韓準・裴政・張叔明・陶沔の六人である。徂徠山は泰安県の南にあり、北の泰山と相對する。この山にゐたことと、先の詩に龜陰の田といふ句が出て来て、龜陰は龜山の北麓といふ意味であることから、李白の山東の住ひは任城(濟寧)ではなく、新泰県方面に移つたこともあるのかと思はれる。

竹溪の六逸のうち、孔巢父以外の伝記は不明だが、みな酣歌縱酒、古の竹林の七賢に倣つて放逸の士であつたことは疑ひない。孔巢父に關しては、「旧唐書」卷一百一十四に伝があり、「冀州の人で、字を弱翁といひ、早くより文章と歴史とを学び、韓準・李白らと徂徠山に隠れ、竹溪の六逸と称せられた。永王璘が挙兵したとき、その賢を聞き、召したが、巢父は永王の必ず失敗することを知つて、身を潜めて応じなかつたので、これによつて有名となつた。」

といふ。永王の幕府にゐて孔巢父に参加をす上める手紙を書いたのは、必ず李白であらう。孔巢父はのち徳宗皇帝から御史大夫として魏博宣慰使に任せられ、田悦といふ軍閥を宣撫したが、李懷光の兵に殺されたといふ。李白の友として、恥かしくない人物である。

李白には「韓準・裴政・孔巢父ノ山ニ還ルヲ送ル」といふ詩があり、この三人の徂徠山に歸るのを魯郡(兗州)の東門に送別した詩である。ここで注意しなければならないのは、李白と杜甫との交友もこの頃から始まつたことと思ふが、杜甫もこの六逸の一人なる孔巢父と交際があつたことで、「孔巢父ガ病ヲ謝シテ歸リ江東ニ遊ブヲ送り、兼ネテ李白ノ詩ニ呈スルノ詩」があるので明らかである。この詩は李白が江蘇・浙江方面にゐた頃の作には違ひないが、李白がそこにゐたのは天寶元年と十三載と二回あるので、いつれとも定め難い。ともあれ杜甫は開元二十六年、父の閑がこの兗州の司馬の官となつたので、この地に来て、「兗州ノ城樓ニ登ル」などの詩を作つてゐる。この時はまだ二十七歳で三十八歳の李白とは年齢の差はあるが、詩人として、またともに志を得ずして放浪の境涯にあるものとして、堅く結ばれたことと思ふ。

李白にも「魯郡ノ東ノ石門二杜ニ甫ヲ送ル」といふ送別の詩があり

醉別復幾日 醉別また幾日

登臨徧池臺 登臨 池台に徧し。

何言石門路 いづれの時か石門の路

重有金樽開 重ねて金樽の開くあらん。

秋波落泗水 秋波 泗水に落ち

海色明徂徠 海色 徂徠に明らかなり。

飛蓬各自遠 飛蓬おのおの自ら遠し

且盡手中盃 かつ尽せ手中の杯。

といて、杜甫の送別の酒宴に幾日も費やしたことが知られる。杜甫は洛陽の東なる鞏県キョウケンに生れ、兗州に来るまでに華中に旅行し、長安での試験を受け、この後も「斉趙ノ間ニ放蕩ス」といふ（「壯遊」）。しかし、後に述べる開封での李白との交友は、この杜甫の放蕩の期間の最後の時期であつて、それより前に兗州での交友があつたと考へて宜しからう。

兗州は、隋代に開かれた大運河による、当時の南北の往還の路からも隔つてゐず、立ちよるには極めて便利な地である。泰山に遊ぶもの、曲阜の孔子廟に詣でるもの、いづれもこの地を経由する。従つて李白はこの地に寓する中に交友ますます多きを加へた。

前掲の杜甫を送る詩の外にも「魯郡ノ堯祠ニ呉五ノ瑯琊ニ之クヲ送ル」「魯郡ノ堯祠ニ竇明府薄華ノ西京ニ還ルヲ送ル」「魯郡ノ北郭ノ曲腰ノ桑下ニ張子ノ嵩陽ニ還ルヲ送ル」「魯郡ノ堯祠ニ張十四ノ河北ニ遊ブヲ送ル」などは、いづれもこの地にあつて友を送る詩である。帝堯キョウを祀つた祠は、兗州の西二十五支里なる唐代の瑕邱県にあつて、遠くへゆく旅人を、李白はわざわざここまで送りに出て、祠前の酒樓茶亭で別れの杯をあげたのであらう。

これらの詩のうちも竇薄華を送る詩は、李白の詩の特徴をよく表はした雄篇であるとともに、彼の今後の動静を多少明らかにしてゐる。

朝策犁眉驪 朝に犁眉の驪に策てども

舉鞭力不堪 鞭を挙ぐるに力堪へず。

強扶愁疾向何處 強ひて愁疾を扶けていづこにか向ふ

角巾微服堯祠南角巾 微服 堯祠の南。

131 黒い眉をした黄色の駿馬  
132 隠者の被る角のある頭巾

長楊掃地不見日 長楊 地を掃つて日をば見す。

石門噴作金沙潭 石門 噴いてなる金沙の潭。

笑誇故人指絶境 笑つて誇る故人の維境を指すを<sup>133</sup>

山光水色青於藍 山光水色 藍よりも青し。

廟中往來來擊鼓 廟中 往來 来つて鼓を撃つ

堯本無心爾何苦 堯はもと無心 なんぞ何ぞ苦しむ。

門前長跪雙石人 門前には長跪す双石人

有女如花日歌舞 女あり花のごとく日に歌舞す。

銀鞍繡轂往復迴 銀鞍 繡轂 往いてまた廻り<sup>134</sup>

簸林蹶石鳴風雷 林を簸り石に蹶いて風雷鳴らす。

遠烟空翠時明滅 遠烟 空翠 時に明滅し<sup>135</sup>

白鷗歷亂長飛雪 白鷗歴亂 長く雪を飛ばす<sup>136</sup>

紅泥亭子赤闌干 紅泥の亭子 赤闌干

碧流環轉青錦湍 碧流 環轉す青錦湍。

深沈百丈洞海底 深沈百尺 洞海の底に<sup>138</sup>

那知不有蛟龍蟠 なんぞ知らん蛟龍の蟠るあらざるを。

君不見・珠潭水流東海 君見すや緑珠潭水 東海に流れ<sup>139</sup>

133 親友の實がいい景色だと指すのをにっこり笑って自慢してゐる。

134 貴人たちが銀鞍の馬や立派な車にのって来て

135 遠い霧や空の青色

136 みだれ飛んで

137 つらなり長く雪がとぶかと思はず。

138 この淵のつらなつてある百尺下の洞の海の底には。

139 晋の石崇の家には愛妾の名をとつた緑珠潭といふのがあつた。

・珠紅粉沈光彩 緑珠 紅粉 光彩を沈むるを。<sup>140</sup>  
 ・珠樓下花滿園 緑珠樓下 花 園に満ちしが

今日曾無一枝在 今日かつて一枝の在ることなし。

昨夜秋聲聞闔來 昨夜 秋声 闔闔<sup>141</sup>より来り

洞庭木落騷人哀 洞庭 木落ちて騷人<sup>142</sup>悲しむ。

遂將三五少年輩 つひに三五少年輩をひきゐ

登高遠望形神開 高きに登りて遠望すれば形神開く。<sup>143</sup>

生前一笑輕九鼎 生前 一笑して九鼎<sup>144</sup>を輕んぜしが

魏武何悲銅雀臺 魏武なんぞ悲しむ銅雀台<sup>145</sup>

我歌白云倚窗牖 我は白雲を歌うて窗牖(まど)に倚る。<sup>146</sup>

爾聞其聲但揮手 なんぢその声を聞いてただ手を揮ふ。

長風吹月度海來 長風 月を吹いて海を度りて来る

遙勸僊人一杯酒 是るかに僊人に勸む一杯の酒。<sup>147</sup>

酒中樂酣宵向分 酒中 樂酣<sup>148</sup>にして宵 分<sup>148</sup>に向ふ

140 その緑珠のべに白粉をつけた美しい顔も水に沈むがごとく見えなくなった。

141 天上の門、また西風。

142 洞庭湖畔で離騷を作った屈原をはじめとして詩人のこと。

143 身も心も。

144 三代伝国の宝とされた神器

145 魏の武帝曹操は銅雀台を建ててわが死後は愛妾たちをここに登らせ陵を望み見よと遺言した。

146 李白に白雲歌があり、山に帰る友を送ってゐる。

147 仙人に同じ

148 夜半を過ぎる。

舉觴酌堯堯可聞 觴を挙げて

堯に酌ぐ 堯よ聞くべし。

何不令臯譙擁簪・八極 なんぞ臯簪をして簪を擁し八極に横たへ

直上青天掃浮雲 ただちに青天に上つて浮雲を掃はしめざる。

高陽小飲眞瑣瑣 高陽の小飲 真に瑣瑣たり

山公酩酊何如我 山公の酩酊もなんぞ我にしかん。

竹林七子去道賒 竹林の七子 道を去り賒なり

蘭亭雄筆安足誇 蘭亭の雄筆いづくんぞ誇るに足らん。

堯祠笑殺五湖水 堯祠に笑殺す五湖の水

至今憔悴空荷花 今に至つて憔悴しむなく荷花(蓮)のみと。

爾向西秦我東越 なんぢは西秦に向ひ我は東越

暫向瀛洲訪金闕 しばらく瀛洲に向つて金闕を訪はん。

藍田太白若可期 藍田 太白 もし期すべくんば

149 臯陶に同じ、実は舜の臣と。

150 竹ばうき、ここでは彗星をその代りに用ゐると考へたらよからう。  
空の八方のはて

151 山簡は高陽池で毎日酔つてゐたが

152 細少にして卑賤

153 魏の時の阮籍・嵇康・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎は竹林の七賢と称せられた。

154 晋の王羲之は蘭亭の序を書いた。

155 太湖のこと、「悲歌行」にも范子何曾愛五湖とあり。

156 東海にある三仙島の

157 仙島にある黄金造の門をもつた宮殿

158 ともに長安方面にある山

159 汝のゆくこの方面で会つてよいと思つたら

爲余掃灑石上月 余がために掃灑せよ石上の月。

この詩には「時に久しく病み初めて起きて作る」といふ李白自身の註がついてゐる。この註どほり、詩の初めの方では馬の鞭をふりあげる力さへ失つてゐたことを述べ、次いですべての名利をすてて仙境に入るため東越、すなはち浙江方面へ赴くといつてゐるが、果して彼の姿はまもなく揚子江の流域に現はれる。

開元二十六年冬、潤州（江蘇省鎮江）の刺史齊澣は、揚州の南の瓜州から、揚子江（今の儀徵県の南）に至る二十五支里に亘る新河を開いた。伊婁渠と称せられる運河がこれである（「旧唐書」卷八玄叫「卷玄宗本紀」唐書「卷二〇〇齊澣伝」。この運河の開通からあまり隔らない、恐らく開元二十七八年に、李白はここに来てゐることが、その「瓜州ノ新河二題シ族叔ノ舎人賁二餞スル」といふ李賁の送別の詩で知られる。開元の年号は二十九年で終りとなり、天宝と年号が改まるが、その元年には、李白は四十二歳である。この年、彼は遂に望みを達して上京する。しかもこれが皇帝に召されてといふ最上の条件によつてであるが、この時、彼は、既に南の浙江省にあつた。ここは即ち東越の地であるから、竇薄華に述べた通りである。この方面へ来た確実な年はわからないが、浙江省でも会稽（紹興）から曹娥江を遡ること百支里の嵊県内にある剡溪にゐたことは、「旧唐書」の李白伝にある。

「天宝ノ初、会稽ニ客遊シ、道士呉筠ト剡中ニ隠ル、筠、徴サレ闕ニ赴キ、之ヲ朝ニ薦ム。筠ト俱ニ翰林ニ待詔タリ」とあることによつて知られる。「唐書」では呉筠とともに召されたと伝へる。

呉筠ならびに剡溪に関する詩は見られないが、会稽で作つたと思はれる名高い「越中懷古」等、浙江省の各地を歌つたものは存する。ただし李白は後にもまたこの方面に来てゐるから、国亡びて山河ありの情を歌つた「越中懷古」はその時のものと見る方が面白からう。

「旧唐書」の記事は呉筠がまつ単独で京に上り、李白を推薦して、そこで李白が徴されたのだとも解されぬが、おそらく「唐書」のいふやうに二人は同時に召されたのであらう。

召された李白は、当然、妻子と訣別して単独で上京するが、その時の心境を歌つた詩に、「南陵ニテ兒童ニ別レテ京ニ入ル」といふのと、「内ニ別レテ徴ニ赴ク」三首とがある。前者は次の通りである。

南陵別兒童入京 南陵にて兒童に別れて京に入る

白酒新熟山中歸 白酒あらたに熟して山中に歸る。

黄蕪啄黍秋正肥 黄蕪 黍を啄んで秋まさに肥えたり。

呼童烹雞酌白酒 童を呼び雞を烹て白酒を酌む

兒女嬉笑牽人衣 兒女は嬉笑して人の衣を牽く。

高歌取醉欲自慰 高歌し酔を取つてみづから慰めんと欲す

起舞落日爭光輝 起舞すれば落日 光輝を争ふ。

遊説萬乗苦不早 万乗<sup>62</sup>に遊説<sup>63</sup>する早からざるに苦しむ。

著鞭跨馬涉遠道 鞭<sup>つ</sup>を著け馬に跨<sup>またが</sup>りて遠道<sup>わた</sup>を涉る。

會稽愚婦輕買臣 會稽の愚婦 買臣を軽んず

余亦辭家西入秦 余もまた家を辞して西のかた秦に入る。

仰天大笑出門去 天を仰いで大笑して門を出でて去る

我輩豈是蓬蒿人 わが輩<sup>64</sup>あにこれ蓬蒿の人ならんや。

この詩で見ると、李白が妻子に別れたのは南陵(安徽省)の家のやうである。この時、李白の家がここにあったといふのは事実だらうか。  
「内二別レ徴二赴ク」を見ることとしよう。すなはちその三首の中、其一は

王命三徴去未還 王命三たび徴<sup>め</sup>し去らんとしていまだ還らず

明朝離別出吳關 明朝離別して吳関を出でんとす。

白玉高樓看不見 白玉の高樓は看るとも見えじ

相思須上望夫山 あひ思はばすべからく上るべし望夫山。

と妻との別れの情を詠じてあるが、吳関といひ、望夫山(宣城にあり)といひ、これも別れの地を安徽省内のやうに思はせる。また其の二は

出門妻子強牽衣 門を出づれば妻子強ひて衣を牽き

問我西行幾日歸 我に問ふ、西行して幾日か歸ると。

162 兵車万乗を出す国の君、天子

163 諸侯をたづね歩いておのれの説をすすめる。

164 よもぎなどの雑草に埋もれてしまふ人

歸時儻佩黃金印 歸る時もし黄金の印を佩びなば<sup>65</sup>

莫學蘇秦不下機 学ぶなかれ蘇秦の機より下りざるを。

166

と、蘇秦を自己にくらべて意気軒昂たるごとくであるが、第三首では

翡翠爲樓金作梯 翡翠<sup>ヒスイ</sup>を楼<sup>し</sup>となし金<sup>しかな</sup>を梯<sup>かけはし</sup>となせども

誰人獨宿倚門啼 誰人か独宿して門に倚りて啼く。

夜坐寒燈連曉月 夜坐には寒灯 曉月に連り

行行淚盡楚關西 行くゆく涙は尽く楚関の西。

といひ、別離の後、孤閨にある妻を歌ひ、同時に旅ゆく自分も日ごと涙を流すやうに歌つてゐる。しかしここでも楚関といつて、揚子江流域から長安へ赴くやうにいつてゐる。

「南陵別兒童入京」の詩には、また一に古意に作るのと註があるから、地名なども変へたのかとも思はれるが、「別内赴徴」の方はどうであらう。この後も妻子は山東にゐるのだが、一応これよりまへ宣城あたりに妻子を呼び、ここから李白が出発したあと、また山東へ歸つたのだとでも考へるより仕方あるまい。

李白のこの時の心持は、これらの詩の示すごとく、朱買臣もしくは蘇秦を氣づつてゐたやうである。朱買臣のことは有名だが、念のために記すと、漢代、会稽に生れ、家が貧しいのに讀書好きで、家業に励まない。薪を採つて売るのが仕事だったが、薪を負ひながらも本を読んでゐた。妻がまた薪をになつてついで来てゐたが、他人の嘲笑に氣をかねて、これをとめるといよいよ大声でよむ。たつと妻から離縁を申し出ると、「俺は五十になると富貴になる。今はもう四十余だ。おまへの苦しみは久しいが、富貴になったら報いてやらう」といったので、妻はますます怒つて離縁をむりにしてしまつた。しかし朱買臣は数年後には長安に行つて富貴の身となつた。のち会稽の太守に任ぜられたが、このとき武帝は「富貴にして故郷に歸らないのは繡を着て夜行くがごとしといふが、今そなたはどうだ」といつたといふ。この人のことは「今古奇觀」などの小説にもなるほど有名だが、李白自身は妻の愚かなことよりも、朱買臣と同じく長安へゆけばたちまち立身出世することの方に重きを置いたのだらう。しかし「別内赴徴」でも同じく悪妻をもつた蘇秦に思ひついでゐるところから見ても、李白も大酒壯語のたびに妻に叱られてゐたのかもしれない。

<sup>165</sup> 丞相や將軍の印は黄金。

<sup>166</sup> 戦國の蘇秦がはじめ諸侯に遊説し失敗して歸つて来たとき妻は織機より下りず嫂は炊かず父母はもの言はなかつた。

とまれ、この二人を自己に引きあてては、あまり縁起がよくないことを李白は知らなかったのだらうか。朱買臣はのちのち何度も官をやめさせられ、最後には武帝の命で殺された。「漢書」巻の四上し、蘇秦も六国の宰相を兼ねた得意の時は実に短かったからである。

南陵で妻子と別れたとすると、李白の長安への道筋は全く不明だが、もしこれらの詩を一応すてて考へると、彼の旅程は、会稽から潤州（鎮江）に出でて、揚子江をわたり、大運河を一路北上し、山東に寄って、ここで妻子と訣別したのではないかと思はれる。

事実、李白に「泰山二遊」といふ六首の連作があり、これには「天宝元年四月、故の御道より太山に上る」といふ註が付されてゐる。もとの御道といふのは、これにさきだつ開元十三年に、玄宗皇帝が泰山で封禪の儀を行ふために造られた道である。この註を信ずれば、ますます南陵での訣別が怪しまれる。

ともあれ天宝元年に、李白は前途の洋々たる希望と、一脈の不安と、別離の悲哀との混合した複雑な感情で、長安に向つての旅路についた。これらの諸感情のうち、はじめのものが最も強かつたであらうことは云ふまでもない。



## 六 大・都長安

### 六 大都長安

李白が山東に立ち寄ってから赴いたとしても、また南陵で妻子と別れて、蕪湖付近で長江を渡って陸路をとったとしても、路は洛陽あたりで一つとなる。洛陽から新安、澗池、陝州などと宿りを重ねると、靈宝県の西南で古への函谷関の故址を過ぎる。ここから潼関は程遠くない。潼関を過ぎれば、咸秦の地、すなはち陝西の盆地である。

華陰県に來ると右手は長安に通ずる渭水、左手には五嶽の一なる華山が見える。ここより少し西すれば驪山が見えて來る。いまの臨潼県、即ち唐代の新豊県の東手では、鴻門坡を過ぎる。有高い項羽と劉邦の鴻門の会の行はれた地である。秦の始皇帝の陵もこの辺りにある。やがて泉城の地に至れば、左手に温泉宮の舊が、金紅青さまざまの色を尽して松の間から見える。李白はこれらを一々指示されて、詩囊の益々肥えるのを覚えたであらう。臨潼を出て瀦水、澧水にかかる二橋を渡れば長安である、しかしそれよりも先に、巨大な城壁とその上に聳える北の皇城の諸建築と、南の大慈恩寺の塔と薦福寺の塔とが、鮮やかに眼に映じたことであらう。

かくて李白の車は長安城の東の正門たる春明門から城内に入る。さうして彼が呉筠とともにまづ行李を解いたのは、恐らく右街の輔興坊にあつた玉真觀の近くであつたらうと思はれる。玉真觀の主人なる玉真公主は睿宗の第十女で、玄宗の妹である。太極元年以来、出家して道士となり、ここに道觀を建てて住つてゐたのであるが、李白がこの皇女と親しかつたことは「玉真仙人ノ詞」といふ詩があり、その別館にもあつたことは「玉真公主ノ別館ニテ雨ニ苦シミ衛尉張卿ニ贈ル」といふ二首の詩があることで知られる。また魏・によれば、彼の噂が玄宗の耳に入り、翰林に召し出されることを得たのは、持盈法師のおかげだといふが、持盈とは天宝三載に玄宗から玉真公主に賜つた号であるから、この点からも公主と李白との密接な關係がうかがはれる。

李白と玉真公主との關係をひらいたのは、恐らく司馬承禎であらう。承禎、字は子微、開元中、道を以て帝に召された。その時、王屋山（山西省陽城縣）にゐたが、玉真公は帝の命によつてここへ使したことがある。この承禎（貞一先生）と李白とが江陵（荊州）で會つたことは、その「大鵬賦」の序に見えてゐるのである。

ただし周知の如く、秘書監賀知章が彼の「蜀道難」に感嘆して、これを謫仙人と呼び、玄宗に推薦したといふのも、否定する必要はある

まい。要するに玉真公主や呉筠等の道教関係の側と、賀知章との推薦が並び行はれて、李白は翰林に入ることを得たと考へればよいと思ふ。

玉真観のある輔興坊は皇城の安福門外にあり、西は開遠門に連る大路に面してゐる。往来に至便な所である。玉真観の東隣には、同じく帝の妹で、玉真公主の姉なる金仙公主のある金仙観があり、その南の頌政坊には龍興寺、建法尼寺、証空尼寺、昭成観等の仏寺道観が連り、北の修徳坊には玄奘三蔵が西域から帰つた後にゐた興福寺がある。西隣の祥成坊も仏寺尼寺ばかりである。李白は宿所をここに於て、絶えず長安の市の内外を見物かたがた出歩いてゐたことであらう。

李白と賀知章との交際は如何にして始まつたのだらうか。賀知章、字(あざな)は季真、会稽の永興(いま荆山県西)の人である。李白が召されたのは会稽からである。かかる点が二人の關係を暗示してゐるのかもしれない。また賀知章の伝記(「旧唐書」150中、「唐書」196)によれば、賀知章は晩年には狂態甚しく、みづから四明狂客、または秘書外監と号し、常に里巷に遊んだといふから、二人の邂逅を平康坊あたりの歌郷の巷に於いてであつたと想像すれば面白いが、實際は、長安の紫極宮(老子廟)に於いてであつたと、李白自身が述べてゐる(「酒二対シテ賀監ヲ憶フ」の序)。また苑伝正によれば、賀知章がはじめて見た李白の詩は「蜀道難」ではなくして、かの

姑蘇臺上烏棲時 姑蘇台上 烏棲<sup>167</sup>ふ時

吳王宮裏醉西施 吳王の宮裏 西施<sup>168</sup>を酔はしむ。

吳歌楚舞歡未畢 吳歌 楚舞 歡いまだ畢らざるに

青山欲銜半邊日 青山銜<sup>169</sup>まんとす半邊の日。 <sup>169</sup>

銀箭金壺漏水多 銀箭 金壺 漏水多し<sup>170</sup>

起看秋月墜江波 起つて看る 秋月の江波に墜<sup>170</sup>つるを

東方漸高奈樂何 東方やうやく高く樂しみをいかん。

といふ「烏棲曲」であるといひ、一説ではまた

167 吳王夫差の築いた台

168 越王が献じた美人

169 太陽の半ば

170 銅で造り銀の刻を示すしかけをもつ水時計から水が漏り多く、時刻がうつった。

## 烏夜啼

黄雲城邊烏欲棲 黄雲に城辺に烏棲はんと欲し<sup>171</sup>  
 歸飛啞啞枝上啼 歸り飛んで啞啞と枝上に啼く。

機中織錦秦川女 機中<sup>172</sup> 錦を織る秦川の女<sup>173</sup>

碧紗如烟隔窓語 碧紗<sup>174</sup> 烟のごとく窓を隔てて語る。

停梭悵然憶遠人 梭<sup>175</sup>を停めて悵然と遠人を憶ふ

獨宿孤房淚如雨 ひとり室房に宿して涙 雨のごとし。

といふ夫を遠くへやった妻の悲しみを歌ふ、李白の最も得意とした題材のものであったといふ。かくて攀づるすべもない月中の桂のごとく思はれた宮廷の門も、李白のために開かれた。彼がこのことを熱望してゐたことは、失官の後の煩悶からも容易に察せられる。謫仙人といはれたが、必ずしもさうではなかつたのである。李白が翰林に入つて、玄宗の寵遇を受けた有様を、李陽冰は次の如く伝へてゐる。

「天宝の初め、玄宗皇帝は詔を下して李白を召して、金馬門に入らしめ、ここで長くも輩を下りて徒歩で迎へられること、かの商山の四皓を漢の高祖が迎へた如くし、七宝の牀を以て食を賜ひ、み手づから羹をととのへて食べさせられ、宣ふには『卿(おんみ)は布衣(平民)なるに、その名が朕に知れたといふのは、もとより道義を蓄へたのでなければ、どうしてここに及ばう』と。金鑾殿に置き、翰林官の中に入れしめ、問ふに国政を以てしたまひ、ひそかに詔を草せしめたまうた。」

金鑾殿は漢代の名称で、唐代の右銀台門であらう。金鑾殿はこの門を入つたところにある御殿である。玄宗が賢士を優遇したことは「開元天宝遺事」にも多く見えてゐるから、李白に対して、かくの如き待遇があつたといふのも、あながち誇張と見るべきではなからう。元来、翰林院といふのは、玄宗が即位すると、張説(チヨウエツ)、陸堅、張九齡、徐安貞、張洎等を宮中に召し入れて翰林待詔といひ、政務をとる傍らに置いて、詔勅の草稿作成や検討に当らしめたものにはじまる。帝が大明宮にゐる間は金鑾殿にゐるが、興慶宮に行幸すれば、その金明門内にある。西内に行幸すれば顯福門内に当直し、東都洛陽や驪山の華清宮(温泉宮)に行幸の時もお傍を離れることがない。内宴では宰相の下、一品の上に席を占めるのである。李白がこの地位に就いた時の得意は想ひみるべきである。彼自身も後にこの頃の有様を追懐して、かつ歌つ

171 夕方に立つ雲、一説に地名

172 はたおりの道具

173 晋の竇滔の妻蘇氏、夫が秦州の刺史から流沙に徙されたとき、錦に詩を織つて贈つた。

174 窓かけの水いろの薄絹

175 はたのひ、横糸を通すくだ

176 なげく様

てみる。

漢家天子馳駟馬 漢家の天子<sup>177</sup> 駟馬<sup>78</sup>を馳せ

赤軍蜀道迎相如 赤軍もて蜀道に相如<sup>79</sup>を迎ふ。

天門九重謁聖人 天門<sup>80</sup> 九重<sup>81</sup> 聖人に謁し

龍顔一解四海春 龍顔<sup>82</sup>一たび解ければ四海 春なり。

彤庭左右呼萬歲 彤庭<sup>83</sup>に左右 万歳を呼ばひ

拜賀明主收沈淪 拜賀す 明主の沈淪<sup>84</sup>を收むるを。

翰林秉筆回英眄 翰林 筆を秉<sup>85</sup>つて英眄<sup>86</sup>を回らし

麟閣崢嶸誰可見 麟閣<sup>87</sup> 崢嶸<sup>88</sup> 誰か見るべき。 186

承恩初入銀臺門 恩を承<sup>89</sup>けて初めて入る銀台門

著書獨在金鑾殿 書を著<sup>90</sup>してひとり金鑾殿にあり。

龍鉤雕鏤白玉鞍 龍鉤<sup>91</sup> 雕鏤<sup>92</sup> 白玉の鞍 187

玄宗のことをたとふ。

四頭立ての馬車。

蜀出身の詩人司馬相如。李白のこと。

天子の門は九

聖天子

天子の顔

朱漆で飾った天子の庭

しづみおちぶれた賢人

かしこさうな目つきでながめまはし

誰も見られない立派な麒麟閣にも出入をゆるされた。

賜った名馬には玉を刻んだあぶみや白玉の鞍をおかせ。

象牀綺席黄金盤 象牀ソウシヨウ 綺席 黄金の盤。

188

當時笑我微賤者 當時わが微賤なるを笑ひし者  
却來請謁爲交歡 かへつて來つて謁を請つて交歡をなす。

…………… (從弟南平ノ太守之遙ニ贈ル其一)

實際、当時の李白の評判は大したもので、その「大鵬ノ賦」を作るや、長安の家々はみな一木を購ったといふ(魏・)。かくて彼は帝に扈從して華清宮にも赴いた。それは天宝元年か、二年か、いづれとも明らかにしないが例年の十月の巡幸の時であつたに相違ない。この時の作に「侍從シ温泉宮ニ遊宿シテ作ル」、「温泉ニ侍從シ歸リテ故人ニ逢フ」、「駕温泉宮ヲ去ルノ後楊山人ニ贈ル」等がある。これらの詩はいづれも平凡であるが、興味があるのは、二つめの詩では故友を帝に推薦しようといひながら、三首目では、その中に功業を立てた後、ともに山に入らうといつてゐることである。敏感な詩人には、早くも宮廷生活と自己の性格との矛盾が感じられながら、まだ全くはこれに失望してゐないのである。

李白はまた宜春苑への春の行幸に扈從し、詔に應じて詩を作つてゐる。宜春苑は興慶宮の内苑であらう。与へられた詩の題は「龍池柳色初青、聽新鶯百轉」といふのであつた。龍池はまた興慶池、九龍池なども云はれる。この詩は古風であるが、雄勁で帝王の春をたたへて余すところがない。

侍從宜春苑奉詔 宜春苑に侍從し、詔を奉じて、

賦龍池柳色初青 龍池の柳色はじめて青く、

聽新鶯百轉歌 新鶯の百轉を聴くの歌を賦す

東風已・瀛洲草 東風すでに緑にす瀛洲の草<sup>89</sup>

紫殿紅樓覺春好 紫殿 紅樓 春の好きを覚ゆ。

池南柳色半青青 池南の柳色なかば青青

禁烟裊娜拂綺城 烟を禁めくらせ裊娜シヨウワとして綺城を払ふ。<sup>91</sup>

188 象牙のこしかけ、絹の敷物、黄金の皿で食事する。

189 東海の仙境に比すべき宮苑

190 しなやかな様

191 美しい長安城

垂絲百尺挂雕楹<sup>92</sup> 垂糸百尺雕楹<sup>93</sup>に挂り

上有好鳥相和鳴 上に好鳥のあひ和して鳴くあり

間關早得春風情<sup>94</sup> 間関ばやくも得たり春風の情。

春風卷入碧雲去 春風 卷いて碧雲に入つて去り

千門萬戸皆春聲 千門 万戸みな春声。

是時君王在鎬京<sup>95</sup> この時 君王は鎬京にゐませば

五雲垂暉耀紫清<sup>96</sup> 五雲も暉<sup>ひかり</sup>を垂れて紫清に耀く<sup>97</sup>。

仗出金宮隨日轉<sup>98</sup> 仗は金宮を出でて日に随つて轉じ

天回玉輦繞花行<sup>99</sup> 天は玉輦を回して花を繞つて行く。

始向蓬萊看舞鶴<sup>200</sup> はじめ蓬萊に向つて舞鶴を看(み)

還過藍石聽新鶯<sup>201</sup> また藍石を過ぎて新鶯を聴く。

新鶯飛繞上林苑<sup>202</sup> 新鶯は飛びて上林苑 一上を繞り

願入簫韶雜鳳笙<sup>203</sup> 簫韶<sup>シヨウ韶</sup>に入つて鳳笙<sup>鳳笙</sup>に雜らんと願ふ。

192 糸のやうにされた枝

193 彫刻を施した宮殿

194 鳥の相和して鳴くさま

195 長安の古称

196 太平を表はす五色の雲

197 空のまんなか

198 天子の儀仗、儀式に用ひる武器

199 天子は立派な車をあちこちとやつて

200 東内の蓬莱殿に蓬莱池がある。

201 漢の未央宮内の宮殿

202 漢の武帝の苑、ここでは宜春苑をいふ。

203 舜の楽

玄宗皇帝の全盛の有様を美しい語句をつらねてたたへてあるので、皇帝をはじめ百官は感嘆して誦したことであらう。公務のひまをぬすんでは方々に遊んだことは、長安以外をうたふ詩で知られる。長安城の南の郊外の杜陵を詠じたものでは、「夕霽ル杜陵ニテ楼ニ登リテ韋繇ニ寄ス」といふ詩もいいが、次の絶句が李白の絶句の例にもれず傑出してゐる。

杜陵絶句

南登杜陵上 南 杜陵の上に登り  
北望五陵間 北のかた五陵の間を望む。  
秋水明落日 秋水 落日 明らかに  
流光滅遠山 流光 遠山に滅す。

杜陵は丘の名だが、五陵は漢の諸帝の陵である。それがただの風景の詩に墮しないで、感興を深からしめる。

長安の南につらなる終南山については、長安城の南門から望見しての「終南山ヲ望ミ紫閣隱者ニ寄ス」といふ詩のほかに、実際のぼつての

下終南山過斛斯山人宿置酒 終南山を下り斛斯山人の宿を過りて置酒す

暮從碧山下 暮に碧山より下れば

山月隨人歸 山月も人に隨つて歸る。

卻顧所來徑 かへつて來るところの徑を顧みれば

蒼蒼・翠微 蒼蒼として翠微に横はる。<sup>204</sup>

相攜及田家 あひ携へて田家に及べば

童稚開荆扉 童稚 荆扉を開く。

緑竹入幽徑 緑竹 幽徑に入り

青蘿拂行衣 青蘿 行衣を払ふ。<sup>206</sup>

歡言得所憩 歡言に憩ふところを得<sup>207</sup>

204 山のみどりのもやの中へ横に通じてゐる。

205 いばらでこさへた粗末なとびり。

206 青いつたが旅人の衣についてゐる塵を払ふやうにさはる。

207 主人のよろこびのことばに。

美酒聊共揮 美酒いさかともふるに揮ふるふ<sup>208</sup>

長歌吟松風 長歌 松風に吟じ

曲盡河星稀 曲尽くれば河星まれなり。<sup>209</sup>

我醉君復樂 われ酔つて君また樂しみ

陶然共忘機 陶然<sup>10</sup>としてとも11に機を忘る。

といふ詩がある。この詩は陶淵明の詩そつくりである。

李白はまた長安の東の灞陵に人を送別してゐる。ここは長安の人が東に行く人を送るために必ず行つた場所である。

灞陵行送別 灞陵行 別を送る

送君灞陵亭 君を送る灞陵亭

灞水流浩浩 灞水 流れて浩浩(コウコウ)たり。<sup>212</sup>

上有無花之古樹 上には無花の古樹あり

下有傷心之春草 下には傷心の春草あり。

我向秦人問路岐 われ秦人に向つて路岐13を問へば

云是王粲南登之古道 いふこれ王粲14の南登14の古道と。

古道連綿走西京 古道 連綿15として西京16に走り

紫闕落日浮雲生 紫闕17 落日に浮雲生ず。

のみほすことか。

209 銀河の星

210 心地よく酔ふ様

211 機事、世間のたくらみ

212 水の豊かなさま

213 路の分れ

214 後漢末の詩人、董卓の乱で荊州にのがれて七哀詩を作り、「南ノカタ灞陵ノ岸ニ登リ、首ヲ回ラシテ長安ヲ望ム」と歌つた。

215 長く連つてゐるさま

216 長安

217 帝宮の門

正當今夕斷腸處 正に当る今夕断腸の処

驪歌愁絶不忍聽 驪歌<sup>リカ</sup>愁絶<sup>218</sup> 聴くに忍びず。

この時、送別されたのは誰か知らないが、やがて李白自身もこの詩の通りに、断腸の思ひで長安城のかたをふりかへりながらここを過ぎてゆくのである。

長安に於ける李白といへば、誰しも考へるのは、あの有名な沈香亭(シヨウコウテイ)興慶宮内の龍池の東にあった)に於ける作詩である。このことは宋代の「太平広記」に最も詳しく見えてゐる。

「開元中に、宮中では初めて牡丹(ホウタン)を賞でるやうになり、紅、紫、薄紅、純白と四株できた。玄宗はこれを興慶池の東の沈香亭の前に移植した。あたかもその満開のときのことであった。玄宗は照夜白の馬にのり、楊貴妃は歩輦(ていしん)にのせられて、これを見に行かれた。このとき詔して梨園の歌姫の中から、すぐれたものを選び、十六部の楽を得た。李龜年といふ歌で有名だったものが、手に檀板をもち、楽人を指揮して、進み出て歌はうとした。この時、玄宗はのたまつた。

『名花を賞で、妃に向ふのに、どうして古い楽や詩が用ひられやつ』と。

最後に李龜年に命じて、金花箋をもって翰林供奉李白に詔し、その場で清平調の辞三首を作らしめられた。李白は欣然として勅旨を承り、宿醉(ぶつやく)のまだ醒めないのに苦しみながらも、筆をとって作り上げた。その辞にはいふ、

雲想衣裳花想容 雲には衣裳を想ひ花には容を想ふ<sup>220</sup>

春風拂檻露華濃 春風 檻(かざり)を払って露華濃かなり。

若非群玉山頭見 もし群玉の山頭に見るにあらずんば<sup>21</sup>

會向瑤臺月下逢 かならず瑤台の月下に向つて逢はん。<sup>22</sup>

一枝濃艷露凝香 一枝の濃艷 露 香を凝らす

雲雨巫山枉斷腸 雲雨 巫山 枉(ま)げて断腸。<sup>223</sup>

別れの歌

218 うれへてぎれぎれで

219 春の雲を見ればそのひとの衣裳を連想し牡丹の花を見てはそのひとの姿を連想する。

220 西王母のゐるといふ

221 西王母の宮

222 この濃艶牡丹に比すべき妃に比べると楚王が巫山の神女に断腸の想ひをなしたのもむりとさへ思へる。

借問漢宮誰得似 借問す 漢宮 誰か似るを得たる

可憐飛燕倚新粧 可憐の飛燕 新粧に倚る。 <sup>224</sup>

名花傾國兩相歡 名花 傾國 両ながらあひ歡ぶ

常得君王帶笑看 長く君王の笑を帯びて看るを得たり。

解釋春風無限恨 春風無限の恨を解釋して <sup>225</sup>

沈香亭北倚欄干 沈香亭北 欄干に倚る。

李龜年はこの詩を玄宗にたてまつった。帝は梨園の弟子に命じて、楽器の調子をあはせ、李龜年に命じて、歌はしめた。歌はれるあひだ楊貴妃は玻璃七宝の盃を手にし、西涼州の葡萄酒を酌みながら、詩の意味をさとって莞爾として喜んだ。玄宗はそこで玉笛の調子をととのへて自ら吹き、曲調のかはらうとするたびに、その声をゆるくして妃に媚びた。楊貴妃は飲みやめて、繡をした領巾をはずし、再拝して帝に謝した。帝が李白を見ることは他の学士と異った。

「太平広記」は小説の書であるが、この記事はほとんど当時の有様を正確に伝へてあるのであらう。牡丹にくらべられ、仙女に比へられる濃艶な美人と、玉笛を吹く帝と、太平の世をありありと偲ばしめる挿話であるが、この場面を歌ひ得て、賞讃を博した詩人の喜びは最大であつたらう。しかしこの太平は後わづか十年にして消えつせたのであり、李白自身はまたこの詩によって宮廷から逐はれることになつたのだといふ。

それはともかく、宿酔なほ醒めずして、しかもたちどころにかういふ詩を三首も成すとは、天才李白の面目を伝へてあますところがない。しかしかかることは唯一回ではなかつた。李白の詩の中、樂府の多くは、かやうな宮廷用に作られたのではないかと思はせるが、「宮中行樂詞」八首も「清平調詞」と同じく即席の作といふ。このことも小説「本事詩」に見えてゐる。

「玄宗はかつて宮中行樂するとき、高力士にのたまつた。『この良き時節と美しい景とに対し、音楽や遊びのみを娛みにできようか。もしすぐれた才能の詩人に詠じさせたら、後世に自慢できやう』と。遂に李白を召された。このとき李白は帝の兄の寧王に迎へられて酒を飲まされ、もう酔つぱらつてゐて、召されて宮中に来り、拜舞はしたものの頹然たる様であつた。帝は彼が声律を軽んずることを知つてゐたので、わざと宮中行樂をその上手でない、五言律詩十首に作らされた。李白は頓首していった。

『寧王、臣に酒を賜ひ、もう既に酔つてをります。もし陛下、臣に畏ることなくしていただけますなら、臣の伎倆を十分發揮させていただきます。』と。

<sup>224</sup> 化粧したてを誇りにしてゐる。  
<sup>225</sup> 消す。

帝はこれを許し、二人の宦官をしてこれを扶けさせ、墨をすり、筆をつるほさせて、これに与へ、また、二人の宦官をして朱の野紙を面前にひろげてもたせた。李白は筆をとり上げると、思ひついたまま筆をとめないで書き、立ちどころに十篇が成ったが、これは筆を加へた箇所もなく、しかも筆跡は強く、詩の出来は韻律といひ対偶といひ、完全でないものはなかった。」と。この十首の中、二首がなくなつたと見えるが、今のこつてゐる八首はみな即席の作とは受けとりかねる見事なものである。

その一はいふ。

小小生金屋 小小金屋に生れ<sup>226</sup>

盈盈在紫微 盈盈<sup>エイエイ<sup>227</sup></sup>紫微<sup>228</sup>にあり。

山花插寶髻 山花<sup>ホウケイ</sup>宝髻<sup>さしはき</sup>に挿み<sup>229</sup>

石竹繡羅衣 石竹羅衣に繡す。<sup>230</sup>

每出深宫里 つねに深宮の裏より出で

常隨步輦歸 常に步輦<sup>ホシム<sup>31</sup></sup>に隨つて歸る。

只愁歌舞散 ただ愁ふ 歌舞散じなば

化作彩雲飛 化して彩雲となつて飛ばんかと。<sup>232</sup>

と。官中の美人をさながら写生したかのやうである。その二はいふ。

柳色黄金嫩 柳色は黄金にして嫩<sup>わか</sup>く

梨花白雪香 梨花は白雪にして香し。

226 黄金つくりのやうな立派な家

227 しなやかに美しくなつて

228 天子の宮殿

229 みことな鬘には山の花をかざし

230 薄絹の衣にはなでしこの模様を刺繡してゐる。

231 人の曳く車、天子皇后の乗物

232 この女官があまり美しいので五色の雲に化しはしないかと思ふ。

玉樓巢翡翠 玉樓には翡翠を巢はせ。<sup>233</sup>

珠殿鎖鴛鴦 珠殿には鴛鴦を鎖す。<sup>4</sup>

選妓隨雕輦 妓を選んで雕輦に隨はしめ<sup>35</sup>

徵歌出洞房 歌を徵して洞房より出す。<sup>36</sup>

宮中誰第一 宮中たれか第一ぞ

飛燕在昭陽 飛燕は昭陽にあり。<sup>237</sup>

いづれも宮中の妃妾の美しさを、さながらの如く描き出してゐるが、ここでも第二に漢の成帝の寵した趙飛燕の名が見えてゐるのは注意すべきである。とまれ李白の天才はこれらのことによつて余すところなく示されたが、君主の前に酔を帯びて出ることの失態であることはいふまでもない。彼が永く宮廷詩人の地位を占め得ないであらうことは、これらの記事によつて予知し得る。

李白のかかる態度は他の貴顕に対しても現はれたに相違ない。「開元天宝遺事」は伝へていふ

「寧王に寵愛の歌姫があつた。容貌が美しいうへに歌が巧みであつた。王が宴会をする毎に、他の歌手はみな前に出したが、この女だけは見せたことがないので、客たちはみないくら飲んでも酔ふには至らなかつた。詩人李白は酔に乗じていった。

『私は久しい前から王には寵姫がありで、その方は歌が上手だと聞いてをります。いま酒にも肴にも飽いてみなさま方は宴に倦んでをります。殿下は、どうしてこの方を皆にお見せになるのに臆病なのですか』と。王は笑つて臣下どもに命じた。

『七宝の台をこさへて、かの者を屏風のうしろに呼んで、歌をつたはせる』と。

李白は起立して『お顔を見ることは許されなくても、お声をきかしていただければ幸せです』と礼をいった。と。寧王は前述の如く玄宗の兄である。この言が王を怒らしたとは記してないが、かやうな権貴を恐れぬ振舞は、彼にとつて実に危険なことであつたと云はねばなるい。

彼は長安の貴族の子弟とは実際に争つた。

唐の高祖が長安に都してから、もう百二三十年たつてゐる。王侯将相の子孫も既に多く、みな長安の市中や北郊の五陵に豪壯な邸宅を構へ、市中を闊歩して人もなげな振舞も多い。隋唐以来、寒士が門閥によらずして、官途につく途も開かれたとはいへ、それは極く少数のこと

<sup>233</sup> 鳥の名かはせみ、これにたくへられる美しい女官。

<sup>234</sup> をしどりにたくへられる美人

<sup>235</sup> 彫刻美しい天子の乗物

<sup>236</sup> 女官のへや

<sup>237</sup> 飛燕の妹の合徳のゐたのが昭陽舎

で、これらの少年こそは他日の政権の掌握者たるべき者である。彼等の驕慢の様は、李白自身もしばしば歌ってゐる。たとへば「少年行」の  
 ことがそれである。

五陵年少金市東 五陵の年少 金市の東 <sup>238</sup>

銀鞍白馬度春風 銀鞍 白馬 春風に度る。<sup>わた</sup>

落花踏盡遊何處 落花踏み尽していづくにか遊ぶ

笑入胡姬酒肆中 笑って入る 胡姫<sup>39</sup>の酒肆の中。

ところで李白は彼等との間に一場の悶着を起して、わづかに陸調といふものの処置によって事無きを得たことがある。すなはち「旧ヲ紋  
 シテ江陽ノ宰ノ陸調ニ贈ル」といふ詩に

我昔鬪雞徒 我はむかし鬪雞の徒たり <sup>240</sup>

連延五陵豪 五陵の豪を連延す。<sup>41</sup>

邀遮相組織 邀遮<sup>ユウシヤ</sup>してあひ組織<sup>12</sup>し <sup>243</sup>

呵嚇來煎熬 呵嚇<sup>カカク</sup>し来て煎熬<sup>センゴ</sup>す <sup>244</sup>

君開萬叢人 君は万叢の人を開き <sup>245</sup>

鞍馬皆辟易 鞍馬みな辟易す。 <sup>246</sup>

238 洛陽には三市あり、金市は西にあつた。ここでは長安の市をいふ。

239 イワン種の白皙緑眼の酌婦（石田幹之助「長安の春」）

240 「東城老父伝」に宮中に鶏房があり鬪鶏を飼ひそのため官に任せられる者があつたと。

241 つぎつぎと呼びよせるの意か。

242 道で待ち伏せする。

243 喧嘩をしくむ。

244 叱つたりあどしたり。

245 勢するどく迫り来る。

246 騎乗の少年たちがみな退散した。

告急清憲臺 急を清憲台に告げ<sup>247</sup>

脱余北門厄 余を北門の厄より脱す。

といふ箇所があつて、さすがの李白も、五陵の少年たちにとりかこまれて危く見えたのを、陸調が退散させ、また御史台の方へも告げてくれたといつてゐるのである。悶着の場所は長安の北門であつたといふが、双方とも胡姬の酒に酔つた上でのことであつたかもしれない。五陵の悪小にはせれば、李白とはそも何人ぞ、隴西の李氏、皇室の同族といふのは自称であつて、父の代に西域から来た素姓もしれない者ではないか。詩は巧みだといふが、その行ひは放蕩無頼、鬪雞の徒と異るところがない。わづかに玉真公主や賀知章らの推薦によつて、宮廷に入り得た新參の田舎漢ではないか、といふところであらう。従つてかかる事件によつて貴族達の反感を惹き起したとすれば、その地位は実に危険であつて、彼の恃みとするところは、わづかに帝寵とおのが才とのみである。

しかも彼の推薦者たちは、このころ皆その地位を退いた。即ち玉真公主は天宝三載の十一月に、上言して公主の号をやめ、封戸を返上せんとことを乞つた。玄宗はこれを止めたが、公主が聴かなかつたので、遂にこれを許したといふ（「唐書」卷83、「旧唐書」卷80）。このことはどういふ意味だかは記されてゐないが、たぶん玄宗もしくは、この翌年に貴妃と呼ばれることになる楊太真との不和が原因ではなかつたかとも想像される。もしさうだとすれば、これは突然のことではなく、少くともこの年の初ごろから既に萌してゐたことであらう。

また賀知章は、天宝二年の末に、夢遊（また恍惚ともいふ）病に罹り、官を辞して道士となり、故郷の会稽に帰らんと乞つた。玄宗はそこでこれを許し、三載正月五日、皇太子、左相、右相以下百官をして、これを長樂坡に送別せしめ、みづから御製の詩を賜ひ、百官にも送別の詩を作らせた。この時、李白も詔に応じて送別の詩を作つてゐるから、同じく通化門の東五支里なる長樂坡に賀知章を送つたのである。その詩は格別の作ではないが、賀知章が李白と同じく道教に帰依すること深きは見るに足る。彼はまた自発的にも送別の詩を作つてゐる。「賀賓客ノ越二歸ルヲ送ル」といふ七言絶句がそれである。

賀知章は彼の恩人であつて、同時に友人であつた。それが去ることは、感情の上からの寂しさ以外に、彼の地位をますます危くしなかつたとはいへない。また剡溪から彼とともに入京し、かつ推薦者の一人だつたと伝へられる呉筠も、都にゐて翰林には留まつてゐたが、志を得ないで鬱々としてゐた。はじめ呉が入京するや、帝はこれを大同殿に召見し、道法と神仙修練のことを聞いたが、まもなく内には仏教を奉ずる高力士の排斥があり、外の李林甫、楊国忠とも良からず、遂には度々去らんことを乞ふに至つたのである（「唐書」196、「旧唐書」192）。

この中であつて、李白は毎日、酒に溺れ、また前述の如く長安の貴族の子弟とも争ひを起してゐたのである。人は多く、彼のこの放埒を倅人に排斥され、初めの志を遂げ得なかつたためと説いてゐるが、いづれが原因であり、いづれが結果とも定め難い。とまれ東西古今の例に多く

見る如く、純粹な詩人の性格は宮廷をとりまく俗人輩に快く思はれる筈がないのである。彼の飲酒の場は王侯貴顕の宴席であるとともに、また市井の酒樓であつた。中でも前述の春門外の胡姬の侍る酒肆は、彼の詩中に多く見えてゐる。

彼の酒癖は長安の市中に喧伝され、時人はこれを酒豪の一人に数へた。即ち杜甫の詩の「飲中八仙歌」に歌はれた所以である。

知章騎馬似乘船 知章の馬に騎るは船に乘るに似たり

眼花落井水底眠 眼花井に落ちなば水底に眠らん。

汝陽三斗始朝天 汝陽は三斗にして始めて天に朝す

道逢麴車口流涎 道に麴車に逢へば口涎を流す

恨不移封向酒泉 封を移されて酒泉に向はざるを恨む。

左相日興費萬錢 左相が日興は万錢を費す

飲如長鯨吸百川 飲むこと長鯨の百川を吸ふがごとし

銜杯樂聖稱避賢 杯を銜み聖を楽しみ賢を避くと稱す。

宗之瀟洒美少年 宗之は瀟洒たる美少年

舉觴白眼望青天 觴を挙げ白眼もて青天を望む

皎如玉樹臨風前 皎として玉樹の風前に臨むがごとし。

蘇晉長齋繡佛前 蘇晉 長齋す繡仏の前

醉中往往愛逃禪 醉中 往往にして逃禪を愛す。

李白一斗詩百篇 李白は一斗詩百篇

長安市上酒家眠 長安市上 酒家に眠る

天子呼來不上船 天子呼び来れども船上らず

自稱臣是酒中仙 みづから稱す臣はこれ酒中の仙。

張旭三杯草聖傳 張旭 三杯 草聖伝ふ

脫帽露頂王公前 帽を脱し頂を露す王公の前

揮毫落紙如雲煙 毫を揮ひ紙に落せば雲煙のごとし。

焦遂五斗方卓然 焦遂は五斗にしてまさに卓然たり

高談雄辯驚四筵 高談 雄弁 四筵を驚かす。

賀知章のことはすでに記した。汝陽王は名を璉といひ、李白に酒を飲ませた寧王の子であるから、帝とは叔父甥の間柄である。皇族の尊きを以て磊落かくの如きだったから、賀知章と善く、李白にも親顧を賜うたことは思ふべきである。

左相は李適之。同じく皇族の出であるが、賓客を喜び、酒を飲むこと一斗余に至つても乱れず、夜は宴を開いて楽しんだが、書の政務は留滞しなかつたといはれる。天宝元年、牛仙客に代つて左相となつたが、右相李林甫と協はず、五載に至つて罷め、ついで自殺した。その党はみなこの前後に李林甫の讒言によって罪せられた(「唐書」卷131)。

宗之は齊国公崔宗之。父の崔日用の後を嗣いで公爵となつた。その瀟洒たる貴公子の姿はこの詩によく著はれてゐる。文学を好み、李白のみならず杜甫とも親交があつた(「唐書」卷121)。

張旭は草書の名人。後に玄宗の時、その書と李白の歌詩と裴旻の劍舞とが、唐代の三絶と称せられた。大醉することに叫声をあげて走り廻り、ある時には頭髮を墨に浸して書き、醒めての後は知らなかつたといふ(「唐書」卷202)。

蘇晋は河内郡公蘇垺(キョウ)の子で、太子左庶子の官に終つたが、また氣骨ある士であつた(「唐書」卷128)。この詩によつて仏教の信者であつたことが知られる。李白との交友は詳らかでなく、既に開元二十二年に死んだとも伝えられてゐる。

焦遂のみは伝を明らかにしないが、李白と同じく布衣の士であり、崑山に優游したと伝えられ、酒五斗を飲み尽しても自若たる有様であつたといはれる(森槐南「唐詩選評釈」卷一)。

かく八仙を数へ来れば、みな狂逸の士で、酒仙といふよりは酒狂に近いものもあり、李白がこの中に数へられたのは、彼にとつて決して幸せなことではなかつた。この時、玄宗は開元の治二十九年の後をうけて、漸く政に倦み、国政をすべて右相李林甫にゆだねて顧みなかつた。李林甫は皇族出身であるが、姦佞の小人であり、残忍酷薄、卑劣な手段を尽して反対派の排斥に余念なく、その間たくみに私利を計つてゐた。玄宗はかかることは知らず、楊貴妃の色に溺れ、日々酒宴にふけり、いたづらに夜の短きを嘆ずるのみであつた。楊貴妃のごときはただの女子で、眼中にまた国家のあらう筈がない。加ふるにその一族の楊国忠等は妃の寵愛にたよつて立身し、李林甫と結んで政界の壟断を策する。これに対する反対派の首領が、李白と善き李適之である。かかる暗鬱なる空氣の瀰漫した宮廷にあつては、李白たらずとも地位の安全を保ち難いのである。

さらにまた宮中に大勢力を有するものとして、宦官の高力士があり、外には安祿山、哥敍翰等の軍閥の勢力も次第に張り、内外の勢は予測を許さない。詩人李白にして、これに対処する地位に置かれても、おそらくなら策の施すべきものがなかつたであらう。彼の有するは、

ただ忠直の性質のみである。太平を謳歌する詩人的才能のみである。たとへ彼が他より排斥を受けなかったとしても、その悲劇的結末は早晩来つたに相違ない。

しかも彼の詩人的性格は既に各方面との摩擦を惹き起してゐる。もとより俗の俗たる李林甫を中心とする官僚群、陰險なる宦官高力士たちの側に罪があることはいふまでもないが、詩人たることそれ自身が、何時の時代、いかなる国に於いても悲劇を将来することは、東西古今の例を引くまでもあるまい。かくて必然的な運命として、彼は長安を逐はれるのである。

しかしながら、直接その原因となつたのは、魏・によれば、張（張）士自（士自）の讒言である。張（張）士自（士自）は開元十八年に死んだ宰相張（張）説（説）の子である、中書舍人に任じられ、玄宗の女（むすめ）寧親公主を妻として賜つた。玄宗の寵は極めて渥く、のち天宝十三載に、宰相陳希烈の辞職するや、帝はこれを後任にしようとしたほどである。李白がこれに憎まれた理由は不明であるが、張（張）士自（士自）はかかる帝寵にもかかはらず、後に安祿山が叛くや、兄張均、宰相陳希烈らとともに、これに仕へて宰相となつた男である。たとへその間に多小の理由があつたとしても、現在の君主たり義父たる人に叛いて、賊に従ふほどの陋劣な男である。李白と合はず、これを讒したとしてもふしぎではない。

しかし「太真外伝」等の小説、「旧唐書」、「唐書」等が、李白の去つた原因を高力士の讒言としてゐることは、周知の事実である。このことを最も詳しく説いてゐる「太真外伝」によるならば、

「高力士はかつて玄宗の前で酔へる李白にその靴をぬがされたことで恥ぢ恨んでゐたが、ある日、楊貴妃がかの時の詞（清平調詞）を吟じてゐるのを聞いた。そこでここぞと思つていふには、

『私は妃子（おほきさき）が李白を怨むこと骨髓に入るほどと存じてをりましたのに、どうして御厚意のかくのごときですか』と。

楊貴妃は驚いてそのわけを問うた。高力士はいつた。

『妃子を飛燕とお呼びしてゐるのは、はなはだしく賤しんでゐることでございます』と。

貴妃はなるほど感心して、この後玄宗が三たび彼を官に任じようとしたが、宮中から妨害して中止させた。

といふ。李白が高力士をして靴をぬがしめたことが事実であるかどうか不明だが、「唐書」、「新唐書」ともにこの説を採用してゐる。そのことの有無はさておき、高力士は宦官ながら才智すぐれ、玄宗とはその皇太子時代から関係ふかく、右監門衛將軍・知内侍省事として、四方の上奏文は帝が宮中にあるときは、すべて彼の手を経て進められる。仕官を願ふものこのれを見んと願ふことは、あたかも天人に対するかの如くである。李林甫、韋堅、楊国忠、安祿山、安思順、高仙芝等、文武の大官にしてこれと厚く結ばぬ者はない。皇太子すらこれに兄事し、他の親王公主はみなこれを翁と呼び、貴族たちは尊んで（タ）と呼ぶ。帝さへも或時には名を呼はずして、將軍と呼ぶほどの権勢を有してゐたものである。これに憎まれては、もはや宮廷の生活をなし得ないことは当然であらう。しかも力士の姦智なるたくみに飛燕の語をとらへて、寵妃の心を動かしたのである。

漢の成帝の寵した飛燕皇后のことは、事実とはもかくとして、この頃の人士には、六朝時代の作なる小説「飛燕外伝」を通じてよく知ら

れてゐたのである。この小説に見える飛燕皇后は、宮中に入る前にすでに鳥を射る者と通じ、立后後も多くの者と姦通してゐる。これを以て貴妃に比したのは、李白にとつて慎重を欠いたといはねばなるまい。彼の詩の特徴の一は、巧みに故事をとらへ来つて、現在の事柄と連関せしめる方法である。そのため現実には浪漫化され、ますます美化される。そのために写真から遠ざかるの嫌ひはあるが、詩とは、本来さうしたものであるべきなのである。しかも李白の小事に拘はらざる性格は、故事をも枉げて引く場合が少くない。だからかかる場合は、引用された点に於いてのみ、故事を見るのが至当なのであつて、歴史上の人物の全経歴を以て見るべきではないのである。従つてこの場合も、歌を善くし舞を善くし、君王の寵愛はくらべるものもなく、肌膚こまやかに、姿態楚楚たる美人といふ点で、これを楊貴妃に比すべくとらへ来つたと見るべきだったのである。しかし適確なるよりも、むしろ曖昧模糊たるところに美を表出せんとする詩の性格が、ここに俗人の無惨なる剔抉トツケツに遭つて、この悲劇を齎したるのである。

かくて官僚と宮廷との双方から攻撃を受けた詩人は、長安を去るよりほかなかつた。

同王昌齡送族弟襄歸桂陽

王昌齡と同じく族弟襄が桂陽に帰るを送る

秦地見碧草 秦地 碧草を見

楚謠對清樽 楚謠 清樽に對す。<sup>248</sup>

把酒爾何思 酒を把とつてなんぢ何をか思ふ

鷓鴣啼南園 鷓鴣シヤコ 南園に啼く。<sup>249</sup>

予欲羅浮隱 予は羅浮250に隠れんと欲すれども

猶懷明主恩 なほ明主の恩を懷おもふ。

躊躇紫宮戀 紫宮251の恋に躊躇し

孤負滄洲言 ひとり滄洲の言に負252く

<sup>248</sup> 襄の赴く桂陽(湖南會)は昔の楚の地。

<sup>249</sup> 南方に多い鳥

<sup>250</sup> 蓬萊山中の一峰

<sup>251</sup> 紫微に同じく天子の宮

<sup>252</sup> 神仙のすむ滄浪洲へ行くといふ言を実行出来ないである。

.....  
なる詩の示すやうに、玄宗の恩を思ひ、宮廷こひしくは思ひながらも、彼は帝に暇を乞つた。

玄宗はさすがにその才を惜んで慰撫し、辞意のごとめ難きを知るや金を賜つて放つたといふ。君臣の間柄に不純なものまじらなかつたことが、李白にとつてせめてもの慰めであつたらう。長安に入った時は四十二歳、ここを去る時四十四歳で、足掛け三年の都会の生活は、彼に多くの詩と友とを齎したが、同時に唐の宮廷の如何ともしがたい腐敗沈殿と、前途に殆ど希望を失つた自己とを見出さしめたのであつた。彼が長安を去る時も、長樂坡や瀟陵に別を惜んだものはあつたらうが、大都のごよみのすべてが、彼にとつては詩人を嘲笑する声のやうに感じられたことであらう。



## 七 李白と道教

### 七 李白と道教

長安を去つた李白の行先は、李陽冰によれば、陳留の探訪大使李彦允リケンインに従つて、北海の高天師を齊州チウ（齊南）の紫極宮に訪ね、道籙ドウロクを授からんことを乞つたといふのである。北海（青州）の高天師とは、李白はすでに長安で知合になつてをり、「高尊師・如貴道道士ノ道籙ヲ伝へ畢リテ北海ニ歸ルヲ 餞ハナカヒシ奉ル」といふ詩がある。道籙を伝授されるとは、道教信者の終るべき過程であつて、道教の受戒に当るものであらう。のちに災厄よけにいくらかでも売られた符とは異ると思はれる（窪徳忠「道教と中国社会」）。その大体は「隋書」経籍誌に記されてゐる、即ち道教に入り、道を受けんとする者は、まづ五千文籙を受け、次に三洞籙を授かり、次に洞玄籙を受けるのである。籙とは白絹に書し、天の諸官属の名を記してゐる。またその間に色々の呪文が記してある。その文章は詭怪である。これを受けんとする者は、先づ潔齋し、ついで金環一個と種々の礼幣とをもつて師に見えまみる。師はこの礼幣を受けとり、それから籙を授け、金環を二分し、各々その一半をもつて師弟の約束のしとする。弟子は籙を受ければ、これを封緘して腰につけるのである。

ここに至るまでに、李白と道教との関係は実に深い。彼の詩が仙骨を帯びてゐると称せられるのも当然であるが、これがまた儒教的な杜甫の詩と好対照をなし、そのため後の批評者、特に宋代の詩人学者から、李白の詩を杜甫の詩の下に置かうとする傾向が起つたのである。ただに藝術上のみならず、彼の生活に多大の影響を及ぼしてゐるこの道教と李白との関係を、ここで一応ふりかへつてみる必要は十分にあると思ふ。前述の如く、彼は少年時代、いまだ四川省にゐた頃、処士東巖子といふ者と岷山シジヤンに隱棲してゐたことがある。東巖子の素姓は不明だが、彼等の生活が十二分に道教的な色彩を帯びたものであつたことは否めない。ついで恐らく安陸にゐた頃には、しばしば隋州（湖北省）の胡紫陽の許に赴いた。胡紫陽の事蹟は李白の作と伝へられる「漢東紫陽先生碑銘」といふ文があつて、これに詳しく見えてゐる。即ち、

「胡紫陽は代々道士の家に生れ、九歳で出家し、十二歳から穀類を食ふことをやめ（これが修行の第一段階である）、二十歳にして衡山（五嶽の一、南嶽、湖南省衡陽の北）に遊んだ。（この後は欠文があつて判りにくい）が、その後、召されて威儀及び天下探經使といふ道教の官に任ぜられ、隋州に滄霞樓を置いたなどのことが見えてゐる。（彼の道統は漢の三茅（茅盈、茅固、茅衷）の三兄弟、晋の許穆父子等に流を発し、その後、陳の陶弘景（陶隱居）、その弟子唐の王遠知（昇元先生）、その弟子潘師正（体元先生）、そ

の弟子で李白とも交りのあった司馬承禎（貞一先生）を経て、李含光より伝はった。弟子は三千余人あったが、天宝の初、その高弟元丹邱はこれに嵩山及び洛陽に於いて伝録をなさんことを乞うたが、病と称して往かぬといふ高潔の士であった。その後、いくばくもなくして玄宗に召されると、止むを得ないで赴いたが、まもなく疾と称して帝城を辞した。その去る時には王公卿士みな洛陽の龍門まで送ったが、葉鼎（河南省）まで来て、王喬（また王子喬、王子晋といひ周の王子で仙人だったと）の祠に宿ったとき、しかに仙化した。この年十月二十三日、隋州の新松山に葬った。時に年六十二歳であった。」

といひ、自己が紫陽と親交あり、その説の十中の九を得たことをいってゐる。李白にはまた「隋州ノ紫陽先生ノ壁ニ題ス」といふ詩があつて、この交を証してゐる。しかし胡紫陽よりも、その弟子元丹邱との関係は、さらに注意すべきものであつて、それとの関係を敘する詩だけでも、「西嶽雲台ノ丹邱子ヲ送ル歌」、「元丹邱ノ歌」、「潁陽ニテ元丹邱ノ淮陽ニ之クニ別ル」、「詩ヲ以テ書ニ代ヘ元丹邱ニ答フ」、「岑・ニ尋ネラレ元丹邱ニ就イテ酒ニ対シテ相待チ詩ヲ以テ招カルルニ酬ユ」、「高鳳ノ石門山中ニ元丹邱ヲ酬又」、「元丹邱ガ坐ノ巫山屏風ヲ觀ル」、「元丹邱ノ山居ニ題ス」、「元丹邱ノ潁陽ノ山居ニ題ス並ビニ序」、「嵩山ノ逸人元丹邱ノ山居ニ題ス并ビニ序」等、実に十数首に上つてゐる。その他にも彼の名の表はれる詩も五篇あるので、元丹邱を李白の第一の友と称して差し支へないと思ふ。これらの詩の中、第一のものは最も力作である。

西嶽雲臺歌送丹邱子 西嶽の雲台の歌、丹邱子を送る

西嶽崢・何壯哉 西嶽崢・として何んぞ壮なるや

黄河如絲天際來 黄河は糸のごとく天際より来る。

黄河萬里觸山動 黄河 万里 山に触れて動き

盤渦駁轉秦地雷 盤渦 駁轉して秦地雷る。

榮光休氣紛五彩 榮光休氣、五彩紛る

千年一清聖人在 千年一たび清んで聖人あり。

巨靈咆哮擘兩山 巨靈 咆哮して兩山を擘き

257

253 けはしき様

254 渦まいてまはる。

255 車のごしきのやうに廻る。

256 堯の七十年に河洛を祭つたら榮光が黄河から出、休氣が四方に立ちこめた。休は美。

257 黄河の神

洪波噴箭射東海 洪波 箭を噴いて東海を射る。

三峰却立如欲摧 三峯 却立して摧けんとするが如し

翠崖丹谷高掌開 翠崖 丹谷 高掌開く。

白帝金精運元氣 白帝の金精 元気を運らし

石作蓮花雲作臺 石は蓮花をなし雲は台をなす。

雲臺閣道連窈冥 雲台の閣道は窈冥に連り

中有不死丹邱生 中に不死の丹邱生あり。

明星玉女備灑掃 明星玉女 灑掃に備はり

麻姑搔背指爪輕 麻姑 背を搔いて指爪輕し。

我皇手把天地戸 わが皇手に拙る天地の戸

丹邱談天與天語 丹邱 天を談じ天と語る。

九重出入生光輝 九重 出入して光輝を生じ

東來蓬萊復西歸 東のかた蓬萊を求めまた西に帰る。

258 華山の蓮花、落雁、朝陽の三峰。

259 華山の東北には仙人掌といふ峰がある。

260 白帝金天氏が華山の神。

261 暗処。

262 華山にある神女。

263 掃除のためにをり

264 神人、その爪は鳥のごとしと。

265 いま玄宗皇帝は西王母のごとく天地の戸を自由にしてをられるが

266 天にたくへるべき皇帝と。

267 宮中の門は天と同じく九重。

玉漿儻惠故人飲 玉漿もし故人に恵んで飲みしむれば<sup>268</sup>

騎二茅龍上天飛 二茅龍に騎(の)り天に上つて飛ばん。<sup>270</sup>

この詩では兩嶽、即ち五嶽の一なる華山の景龜と、ここに住した元丹邱が玄宗に招かれて山を上下したことがしるされてゐるが、丹邱はまた高山、即ち五嶽の中嶽にもゐたことがあり、ここにゐる彼を歌ったのが「元丹邱ノ歌」である。この詩の方が短い丹邱の姿をよく表してゐるといへやう。

元丹邱 愛神仙 元丹邱 神仙を愛す。

朝飲潁川之清流 朝には潁川の清流を飲み<sup>271</sup>

暮還嵩岑之紫煙 暮には嵩岑の紫煙に還る。

三十六峰常周旋 三十六峰 常に周旋す<sup>272</sup>

長周旋 躡星虹 長く周旋し 星虹を躡む

身騎飛龍耳生風 身は飛龍に騎りて耳に風を生ず。

横河跨海與天通 河に横はり海に跨つて天と通ず

我知爾遊心無窮 われは知るなんちの遊心窮まりなきを。

道教の体系には、中国固有の山嶽崇拜の思想が含まれてをり、天に最も近く、従つて神仙の棲家でもあると考へられた五嶽(嵩山、泰山、華山、衡山、恆山)をはじめとする諸方の靈山には、この時代には必ず道觀が建てられ、道士がゐた。李白の周遊もだから必ずしも輒輒不遇のためばかりでもなく、これらの聖地への巡礼も含まれてゐたやうである。

268 明星玉女の持つ仙薬。

269 李白

270 華山にある呼子先のごとく、茅がやで作った狗が化した龍にのつて。

271 嵩山から発する河。

272 嵩山には三十六峰がある。

273 廻りあるへ。

紫陽の弟子では、丹邱以外に元演といふのがあつて、丹邱の兄弟か一族であらうと思はれるが、李白がこれとも交つたことは「冬夜隋州ノ紫陽先生ノ滄霞樓ニ於テ烟子元演ノ仙城山ニ隱ルルヲ送ルノ序」といふ文によつて知られる。これによれば元丹邱は霞子と呼ばれてゐたのである。

これらの道士以外に、山東での交友たる竹溪の六逸の五人も、竹林の七賢に擬したからには、同じく老莊の流を汲む同好の友であつたに相違ない。かくて李白のかかる方面での交友關係が、つひに吳筠、玉真公主等を通じて宮廷への推薦となつたことは、既述の通りである。

道教は老莊の學說と、齊を中心とした神仙說と、後漢の末に漢中の張魯等によつて形成された天師道との三種の要素が混合して成立した宗教である。老莊の教は周知の如く、孔子孟子の儒教に対する反動思想として起つたものであり、これが仁義によつて修身齊家治國平天下を計るのに反対し、虚靜、即ち人為的な工作を避け天地の常道に則つた生活によつて、理想社会の出現を期待する。儒教が積極的なのに対し、これはあくまで消極的である。而して彼等が漠然とその実在を考へた理想國は、齊を中心とした神仙說により具体的な形を具へる。即ち齊の東方の海上に存在する三神山(瀛州、方壺、蓬萊)ならびに西方極遠の地に存在する西王母の國、これらが現在する理想國である。ここには神仙が居住し、耕さず力めず、氣を吸ひ、霞を食ひ、仙薬を服し、金丹を煉(ね)つて、身を養つてゐる。もとより不老長生である、鬪争もなければ犯法者もない。かかる神仙との交通によつて、同じく神仙と化し延寿を計り得るのであつて、これ以外には施すべき手段はなく、これ以外の地上の嘗みはすべて徒為であるとなすに至る。しかもこの神仙との交通の方法を、実際に獲得したと称する者が漢の武帝の頃から出て來たしたが、後漢末になると、鉅鹿の張角、巴郡の張修等、ただに自ら神仙の法を修得するのみではなくして、その靈力を以て人民に施さんとするに至つた。これはあたかも原始キリスト教に於けるメシヤの勳興に比せらるべきであらう。かくてこのころになると、道教の宗教としての形体はほぼ具はるに至つたのである。これらのメシヤたちが、地上の主権者たる政府より危険視されたのは当然であつて、ここに後漢末の大亂が惹起された。漢はこのため亡んだが、これらの者もまた勦滅された中に、張魯だけは魏の曹操と妥協したから、この派だけはこれより各地に拡がるを得た。その後、その教が儒教の經のあるものをも巧みに自己の内にとり入れ、仏教の儀軌をも援用して現在に至つてゐることは周知の事實である。

この道教の勢力は各方面に多大の影響を及ぼした。もとより道教たるものが、前述の如く多くの要素から成立してゐるのであるから、その影響の仕方も様々であつて、ある場合には老莊の說に基く純思想として、ある場合には天師道の流をひく繁瑣なる儀軌による愚民のたぶらかしとなるなど形相は異にしてゐるが、李白の場合にはこれらすべてが、彼の詩と生活とに根強い影響を与へてゐることは否めない。

彼の詩酒の生活は、決して西洋の詩人たち、例へばボードレルやヴェルレーヌなどの頹廢の生活と同一視すべきではない。後者には必ず悔恨がつきまとい、悲痛感が伴ふのに対し李白の詩酒には少しも暗い翳りが無いのは、全くその根柢にかかる思想的基盤があつたからである。ボードレルらが酒によつて神と離れたと感じるとき、李白は酒によつて神に近づき得たと信じてゐたのである。

かかる傾向はもとより李白に始まつたのではなくして、既に晋初の竹林の七賢たちに見られてゐる。彼等ならびにその流を継ぐもの生

活態度は次の如くであった。

「学者は莊子老子を祖となして、孔子孟子の撰たる六経を黜け、談者は虚談をのみ語って法度を賤し、身を行ふ者は自由放蕩を通とし、節義信義を偏狭とし、官吏は俸禄をただ取りするのを貴しとして、その義務を尽す者を軽蔑し、文書に盲目判を押すものを高尚だとし、勤勉謹直の士を笑ふ。三公の中に無為の者があれば、これをほめ、虚談をするのを上等の議論といふ。政治の仕方をいひ、正邪を糾す者はみなこれを俗吏といひ、なんら為すところなく、他人まかせにして公務に心を苦しめない者は、皆その名が海内に重んぜられた(干宝「晋紀総論」)。

この風潮が西晋をして五胡の侵入に対抗し得ず、国の北半を放棄せしめた原因であることは周知の事実だが、東晋になってもこの風はなかなか止まらなかった。かやうに老莊の虚無思想は、時に人をして国家の盛衰をも顧みなくさせるに至るのだが、反面にかの醜き政権争奪のみを事とし、眼中私利あつて同じく国家なき輩とは、いづれを勝れりともし難いのである。ともかく儒術を以て治道を励まさんとすれば、一面に本旨を忘れた瑣末な政治が現はれることは事実である。かかる事態への匡正策として、放逸なる士人が出現するのは止むを得ぬことといはねばなるまい。

開元時代は姚崇・宋璟等の名宰相の輔佐の下に、六典は完備し、国家も私人もともに富み、治績大いに揚がった時代であるが、あたかも太宗の貞観時代に次いだ則天武后の執政の世と同じく、天宝時代となると、反動にかかる虚無思想が瀾漫しはじめたのである。この思想に最も甚しく影響を受けたのが、玄宗皇帝であつたことは周知の如くであるが、それは底流として早く開元時代にも存した。李白はかかる時代の子として、その生活、その詩に放逸をほいままにしたのである。「襄陽歌」の如きは、この間の消息を最も明らかにしてゐるが、その他にもかかる意味での作は多く見出され、同時に李白の詩の傑作の少からぬ部分を占めてゐる。

莊周夢胡蝶 莊周胡蝶を夢み

胡蝶爲莊周 胡蝶は莊周となる。

一體更變易 一体たがひに變易し

萬事良悠悠 万事まことに悠悠たり。 274

乃知蓬萊水 すなはち如る蓬萊の水の

復作清淺流 また清淺の流をなすを。

青門種瓜人 青門に瓜を種うるの人は、 275

274 はてしない様  
275 長安城の東南の霸城門の一名を青城門といふ。

昔日東陵侯 昔日モキシツの東陵侯たり。 276

富貴故如此 富貴はもとかくのごとし

營營何所求 営々なんの求むるところぞ。 277

「古風」の第九首である。はじめに莊子の「齊物論」を引き、ついで秦の東陵侯邵平をとらへ来り、富貴榮華アキラカに齷齪ウカシたる俗人を嗤ヒひ去つて余すところがない。同じく「古風」第三首は

秦皇掃六合 秦皇 六合リクノサツを掃つて

虎視何雄哉 虎視なんぞ雄なるや。

揮劍決浮雲 劍を揮つて浮雲を決れば

諸侯盡西來 諸侯ことごとく西に来る。 279

明斷自天啓 明斷280 天より啓き

大略駕群才 大略 群才に駕す。

收兵鑄金人 兵を收めて金人を鑄281(い)

函谷正東開 函谷まさに東に開く。 282

銘功會稽嶺 功を銘しるす會稽の嶺。 283

276 邵平、秦が亡んだあとは平民となった。

277 あくせくと利を求める様

278 東西南北上下の六方、天地。

279 秦に降参して西に来た。

280 始皇帝の英明なる果斷は。

281 兵器をとりあつめて。

282 いままで秦の国を守つてゐた函谷関も東にあげつばなしになった。

283 始皇帝の三十七年、会稽の嶺に碑を立てて功を録した。

聘望琅琊臺 望を聘す<sup>は</sup>琅琊の台<sup>284</sup>

刑徒七十萬 刑徒七十万

起土驪山隈 土を起す<sup>リザン</sup>驪山の隈<sup>285</sup>

尚採不死藥 なほ不死の薬を採り<sup>286</sup>

茫然使心哀 茫然として心を哀ましむ<sup>287</sup>

連弩射海魚 連弩 海魚を射<sup>288</sup>

長鯨正崔嵬 長鯨まさに崔嵬<sup>289</sup>

額鼻象五岳 額鼻は五嶽に象り<sup>290</sup>

揚波噴雲雷 波を揚げて雲雷を噴き<sup>は</sup>

鬢蔽青天 鬢<sup>キリヨウ</sup>を蔽ふ<sup>291</sup> 青天を蔽ふ

何由睹蓬萊 なによりてか蓬萊を睹ん。

徐市載秦女 徐市<sup>ジョフツ</sup> 秦女を載せ<sup>の</sup>

樓船幾時迴 樓船<sup>292</sup> 幾時か迴る<sup>がへ</sup>。

但見三泉下 ただ見る三泉の下<sup>293</sup>

284 同じく二十八年瑯琊山に上った。

285 同じく三十五年阿房宮を造った。

286 同じく二十八年徐市らを三神山に遣はした。

287 徐市が薬をもつて帰らないので。

288 海中の悪魚を射た。

289 高くして大。

290 長鯨の。

291 鯨のひれとひげ。

292 二階づくりの大船。

293 始皇帝の陵を掘るとき地下水に三度まであたったといふ。

金棺葬寒灰 金棺の寒灰を葬るを。

といふ詩も、仙を願ふものに反対してゐるのではなく、また玄宗を諷刺したのでもなく、ただ神仙の道を求める資格が、豪奢を好み権術を事とした始皇帝には、なかつたことを云はんとしてゐるのみと思はれる。たとへ徐市には始皇帝を欺く意があつたとしても、三神山の存在しないことを李白がいふ筈もなく、神仙の道を求めることをそしめるはずもないからである。

天津三月時 天津三月の時<sup>94</sup>

千門桃與李 千門 桃と李と。<sup>すもも</sup>

朝為斷腸花 朝<sup>あした</sup>には断腸の花となり

暮逐東流水 暮には東流の水を逐<sup>お</sup>ふ。

前水復后水 前水また後水

古今相續流 古今あひ続いて流る。

新人非舊人 新人は旧人にあらざれども

年年橋上游 年年 橋上に遊ぶ。

雞鳴海色動 雞鳴いて海色動き<sup>295</sup>

謁帝羅公侯 帝に謁すと公侯羅<sup>しうな</sup>る。

月落西上陽 月は西上陽に落ち<sup>96</sup>

餘輝半城樓 余輝 城樓に半ばなり。

衣冠照雲日 衣冠 雲日を照し

朝下散皇州 朝より下つて皇州に散<sup>97</sup>ず。

294 洛陽の天津橋。

295 暁の色。

296 洛陽にある離宮。

297 帝都。

鞍馬如飛龍 鞍馬 飛龍のごとく

黄金絡馬頭 黄金 馬頭めくを絡る。

行人皆辟易 行人みな辟易<sup>298</sup>

志氣・高丘 志気 高丘スツキョウに横はる。 299

入門上高堂 門に入つて高堂に上れば

列鼎錯珍羞 鼎を列して珍羞ましを錯まじふ。 300

香風引趙舞 香風 趙舞を引き

清管隨齊謳 清管 齊謳セイオウに随まふ。

七十紫鴛鴦 七十の紫鴛鴦

雙雙戲庭幽 双双 庭の幽なるに戯たはる。

行樂爭晝夜 行樂 晝夜を争ひ

自言度千秋 みづから言ふ千秋を度わたると。

功成身不退 功成りて身退かざれば

自古多愆尤 古より愆尤ケンユウ多し。

黄犬空嘆息 黄犬むなしく歎息303し

緑珠成鸞髻 緑珠 鸞髻レンキョウをなす。 304

298 退散するほどで。

299 その元気ときたら高山まで横さまに亘るほどだ。

300 珍らしい美味。

301 斉のうた

302 とがめ。

303 秦の宰相李斯の故事。

304 石崇は愛妾緑珠のおかげで殺された。

何如鴟夷子 なんぞしかんや鴟夷子<sup>305</sup>が

散髮權扁舟 髪を散らして扁舟に權(かじ)せるには。

同じく「古風」の第十八である。はじめと終りとに宋華の無常なるをいひ、中ごろではそのはかない宋華に得々たる権力者たちを心憎いまでに描写して効果を深めてゐる。しかしこの無常感、仏教のそれには非ずして、老莊の説に基くものである。咸陽の市に黃犬を牽いた得意の時を過ぎて、刑場に就く李斯と対照されてゐる鴟夷子は越王勾踐の相だった范蠡であるが、李斯を以て当時の李林甫、楊国忠に擬したれば、呉を亡したのち髪を散らし、姓名を変じて斉に赴いた無欲の范蠡は李白の理想とする姿でなければならぬ。

現世の宋華が既に恃むべからざる上は、人間の理想はここにはあらずして、神仙との交際、乃神仙と化すことである。李白はくりかへしくりかへしこれを憧憬してゐる。「古風」の第五なる

太白何蒼蒼 太白<sup>306</sup>なんぞ蒼蒼たる

星辰上森列 星辰上に森列<sup>307</sup>す。

去天三百里 天を去る三百里。

邈爾與世絶 邈爾<sup>308</sup>として世に絶ゆ。

中有・髮翁 中に緑髪の翁あり

披雲臥松雪 雲を披<sup>き</sup>て松雪に臥す。

不笑亦不語 笑はずまた語らず

冥棲在巖穴 冥棲して巖穴にあり。<sup>309</sup>

我來逢真人 われ來つて真人<sup>310</sup>に逢ひ

305 越の相、范蠡。

306 長安の西三百里にある山。

307 おこそかにならぬ。

308 はるかな様。

309 冥想にふけりながら。

310 この仙人。

長跪問寶訣 長跪して宝訣を問ふ。

粲然啓玉齒 粲然として玉齒を啓き

授以鍊藥說 授くるに鍊藥の説をもつてす。

銘骨傳其語 骨に銘じてその語を伝ふれば

竦身已電滅 身を辣めてすでに電と滅ゆ。

仰望不可及 仰望すれども及ぶべからず

蒼然五情熱 蒼然として五情熱す。

吾將營丹砂 われまさに丹砂を営み

永與世人別 永く世人と別れんとす。

といふ詩はもとより李白の空想に出でたものであるが、真人に逢はうとの憧憬の強さは、この詩をしてかへって現実味を有するに至らしめてゐる。また「古風」の第七も同じ趣のものである。

客有鶴上仙 客に鶴上の仙あり

飛飛凌太清 飛び飛んで太清を凌ぐ。

揚言碧雲裏 揚言す碧雲の裏

白道安期名 みづから道ふ安期の名

兩兩白玉童 兩兩 白玉の童

311 仙家の秘訣。

312 につこりとして。

313 不死の薬を煉る。

314 にはかに

315 喜怒哀楽怨

316 天の異名

317 左右にはふたりならんで

雙吹紫鸞笙 雙<sup>ま</sup>び吹く紫鸞<sup>シラ</sup>の笙<sup>シヨフ</sup>。

去影忽不見 去影たちまち見えず

回風送天聲 回風 天声を送る。<sup>319</sup>

擧手遠望之 手を挙げて遠くこれを望めば

飄然若流星 飄然<sup>320</sup>として流星のごとし。

愿餐金光草 願はくは金光草<sup>キニコウソウ</sup>を餐<sup>くら</sup>ひ

壽與天齊傾 壽 天とひとしく傾かん。

安期生は蓬萊にゐる仙人である。二人の仙童を随へ、丹鶴に乗じて飛ぶ姿は、さながら実見したことく、躍如として描き出されてゐる。しかし李白は遂に仙人を見ることが出来なかつた。「古有所思行」にはいふ

我思仙人 われ仙人を思ふ

乃在碧海之東隅 すなはち碧海の東隅にあり。

海寒多天風 海寒くして天風多く

白波連山倒蓬壺 白波 山を連ねて蓬壺を倒す。<sup>322</sup>

長鯨噴湧不可涉 長鯨 噴湧<sup>フンヨウ</sup>渉るべからず

撫心茫茫淚如珠 心<sup>こゝろ</sup>を撫し茫茫<sup>324</sup>として淚 珠のごとし。

西來青鳥東飛去 西來の清鳥 東に飛んで去る

318 仙鳥の鸞のかたちをした。

319 去った方向からかへり吹いて来る風がかの天人の音楽を送つて来る。

320 ひらりと飛びゆく様

321 東岳夫人のゐるところに生える仙草。

322 蓬萊山も倒すほどに寄せて来る。

323 汐をふき水がわき上り。

324 疲れうんだ様

願寄一書謝麻姑 願はくは一書を寄ねて麻姑マコに謝マげん。

この詩では、つひに神仙のところへは、到達できないのではないかといふ絶望しかけた詩人の姿が見られる。さらに一層哀切の響を帯びてゐるのは、李白が老來鏡に対して作った「鏡ヲ覽テ懷ヲ書ス」といふ詩である。

得道無古今 道を得れば古今なしと<sup>326</sup>

失道還衰老 道を失ひてまた衰老す。

自笑鏡中人 みづから笑ふ鏡中の人

白髮如霜草 白髪は霜草のごとし。

捫心空歎息 心を捫むねでてむなしく歎息し

問影何枯槁 影に問ふ なんぞ枯槁コウせると。<sup>327</sup>

桃李竟何言 桃李つひに何をか言はん<sup>328</sup>

終成南山皓 つひに南山の皓コとならん。<sup>329</sup>

求めた道は遂に得られず、従つて不老長生もかなはずして、鏡中の影に白髪の霜草のごときを悲しむ詩人に対してはいふべき語を知らない。

道教はいはば、李白にとっては一種の悪夢であつたかもしれない。しかし彼はこれによつて、輾轉不遇の生活にも一道の光明を見出し得た。また外見の華やかさにくらべて、底に深い暗流をひそめた長安の政界の現状を目睹した時も絶望を感じることを免れた。東洋的な専制君主国に於いては、国運にとつて致命的なばかりでなく、いやしくも臣民としての義務感を有するものにとつては、耐へ得られないはずの君主の類廃も、かくて彼を絶望の極致にまで、追ひつめることはなかつたのである。この点で、彼は少くとも狂氣したヘルデルリンや二チエよりも幸福であつたといはねばならないし、道教に対してもかかる点では感謝しなければならぬ。

325 女仙

326 莊子から引く。

327 枯れ枯れになつてゐる。

328 桃李不言下自成蹊（史記李広伝）

329 商山に隠れた漢初の四老

恐らくこの時代に最も不幸だったのは、玄宗皇帝自身だったろう。帝は李白よりも聡明だったが、その身分こそ責任のすべてを負はざるべき皇帝だったのである。彼はこの責任を果すべく、前半生には苦しい努力を払った。さうして安らかな治世に安心し、残った後半生を享樂するために求めたのが、楊貴妃と道教とであった。哀れこの双方に期待を裏切られたのち、帝はなほ数年を生きながらへるのである。

李白の幸福が他人よりなほ勝つてゐる点はいま一つある。それは酒である。酒は前述の如く、彼にとっては道教的生活への入門であったが、同時にこの生活に徹底し得ず、つひにここに最後の幸福を求め得なかつた彼への救ひともなつたのである。

君不見黄河之水天上來 君見すや黄河の水 天上より來り

奔流到海不復迴 奔流し海に到つてまた迴らざるを。

君不見高堂明鏡悲白髮 君見すや高堂の明鏡 白髮を悲しむを

朝如青絲暮成雪 朝には青糸のことも暮には雪をなす。

人生得意須盡歡 人生意を得ればすべからく歡を尽くすべし

莫使金樽空對月 金樽をしてむなく月に対はしむるなかれ。

天生我材必有用 天のわが材を生ずる必ず用あればなり

千金散盡還復來 千金も散じ尽せばまたまた來る。

烹羊宰牛且爲樂 羊を烹 牛を宰してしばらく樂みをなせ

會須一飲三百杯 かならずすべからく一飲三百杯なるべし。

岑夫子丹丘生 岑夫子<sup>シンフワン</sup> 丹邱生

進酒君莫停 酒を進む君停むるなかれ。

與君歌一曲 君のため一曲を歌はん

請君爲我側耳聽 請ふ君わがために耳を側て聽け。

鐘鼓饌玉不足貴 鐘鼓 饌玉<sup>センキョウ</sup>は貴ぶに足らざる

但願長醉不願醒 ただ長醉を願うて醒むるを願はず。

古來聖賢皆寂寞 古來 聖賢みな寂寞

惟有飲者留其名 ただ飲者のその名を留むるあるのみ。

陳王昔時宴平樂 陳王<sup>332</sup> 昔時 平樂<sup>333</sup>に宴す

斗酒十千恣歡譁 斗酒十千<sup>334</sup> 歡譁<sup>335</sup>を 悉<sup>335</sup>にす。

主人何為言少錢 主人なんすれぞ錢少しといふ

徑須沽取對君酌 ただちにすべからく沽<sup>か</sup>ひ取りて君に対して酌むべし。

五花馬 千金裘 五花の馬<sup>336</sup> 千金の裘。

呼兒將出換美酒 兒を呼びもち出でて美酒に換<sup>か</sup>へ

與爾同銷萬古愁 なんちとともに銷<sup>け</sup>さん万古<sup>337</sup>の愁。

この「將進酒」と題する長篇は、元丹邱と岑夫子とに対して憂鬱をいふ詩である。岑夫子は岑参ともいふが明らかでない。元丹邱は前述の如く、李白の第一の親友で、道士である。私の考へでは、ここで李白は自己に対し不老長生をもたらさず、万古の愁ひをも消さず、いたづらに功名の念のみを消失せしめた「救ひなき」道教に対し、酒の方を勝れりとし、しづる兩人にむりに酒をすすめてみるとみることができると思ふ。

同じく酒を頌へる詩に次のものがある。

月下獨酌 其二

天若不愛酒 天もし酒を愛せずんば

332 魏の陳思王曹植、曹操の子で詩人としても名高い。  
333 道観の名

334 一万

335 よろこびとたのしみ

336 五つの花がたの模様のある名馬

337 永久

酒星不在天 酒星は天にあらざらん。<sup>38</sup>

地若不愛酒 地もし酒を愛せずんば

地應無酒泉 地にまさに酒泉なかるべし。<sup>39</sup>

天地既愛酒 天地もすでに酒を愛す

愛酒不愧天 酒を愛して天に愧ぢず。

已聞清比聖 すでに聞く清は聖に比ふと<sup>40</sup>

復道濁如賢 またいふ濁は賢のごとしと。<sup>41</sup>

賢聖既已飲 賢聖もすでに飲む

何必求神仙 なんぞ必ずしも神仙を求めん。

三杯通大道 三杯 大道に通じ

一斗合自然 一斗 自然に合す。

但得酒中趣 ただ酒中の趣を得たり

勿為醒者傳 醒者のために伝ふるなかれ。<sup>342</sup>

これは道教者にはすれば、恐らく冒流の語であらう。飲酒において道教の教へる自然と合致するといふのはまだしも、酒があれば神仙を求めずともいいといてあるのだからである。

実際、李白から酒を除くことは、彼を否定し去るにひとしい。その酔態も「襄陽歌」に表はれた、白辱、市人に指さされつつ憚らない狂態、沈香亭や寧王邸における貴人をもおそれぬ豪放のほかに、

338 野尻抱影「星の美と神秘」によれば獅子座のフィー、クシ、オメガの三星の漢称と。

339 いま甘肅省の県名

340 清酒

341 濁酒

342 酒をのまない者にはいってもむだだからいはないでおけ。

山中與幽人對酌 山中 幽人と對酌す

兩人對酌山花開 兩人 對酌すれば山花 開く

一杯一杯復一杯 一杯一杯また一杯。

我醉欲眠卿且去 われ酔うて眠らんと欲す 卿おんみしばらく去れ

明朝有意抱琴來 明朝 意あらば琴を抱いて來れ。

の絶唱に表はれた静かな酒興

把酒問月 酒を把つて月に問ふ

青天有月來幾時 青天 月ありてよりこのかた幾時ぞ

我今停杯一問之 われいま杯を停めて一たびこれを問ふ。

人攀明月不可得 人の明月を攀よづる得べからず

月行卻與人相隨 月行かへつて人とあひ隨ふ。

皎如飛鏡臨丹闕 皎キョウとして、飛鏡の丹闕に臨むがごとく。<sup>343</sup>

綠煙滅盡清輝發 綠煙 滅し尽して清輝 発す。<sup>344</sup>

但見宵從海上來 ただ見る宵に海上より来るを

寧知曉向雲間沒 いづくんぞ知らん曉に雲間に向つて没するを

白兔擣藥秋復春 白兔 藥を搗く秋また春

嫦娥孤棲與誰鄰 嫦娥ジョウガ 孤棲して誰とか隣する。

今人不見古時月 今人は見ず古時の月

今月曾經照古人 今月かつて経たり古人を照すを。

古人今人若流水 古人今人 流水のごとし

共看明月皆如此 ともに明月を見るみなかくのごとし

唯願當歌對酒時 ただ願ふ歌に当り酒に對する時

月光長照金樽裏 月光の長く金樽の裏を照さんことを。

の詩や「月下獨酌 其四」の

花間一壺酒 花間 一壺いっくわの酒

獨酌無相親 獨酌あひ親しむなし。

舉杯邀明月 杯を挙げて明月を邀むかへ

對影成三人 影に対して三人を成す。

月既不解飲 月すでに飲を解せず

影徒隨我身 影いたづらにわが身に隨ふ。

暫伴月將影 しばらく月と形とを伴うて

行樂需及春 行樂すべからく春に及ぶべし。

我歌月徘徊 われ歌へば月 徘徊はいかいし

我舞影零亂 われ舞へば影 零亂しやうらんす。<sup>46</sup>

醒時同交歡 醒時ともに交歡し

醉後各分散 酔後おのおの分散す。

永結無情遊 永く無情の遊を結び

相期邈雲漢 あひ期して雲漢うんかん<sup>47</sup> 邈はるかなり。

に見られる、月と対し、これと全く同化しての興趣など、とりどりに面白く、この詩人を愛することを深からしめる。かかる趣は、すでに六朝の詩人陶淵明に発し、初唐の詩人王績、王勃などにも見られるが、その作の多いのと、詩と詩人の生活とが、渾然と融和してある点では、李白に比すべくもない。

しかしながら、老荘に傾倒し、神仙を渴仰し、詩酒のみを事としたものとしてのみ、李白を考へることはやはり一面観たるを失はないであらう。彼にも矛盾があり、内面的煩悶があった。現世の榮華を無と知りつつも、なほこれを全く無視することは出来なかつた。神仙を渴仰して、遂にこれを得なかつた悲しみは酒によってまぎらはすことを得たが、現世の生活、ことに唐の国運は彼の心を痛ましめた。この場合の彼は決してメシヤたるに非ず、治国平天下の才なき一個人として、凡庸通俗の一国民としての傷心であつた。かかる点で愛国者としての行動に至らぬ点があつた、といつて責める従来の儒教的批評家たちは、李白の時代と苦悶を知らない者といはねばならない。

## 八 失意の十年

### 八 失意の十年

長安を去った天宝三載(李白四十四歳)から、安祿山の乱の起る天宝十四載(李白五十五歳)までの李白の足跡は、例によって明らかでない。前述の如く李陽冰によれば、長安よりまづ齊州(済南)へ行つたのであるから、そこから直ちに兗州のわが家へ赴いたと見なければならぬが、その後、彼はまた羈旅の人としてその足跡が到るところで発見される。

曾鞏は李白の足跡を考へて、

「北八趙・燕・魏・晋二抵り、西八岐・邠ヲ涉り、商ヲ歴テ洛陽ニ至ル。梁ニ游ブコト最モ久シ。フタタビ齊・魯ニユキ、南八淮・泗ニ游ビ、再ヒ呉ニ入り、転ジテ金陵ニ徙り、秋浦・尋陽ニ止マル」

といつてゐる(「李太白文集序」)。華中、華北の殆どすべてに亘る彼のこの旅を、時間的に正確に調べ上げることが不可能なことなので、年譜の作者もこれは断念してゐる。

しかし漂泊十年の大半は汴州(開封)で費されたらしい。曾鞏のいふ梁とはこのことで、戦国時代の魏の都大梁がここだからである。李白みづからも「情ヲ書シテ蔡舎人雄ニ贈ル」で、

遭逢聖明主 聖明の主に遭逢して

敢進興亡言 あへて興亡の言を進めんや。

348

白壁竟何辜 白壁つひに何の辜ぞ

青蠅遂成冤 青蠅つひに冤をなす。

349

348 亡国の言論

349 蠅のやうにあくせくと小利を追求する小人。

一朝去京國 一朝 京國ケイコクを去り  
 十載客梁園 十載 梁園カクに客たり。

……………  
 といつてゐる。しかしここの作はさう多くない。ただ「梁園吟」といふ雄篇があつて、長安を去つて後の感懐と、この地の生活を忍じてゐる。

我浮黄河去京關 われ黄河に浮んで京關350を去り

挂席欲進波連山 席351を掛けて進まんと欲すれば波 山に連る。

天長水闊厭遠涉 天は長く水は闊ひろくして遠涉を厭ふ

訪古始及平臺間 古を訪つて始めて及ぶ平臺の間。352

平臺為客憂思多 平臺に客となりて憂思多く

對酒遂作梁園歌 酒に対してつひに作す梁園の歌。

卻憶蓬池阮公詠 かへつて憶ふ池の阮公ケンコウの詠。353

因吟淥水揚洪波 よつて吟ロクスイず淥水洪波を揚ぐと。

洪波浩蕩迷舊國 洪波354 浩蕩355 旧國に迷ひ

路遠西歸安可得 路遠くして西歸いづくんぞ得べけん。

人生達命豈暇愁 人生 命に達すればあに愁いとまふるに暇いとまあらん。356

350 長安

351 むしろの帆

352 梁の孝王の離宮のあつたところ。

353 晋の阮籍の「詠懷」に徘徊蓬池上、還願望大梁、淥水揚洪波：といふのがある。

354 清らかな水

355 広く大きく

356 天命を達観すれば

且飲美酒登高樓 しばらく美酒を飲んで高樓に登る。

平頭奴子搖大扇 平頭357の奴子 大扇を揺かし

五月不熱疑清秋 五月も熱からず清秋かと疑ふ。

玉盤楊梅為君設 玉盤に楊梅きみがために設け

吳鹽如花皎白雪 吳鹽は花のごとく白雪よりも皎し。

持鹽把酒但飲之 塩を持ち酒を把とつてただこれを飲め

莫學夷齊事高潔 夷イセイ齊イセイを学んで高潔を事とするなかれ。  
358

昔人豪貴信陵君 昔人豪貴なり信陵君。  
359

今人耕種信陵墳 今人耕種す信陵の墳。

荒城虚照碧山月 荒城にむなしく照れり碧山の月

古木盡入蒼梧雲 古木ことごとく入る蒼梧の雲。  
360

梁王宮闕今安在 梁王の宮闕いまいづくにかある。  
361

枚馬先歸不相待 枚馬バイま62つ帰つてあひ待たず。  
363

舞影歌聲散・池 舞影 歌声 緑池に散じ

空餘汴水東流海 むなしく汴水ベンスイを余し東のかた海に流る。

沈吟此事淚滿衣 このことを沈吟して涙 衣に満つ

357 髪を結つてない。

358 伯夷、叔齊

359 魏の公子無忌、信陵君に封ぜられ食客三千人。

360 古木には蒼梧の方から来た雲がかかっている。

361 梁の孝王

362 梁王の食客であつた枚乗、司馬相如の二文人

363 死ぬ。

黄金買醉未能歸 黄金もて酔を買つていまだ帰るあたはず。

連呼五白行六博 五白を連呼して六博を行ひ<sup>364</sup>

分曹賭酒酣馳輝 曹を分ち酒を賭すれば馳輝<sup>365</sup>だけなはなり<sup>366</sup>

歌且謠 意方遠 歌ひかつ謠<sup>367</sup>ひ意まさに遠し。

東山高臥時起來 東山<sup>367</sup>に高臥し時に起ち来り

欲濟蒼生未應晚 蒼生<sup>368</sup>を救はんとするもいまだまさに晩<sup>369</sup>かるべからず。

ここより西南の鳴臯山<sup>メイコウサン</sup>にゆく岑参<sup>センセン</sup>を送つたのも、開封でのことであつた。岑参は李白より十四歳年下で、開元三年の生れである。太宗の時の宰相なる岑文本を曾祖父とし、睿宗<sup>エイソウ</sup>の時の宰相岑羲<sup>センギ</sup>も一族といふ名門の出であるが、岑羲が玄宗に誅せられてからは、家勢ふるはず、苦学精励して経史に通じた。開元二十二年に長安に至り、天宝四載、三十一歳のときはじめて進士に及第した。この間やはり詩人の王昌齡と親交があり、李白との交友も長安ではじまつたことと思はれる。天宝九載の三十六歳の時、將軍高仙芝に随つて安西(新疆省庫車)にゆき、三年間そこに留まつて種々その地の風物を詠じ、天宝十一載長安に帰つたが、十三載また從軍して北庭(新疆省ジムサ付近)に赴いた。今度は將軍封常清の幕僚としてであつた。従つて、李白に送られ、開封から鳴臯山に登つたのは、天宝四載から八載までか、十一載、十二載のどちらかと思はれるが、この「鳴臯歌岑徵君ヲ送ル」及び「岑徵君ノ鳴臯山ニ歸ルヲ送ル」の二詩とも岑参を徵君と呼び、これが天子に呼ばれても仕へない隱士のことであるからには、進士に及第して官に任じてゐない前の期間のことに相違ない。それはともかく、王昌齡、李白、高適等とともに、塞外の戦争を歌ふことに巧みで、私見によれば唐代從軍詩人の第一人者であつた岑参が、李白との年齢の相違にも拘らず、親交のあつたことには注意を要する。

李白の開封での生活は次第に窮迫して来たやうである。彼の「雪二対シテ從兄廬城ノ宰二獻ズ」といふ詩がこれを証する。

昨夜梁園裏 昨夜梁園<sup>リョウエン</sup>の裏

弟寒兄不知 弟寒けれども兄は知らざらん。

364 双六の賭の勝

365 二組に分れて

366 太陽の光

367 晋の謝安石のよこへ  
368 人民

庭前看玉樹 庭前に玉樹を見<sup>369</sup>

腸斷憶連枝 腸は断えて連枝を憶ふ。<sup>70</sup>

虞城は今の河南省の東境で、山東省の単父<sup>センボ</sup>の隣県なのであるから、苦しさを訴へてゐるのは開封のことではなかつたかもしれないが、相手は眞の従兄ではなく、李白が同族よばはりして、李氏なら必ず用ひるにせ従兄の、天宝四載からこの県令であつた李錫<sup>リセキ</sup>である。このとき救つてもらつた礼が、李白には「虞城県令李公去思頌碑」といふ頌徳文もあつて、このころの文人の生活も、中々なみ大抵でなかつたことを思はせる。県令といふのは県知事には相違なく、いまの日本の知事さんたちと同じくゐるものかもしれないが、昨日までの大官相手がかたか県令相手とまでなり下つたのである。しかも李白は貧を銜(てら)ふ趣味がなく、かかる場合にも大言壮語するたちであるから、この態度では窮迫のしかたもさこそと思はれる。

開封に次いで比較的永くゐたやうに思はれるのが、いまのべた単父である。ここは兗州から西南二百支里で、家族の住居とも近かつたからたびたび往来したと考へられる上に、この時、県の主簿の任にあつた李凝、その弟らしい李沈<sup>リシ</sup>の二人との交際によつて、事実しばらく滞在してゐたやうである。

この李沈が長安にゆくのを、単父の東樓で送別して作つた詩は佳作である。

單父東樓秋夜送族弟沈之秦 單父の東樓に秋夜族弟 沈の秦にゆくを送る

爾從咸陽來 71 なんぢ咸陽より來り

問我何勞苦 われに問ふ何ぞ勞苦すと。

沐猴而冠不足言 沐猴にして冠するは言ふに足らず<sup>372</sup>

身騎士牛滯東魯 身は士牛に騎して東魯に滯まる。<sup>373</sup>

沈弟欲行凝弟留 沈弟は行かんとし凝弟は留まる

孤飛一雁秦雲秋 孤飛の一雁 秦雲の秋。

坐來黃葉落四五 坐來 黃葉 落つること四五

369 雪で白玉製かと思はせる木

370 兄弟

371 長安

372 史記に見える楚人沐猴而冠よりつまらない者が高官となること。

373 猿である上に土の牛のつてゐるからのろのろとして。

北斗已挂西城樓 北斗すでに挂る西城の樓。

絲桐感人弦亦絶 糸桐 人を感じしめ絃また絶ゆ<sup>374</sup>

滿堂送客皆惜別 滿堂の送客みな別を惜む。

卷簾見月清興來 簾を巻き月を見て清興 来る

疑是山陰夜中雪 擬ふらくはこれ山陰の夜中の雪かと。

375

明日斗酒別 明日 斗酒の別

惆悵清路塵 惆悵<sup>チュウテイ</sup>たり清路の塵。

遙望長安日 遙に長安の日を望めども

不見長安人 長安の人を見ず。

長安宮闕九天上 長安の宮闕は九天の上

此地曾經為近臣 この地かつて経て近臣となる。

一朝復一朝 一朝また一朝

髮白心不改 髮白けれども心改まらず。

屈平憔悴滯江潭 屈平は憔悴して江潭に滞まり<sup>377</sup>

亭伯流離放遼海 亭伯は流離して遼海に放たる。<sup>378</sup>

折芋翻飛隨轉蓬 芋を折り翻飛して轉蓬に随ひ<sup>379</sup>

聞弦虚墜下霜空 弦を聞き虚墜して霜空を下る。<sup>380</sup>

381

聖朝久棄青雲士 聖朝久しく棄つ青雲の士<sup>382</sup>

374 琴

375 晋の王徽之が見てたちりまち友人戴逵を懐った山陰の夜の夜中の雲かと、月光を見ておもふ。

376 かなしくうらめし

377 洞庭湖畔に追放された屈原

378 後漢の崔駰、字は亭伯、楽浪郡の官に左遷された。

379 羽のもと、羽のくき

380 風に吹かれて飛ぶよもぎ

381 つる音をきいてあたりもしないのに落ちて来る。

382 学徳高き賢人

他日誰憐張長公 他日誰か憐まん張長公。 383

この詩の長安宮闕以下の句をも、久保天随博士は李沈のこととして解釈しておめでだが（続国訳漢文大成「李太白詩集中」652頁）、私は李沈のゆく長安のことから、想ひは一転して李白自身の感懐と境遇とを述べたものとする。「この地かつて経て近臣となる」とは、李白自身のことにはちがひないし、屈平（屈原）、亭伯（崔駰）、張摯とみな李白みづからをこれにたくへてゐるのである。

李白が金陵に赴いたのは、単父もしくは兗州からであり、この後、江南に流浪してつひに北には還らないのだが、それは「単父ノ陶少府ノ半月台ニ登ル」といふ詩に

秋山人遠海 秋山遠海に入り

桑柘羅平蕪 桑柘<sup>384</sup>平蕪<sup>385</sup>に羅なる。

水色淥且明 水色 淥<sup>386</sup>かつ明<sup>386</sup>

令人思鏡湖 人をして鏡湖を思はしむ。 387

終當過江去 つひにまさに江を過ぎて去るべきも

愛此暫踟躕 ここを愛してしばらく踟躕<sup>388</sup>す。

いふ箇所があるので知られる。また「曹南ノ群官ニ留別シテ江南ニ之ク」といふ詩があり、曹南、すなはち単父の西なるいまの曹県を通じて江南に赴いてゐることを証する。

開封・単父の滞在の外、華北のいたるところに行はれた李白の旅行の中で、最も注目すべきは、彼が幽州、即ち今の北京に赴いてゐることである。

幽州には当時、契丹<sup>キタン</sup>や奚<sup>ケイ</sup>などのこの方面の精悍な異民族の侵入を防ぐために、范陽節度使<sup>ハコウノセツト</sup>といふ軍司令官が置かれてゐたが、天寶三載以來この官にあつたのは、のちに乱を起す安祿山である。李白のこの幽州への旅行は、安祿山との間に何らかの交渉をもつたために行はれたやう

383 漢の張摯、字は長公、官吏となつたが、世間と合はないとてやめられたのち終身仕へなかつた。

384 桑とやまぐは

385 平らかな雑草の茂つた地

386 清らか

387 浙江省の紹興にある湖

388 ためらふ

である。この時、安祿山はまだその鋒さをあらはさないが、長安から見離された李白としては、これに優に對抗し得る勢力をもつ者に頼る気持を起したとしても、ふしぎなことはない。

ただし李白は幽州では安祿山に失望し、また彼がのちに謀叛したので、これとの交渉は秘してある。この李白の安祿山への悪感情を表はしてゐると見られるのが「幽州ノ胡ノ馬客ノ歌」である。

幽州胡馬客 幽州の胡の馬客<sup>カカ</sup><sub>389</sub>

緑眼虎皮冠 緑眼 虎皮の冠。

笑拂兩只箭 笑つて兩隻<sup>リョウゼ</sup><sub>390</sub>の箭を払へば

萬人不可干 万人も干<sup>ふせ</sup>くべからず。

彎弓若轉月 弓を彎<sup>ひ</sup>くこと月を転ずることく

白雁落雲端 白雁 雲端より落つ。

雙雙掉鞭行 双双<sup>391</sup> 鞭を掉<sup>ふ</sup>つて行

遊獵向樓蘭 遊獵して樓蘭に向ふ。<sup>392</sup>

出門不顧後 門を出づれば後を顧みず

報國死何難 国に報ずる死なんぞ難からん。

天驕五單于 天驕<sup>393</sup>五單于<sup>394</sup>

狼戾好兇殘 狼戾<sup>ロウレイ</sup>にして兇殘を好む。<sup>395</sup>

牛馬散北海 牛馬は北海に散じ

389 北方蛮族出身の馬にのつた流寓の人

390 二本

391 二人ならんか。

392 漢代、いまの新疆省のロブ・ノール付近にあった国

393 匈奴の単于はみづからを天の驕兒と称した。

394 漢の宣帝のとき匈奴は五單于ならび立った。

395 狼の如く心ねぢけ道理にもとる。

割鮮若虎餐 鮮を割くこと虎の餐くらふがごとし。 396

雖居燕支山 燕支山に居るといへども

不道朔雪寒 朔雪の寒きを道いはず。 397

婦女馬上笑 婦女も馬上に笑ひ

顔如赭玉盤 顔は赭あかき玉盤のごとし。

翻入射鳥獸 翻ホシ飛トして鳥獸を射

花月醉雕鞍 花月には雕鞍テウワンに酔ふ。

旄頭四光芒 旄頭ボウトウ 四よもに光芒あり。 399

爭戰若蜂攢 争戦する蜂の攢あつまるがごとし

白刃灑赤血 白刃 赤血を灑そそぎ

流沙為之丹 流沙 これがために丹あかし。

名將古誰是 名將 いにしへ誰か是これなる

疲兵良可嘆 疲兵まことに嘆ずべし。

何時天狼滅 いつれの時か天狼400 滅し

父子得・安 父子 ・安を得ん。 401

この遊獵に長けてゐながら、国のための戦争にはつとめようとせず、天下の疲弊を餌として、おのが勢力の拡大を計つてゐる幽州の胡の馬客が、安祿山の姿をありありと表し出してゐることはいふまでもない。ここで緑眼といつてゐるので、安祿山のイラン系統の血が証拠だて

鳥獸の新しく殺したものを。

北方の雪

とび上つて

胡の星と考へられる 昴めいの星

盜賊を表はし、侵略を象るといふ大犬座シリウスの漢名。

しづかにして安らか

られる。李白が炯眼にこれを看破したのは実に幸運なことであつた。然らずんば、彼ものちに安祿山に従つて謀叛した多くの漢人たちと同じ視されたであらう。しかし幽州へゆくまでの彼がこれを知つてゐたか、どうかは疑問である。

ただしこれだけでは、李白が例の如く、空想によつて安祿山をそしめる詩を作つたとも思はれようが、李白には「魏郡ニテ蘇明府因ニ別シテ北游ス」といふ詩があり、唐の魏州、即ち今の河北省の大名県で蘇因なる官に別れて、さらに北遊したといふのであるから、これが幽州への旅であつたことは明らかである。また「乱離ヲ終タルノ後天恩モテ夜郎ニ流サレ旧遊ヲ憶ヒテ懷ヲ書シテ江夏ノ章韋太守良宰ニ送ル」といふ長詩には、章良宰と自己との従来の交友を回顧してゐるが、まづ李白が剣も文も以て君王に用ひられるに足らずして、長安を去つたことを敘し、この時、韋良宰が彼を驃騎亭（長安にあつたのであらう）で送別したことをいひ、次いで、

十月到幽州 十月幽州に到れば

戈鋌若羅星 戈鋌<sup>カエト</sup>星<sup>ホシ</sup>を羅<sup>ら</sup>ぬるがごとし。

君王棄北海 君王 北海を棄て<sup>403</sup>

掃地借長鯨 地を掃つて長鯨に借す。<sup>404</sup>

呼吸走百川 呼吸 百川を走らせ

燕然可摧傾 燕然<sup>エンゼン</sup>も摧傾<sup>サイケイ</sup>すべし。<sup>406</sup>

心知不得語 心知れども語るを得ず

卻欲棲蓬瀛 かへつて蓬瀛<sup>ホウエイ</sup>に棲まんと欲す。<sup>407</sup>

彎弧懼天狼 弧<sup>ヒ</sup>を彎<sup>ま</sup>げども天狼<sup>テンロウ</sup>を懼<sup>おそ</sup>れ<sup>408</sup>

挾矢不敢張 矢<sup>ヤ</sup>を挾<sup>さ</sup>んであへて張<sup>は</sup>らず。

402 ほこや小ぼこ、武器

403 北海のある蒙古の地方

404 玄宗が安祿山をして二節度使を兼ねしめたこと。

405 匈奴にある山

406 だけかたむく。

407 蓬萊・瀛州の仙島

408 大犬座シリウスの漢名、凶残の星と。



かくして東北軍閥に失望した彼には、西北軍閥の哥舒翰あたりに運動することも考へられたであらう。「徳ヲ述べ兼テ情ヲ陳ジ哥舒大夫二上ル」といふ詩(この詩の今の形は断篇らしくはつきりしないが)はそのために作られたものかと思はれる。しかしこれも事実には効を奏せず、ただ華北の各地を転々として、かたがた鬱を慰め、かたがた、地方官の食客の座に連つて衣食を得てゐたといふのが、長安退去後ほぼ十年間の李白の生活であつたやうである。希望と失望、ここに長安に上るまでの遍歴と、長安退去後の漂泊との差異を見出さうとするのは誤りではあるまい。

李白自身も他人の見る目の相違に気付いてゐて、前に引いた「従弟南平ノ太守之遥ニ送ル」といふ詩のつづきでは

一朝謝病遊江海 一朝病を謝けて江海に遊べば

曠昔相知幾人在 曠昔の相知 幾人が在る。

前門長揖後門關 前門には長揖して後門は関す

今日結交明日改 今日 交りを結んで明日は改まる。

といつてゐる。この十年の李白の生活の苦しきを見るべきである。

しかしながらこの頃になつても交りを改めなかつた者がないわけではない。元丹邱がそれであるし、杜甫もその一人であつた。高適の如きも李白が開封や単父にゐたころ、親しくした一人であると思はれる。杜甫の「昔遊」に「昔者高・李ト晩ニ単父ノ台ニ登ル」といひ、「懷ヲ遣ル」に「憶フ高・李ノ輩ト交ヲ論ジテ酒壚ニ入シヲ。両公藻思壯ソニ我ヲ得テ色敷腹、氣八酣ニシテ吹台ニ登ル」といつてゐるのが、これを証する。吹台は開封の東南にあり、また乞活台ともいはれた由である。

高適は李白とは同年輩で、その意を得ざること久しく、梁・宋の間に旅人となつてゐたが、宋州の刺史張九臯の推薦で、漸く有道科の試験に通つたが、時あたかも李林甫の執政に当り、封丘原(開封)の尉といふ地方の小官に任ぜられたのみであつたので、失望して河西(甘肅省涼州)に赴き、節度使哥舒翰の幕僚となつた。これが天宝十一載のころと推測されるから、李白や杜甫と開封や単父に遊んだのは、封邱の尉たりし前後であらう。高適は盛唐の詩人としては、李杜には及ばずとも、王維、岑參と匹敵する一流詩人であるが、晩成の質と見え、その詩に意を用ひたのは五十歳以後であり、一篇の成ることに人々は争つてこれを伝誦したといふ。彼の五十歳は天宝八載だから、その詩作の開始を李白や杜甫との交友と結びつけて考へるのは失当であるまい。とまれ、盛唐の詩人中、王維をのぞく他の者とは、李白は親交があり、しかも互ひに詩情を異にして競つて唐詩の精華を誇つてゐるのは注目し得る事案であらう。

前に述べたやうに、李白は長安を去つてから殆ど十年にして、開封、山東方面を去り、江南に赴いた。その年代は天宝十一二載ごろかと想像される。江南でまつ赴いたのは、この後も度々往来した宣城(安徽省)であつた。「梁園自り敬亭山ニ至り会公ヲ見テ陵陽ノ山水ヲ談ジ兼

ネテ同游ヲ期シ因ツテ此ノ贈有リ」といふ詩の題がこれを示してゐる。梁園は開封、敬亭山は宣城にあるのだからである。しかし宣城にはちよつと留まつただけで、広陵(揚州)へ行き、ついで金陵(南京)に赴いた。魏・の文にいふ。

「自分をはじめの名を万といひ、次に炎といった。いまだ方といつてゐたころ、江東に赴いて李白を訪ね、天台山まで行ったが会はず、広陵まで帰つて来て会つた。その眸はきらきら輝き、大なること餓えた虎のやうだったが、また時に礼装をつければ、その品格は寛雅だった」

と李白の風貌を敘してゐる。魏・はこれから李白の弟子になるので、この言は信頼してよい。この時、李白から親しく聞いたのであらう、次にはあの李白が青少年のころ、数人を斬つたこと、友の葬を行った任侠の行為、韓朝宗と会つた時の話、及び李白の四回の結婚と子女のことを記し、次に金陵での生活をのべて、

「時には昭陽(湖南省)と金陵との妓を携へて、そのなすところは古の謝安に類してゐる。そこで世人は彼のことを李東山と呼んでゐる(東山は今の浙江省上虞県にあり、謝安が妓女を携へて遊宴した宅址がある)。駿馬美妾を伴つてゐて、至るところの県令はみな郊外に出迎へ引いて宴をする。酒数斗を飲んで始めて酔ふ。その頃になると侍童の丹砂といふのが青海波を舞ふ。満堂それを見ても楽しまなければ、李白が酒のきりもりをするので楽しくなる。」

といひ、李白と自らとの関係をのべては、

「自分は平素、自慢するたちで、狂人といふものさへあつたが、李白とは会ふとふしぎに気があつて、自分に詩を贈つてくれ、またいふには『君はこの後かならず天下に大名を著すだらう。その時おれと明月奴とを忘れてくれるな』と。文をみな出して、自分に命じて詩集を作らせた。自分はいま進士に及第した。李白の言に符合してゐるではないか。別れた翌年には天下に大盗が起つた。」

といつてゐる。李白が魏・に贈つた作といふのは「王屋山人魏万ノ王屋ニ還ルヲ送ル」といふ詩であらう。魏・の進士及第は上元の初めのことだったといふ。

この文で見ると李白は揚州には長男の明月奴を伴つてゐたことになる。この魏・との一見にして旧知の如き関係は、必ずしもうそでないやうで、この詩には洛陽から黄河を隔てて北の王屋山にゐた彼が、李白を訪ねて汴河を下り、杭州会稽まで来たが会はず、南の剡溪や天台山、永嘉に赴いた後、引返して揚子江を渡り、五月李白のもとに来て旅の目的と途中の話をして喜ばしたことを記してゐる。この詩が実に六十韻に亘り、李詩中では最長であることも、魏・と相許したことを証してゐる。

魏・はこれに対し「金陵ニテ翰林謫仙子ニ酬ユ」といふ詩を作つて唱和してゐるが、これによれば兩人は揚州で会つた後、ともに南京に遊んだのである、ともかく李白の詩に多く見られる南京の風物を詠じた詩は、概ねこの頃のものであらう。魏・が伝へる、侍童と美妓とを伴ふ、江北とはうって変つた金陵の生活が真とすれば、江南は風光のみならず種々の点で彼を恵んだものと思はれる。

前述の如く、金陵を中心とする作は多数に上るが、彼は若年の頃、ここに来てゐるから、すべてが必ずこの時期のものだとはいへない。しかしここではその中の見るべきものを二三録してみよう。

登金陵鳳凰臺 金陵の鳳凰台に登る

鳳凰臺上鳳凰遊 鳳凰台上 鳳凰遊びしに

鳳去臺空江自流 鳳去り台むなしうして江おのづから流る。

吳宮花草埋幽徑 吳宮の花花草 幽徑を埋め

晉代衣冠成古丘 晉代の衣冠古丘をなす。

三山半落青天外 三山 なかば落つ青天の外

二水中分白鷺洲 二水 中分す白鷺洲。

總為浮雲能蔽日 すべて浮雲のよく日を蔽ふがために

長安不見使人愁 長安は見えず人をして愁へしむ。

鳳凰台は南京城の西南隅にあり、劉宋の元嘉十八年に鳳凰がここへ来たといふのでその名がある。三山は南京の西南にあり、揚子江に臨んでゐる。この詩は崔・の「黄鶴樓」の調と意とをそのままにとつてゐるといふので、種々問題とされてゐる。しかし南京の歴史と長江の渺茫感と、西北の方を望んで長安を思出す李白の感情とが、渾然と融合してゐることは認めねばならない。

南京は呉の孫権が都して以来、六代の都であり、隋唐以来は都ではなくなつたが、文化燦然たりし南朝の面影を今だに残してをり、史蹟も多いので、李白たらずとも懐古的にならざるを得ない地である。彼の詩では、

### 金陵第三

六代興亡國 六代興亡の国<sup>418</sup>

三杯為爾歌 三杯なんぢがために歌ふ。

苑方秦地少 苑は秦地にくらべて少<sup>419</sup>

山似洛陽多 山は洛陽に似て多し。

古殿吳花草 古殿 吳の花花草

418 吳・東晉・宋・齊・梁・陳の六朝  
419 長安

深宮晉綺羅 深宮 晋の綺羅<sup>420</sup>  
 併隨人事滅 あはせて人事に随つて滅し  
 東逝與滄波 東逝 滄波<sup>421</sup>とともにす。

がこの趣を歌つて佳作である。

勞勞亭

天下傷心處 天下の傷心の処  
 勞勞送客亭 勞勞 客を送るの亭。  
 春風知別苦 春風も別れの苦しみを知り  
 不遣柳條青 柳条をして青からしめず。

勞勞亭は城南の秣陵関の辺にあつて、旅人の別をなす場所だった。この詩は僅々二十字の短詩で、奇警な辞句もないが、惜別の意は自ら表はれてゐる。

それから前に掲げた「東魯ノ二稚子ニ寄ス」といふ詩は、呉地にあつての作と見えてゐるから、この頃、金陵付近での作と見るべきであらう。同じくこの頃の作で、やはり李白の骨肉の情をのべたものに「楊燕ノ東魯ニ之クヲ送ル」といふ詩がある。

關西楊伯起 關西の楊伯起<sup>422</sup><sup>423</sup>

漢曰舊稱賢 漢曰もと賢と稱す。

四代三公族 四代三公の族<sup>424</sup><sup>425</sup>

清風播人天 清風 人天に播<sup>426</sup>く。

420 晋の貴族のつけたあやぎぬとうすぎぬ。

421 揚子江の波立てて流れる水。

422 函谷関の西をいふ。

423 後漢の人楊震、字は伯起、儒学を以て関西の孔子といはれた。

424 楊震、その子秉、孫の賜、曾孫の彪と四代。

425 後漢では太尉、司徒、司空。

426 人間界と天上界。

夫子華陰居 夫子も華陰に居り<sup>427</sup>

開門對玉蓮 門を開いて玉蓮に對す。<sup>429</sup>

何事歷衡霍 なにごとぞ衡・霍を歴<sup>430</sup>

雲帆今始還 雲帆いま始めて還る。

君坐稍解顏 君 坐してやや顔を解き<sup>431</sup>

爲君歌此篇 わがためにこの篇を歌へ。

我固侯門士 われはもとより侯門の士<sup>432</sup>

謬登聖主筵 謬<sup>あやま</sup>つて聖主の筵に登る。

一辭金華殿 一たび金華殿を辭し。<sup>433</sup>

踏踏長江邊 踏踏<sup>ソウトト</sup>たり長江の辺。<sup>434</sup>

二子魯門東 二子 魯門の東

別來已經年 別れてこのかたすでに年を経たり。

因君此中去 君がこの中より去るによりて

不覺淚如泉 覺えず淚 泉のごとし。

前半は楊燕のことを敘したのであるが、彼が山東を通るといふので、その地にある二子（顔黎、平陽）のことを思出し、「覺えず淚泉のごとし」の句を吐くに至っては、李白も子を思ふの情は世の常の父に劣らなかつたことが知られる。

427 先生、長者の尊称、あなた。

428 楊震の生地。

429 華山の蓮花峰

430 衡山は湖南省にあり、五岳の南岳。霍山は安徽省

431 笑ふ。

432 諸侯の家に出入する士か。

433 唐では金鑾殿。

434 疲れた様

金陵でのもう一つの挿話が「旧唐書」にのせられてゐる。

「李白が宮廷からしりぞげられ江湖に放浪し、終日飲酒してゐる頃、侍御史崔宗之も左遷されて金陵にゐたが、ともに飲酒し唱和した。ある時、月夜に舟に乗り、采石磯(当塗と南京との中間)から金陵に至ったが、この時、李白は宮廷で用ひた錦の袍うはせを着、舟の中では大あばりであたりを見廻して大笑ひし、かたはらに人なきがごとしであった。」

と。崔宗之はかの飲中の八仙の一人である。長安の故友を迎へた喜びに、そのころ用ひた礼服を着用したのであらうか。失意の時にあつてもなほ闊達な李白の面目躍如たる挿話である。

李白は金陵から再び宣城に赴いた。その間、南陵を經過したと見えてこの地の県丞常某に關係した詩が三篇ある。「五松山二於イテ南陵ノ常賛府ニ贈ル」、「懷ヲ書シテ南陵常賛府ニ贈ル」、「南陵ノ常賛府ト五松山ニ遊ブ」がそれである。五松山は南陵銅井の西五里、古精舎ありとの註がある。この三詩の中、第二の「懷ヲ書ス」の詩は李白のこの頃の心境を伺ふ上に重要である。曰く、

歳星入漢年 歳星漢に入るの年<sup>435</sup>

方朔見明主 方朔<sup>436</sup> 明主に見ゆ<sup>まみ</sup>

調笑當時人 調笑<sup>437</sup>す当時の人

中天謝雲雨 中天 雲雨に謝<sup>さ</sup>る。

一去麒麟閣 一たび麒麟閣<sup>438</sup>を去り

遂將朝市乖 つひに朝市と乖<sup>439</sup>く。

故交不過門 故交も門を過ぎず

秋草日上階 秋草 日に階に上る。

當時何特達 当時なんぞ特達<sup>440</sup>

435 木星の漢名、東方朔はこの化身と

436 漢の武帝に仕へた東方朔

437 嘲笑

438 武帝が建てた閣、ここでは武帝の宮廷。

439 朝廷や市井

440 特別に衆からぬき出る。

獨與我心諧 ひとりわが心と諧かなふ。

置酒凌歊臺 酒を置く凌歊リョウコウ台<sup>441</sup>

歡娛未曾歇 歡娛いまだかつて歇やまず。

歌動白紵山 歌は動かす白紵ハクヂョ山<sup>442</sup>

舞迴天門月 舞は迴めぐる天門443の月。

問我心中事 わか心中の事を問ふ

爲君前致辭 君がために前すんで辭を致す。

君看我才能 君看よ我が才能

何似魯仲尼 魯チュウの仲尼ニといづれぞ。<sup>444</sup>

大聖猶不遇 大聖なほ不遇

小儒安足悲 小儒いづくんぞ悲しむに足らん。

雲南五月中 雲南 五月の中

頻喪渡瀘師 頻りに渡瀘445の師を喪ふ。

毒草殺漢馬 毒草 漢馬を殺し

張兵奪秦旗 張兵446 秦旗447を奪ふ。

至今西二河 今に至るも西二河448

441 当塗臬城の北の黄山の上に宋の武帝が建てた台。

442 当塗臬の東、桓温がここに遊んで白紵歌を作った。

443 当塗臬の博望山は西梁山と向ひあつて揚子江をはさみ天門と称せらる。

444 孔子

445 瀘水を渡つて攻め入つた軍隊

446 伏兵

447 唐軍の軍旗

448 西洱河が正し、洱海のこと。

流血擁僵屍 流血 僵屍<sup>キョウシ</sup>を擁す。

將無七擒略 將に七擒の略<sup>450</sup>なく

魯女惜園葵 魯女 園葵を惜む。<sup>451</sup>

咸陽天下樞 咸陽は天下の樞<sup>452</sup>たるに<sup>453</sup>

累歳人不足 累歳 人足らず。<sup>454</sup>

雖有數斗玉 數斗の玉ありといへども

不如一盤粟 一盤の粟<sup>ソク</sup>にしかず。<sup>455</sup>

・得契宰衡 頼<sup>さいはひ</sup>に宰衡<sup>456</sup>と契<sup>まじは</sup>るを得

持鈞慰風俗 鈞<sup>キン</sup>を持<sup>チ</sup>て風俗<sup>457</sup>を慰めん。

自顧無所用 みづから顧みるに用ふるところなく

辭家方來歸 家に辭してまさに來り歸る。

霜驚壯士髮 霜は驚かす壯士の髮

淚滿逐臣衣 淚は滿つ逐臣<sup>チクシン</sup>の衣。

以此不安席 ここをもつて席に安んぜず

蹉跎身世違 蹉跎<sup>サタ</sup>して世と違<sup>たが</sup>ふによる。

たほれた死骸

諸葛孔明が孟獲を七たび擒へ七たび縦つたとき計略

魯の漆室の女が君老い太子幼にして国の危いのを心配したといふ故事。

長安

中心

來る年も來る年も

穀物

宰相

天下の政權をとる。

457

456

455

454

453

452

451

450

449

終當滅衛誇 つひにまさに衛の誇りを滅し

不受魯人讒 魯人の讒りを受けざるべし。 458

この詩を見ると、崩壊に瀕した長安朝廷の状勢を李白が良く知ってをり、これに切齒してある愛国の情が明らかに知られる。宋代の詩人はとかく李白に愛国の情の発露がないとして、杜甫の下位に置きたがる傾きがあるが、李白に愛国詩がないといふのはこの一篇をもってしても李詩を知らざる者の言といへよう。

いま翻つて李白が去つた後の長安政界の有様を一瞥して見よう。

李白の去つた翌年、天宝四載、楊太真が貴妃の位に封ぜられた。これまでは娘子と呼ばれてゐたのが、正しく妃の位に具はつたのである。これより玄宗は益々遊宴を事として政治を顧みず、僥倖をこひねがふものは、帝の好むところに就いて、その傾向を助長せしめた。

宮中の道教の尊信も益々激しくなつた。天宝七載、老子が華清宮の朝元閣に現はれた。そこで帝はこれを改めて降聖閣と名づけた。翌八載、太白山人李渾なるものは太白山の金星洞に靈符ありといひ、帝が求めさせると果してこれを得た。李白が見んことを求めて得られなかつた老上道君や奇蹟が現実になつたのである。しかしこれが詐術であつたとしたらどうであらう。かかる詐術を行ふ者や、またこれにたぶらされる宮廷の存在は認めたくないが、もし果してさうだつたとしたら、どうであらう。

廷臣の軋轢は益々激しい。李白の如く無力であり、身を斥けること容易な者と異つた人間同士に於いては、これが更に大なる悲劇を惹起するのは当然である。それは天宝五載の正月の韋堅と皇甫惟明の左遷から始まつた。韋堅は皇太子、即ち後の肅宗の妃の兄である。かかる貴戚さへ左遷されるのである。それに先立つとはいへ、微官で門閥をもたない李白如きが、忽ちにして逐はれたのは当然の事なのであつた。しかも韋堅等は七月には死を賜ひ、同時に李白と仲好かつた前の左相李適之も左遷されて自殺した。かかる大獄はその後も頻々として起つた。それを一々記すことは煩はしいが、六載正月、任地で死を賜はつた北海の太守李邕のことだけは一言して置かなければなるまい。

李邕は盛唐の詩人としても注目すべき一人であるが、杜甫や李白と交際のあつた点が特に注意を要する。彼は揚州の人であり、高宗の顕慶中に仕官してより硬骨の名を悉まにし、そのため度々左遷され、多く地方官に任じた。義を重んじ、士を愛したため、その入京するや、士人は街路に聚つて眺め、すずなりになつたといふ。開元の終りに北海(山東省益都)の太守となつたが、この時杜甫を招いてこれと詩を語つたことは、杜甫の「八哀詩」その他に見えてゐる。

ここに至つて李林甫の憎しみを受け、受賄の罪に問はれて殺されたのである。彼はもともと細行を顧みぬたちで至る所で賄賂を受け、遊獵をこととし、またその詩文によつて得た金も数万に上つたといはれるから、自ら招いた運命ともいへるが、李林甫や歴代の宰相に憎まれたのは主として、その士人に於ける人望に対する嫉妬であつたといへば、当時の政界の状態を如り得よう(「旧唐書」190中「唐書」202)。李白

もこの李邕と浅からぬ関係があり、その冤を痛惜したことは、彼に「李邕二上ル」の詩があり、また「江夏ノ修静寺二題ス」といふ詩は後に江夏(武昌)の李邕の旧居に至つての作であつて、

我家北海宅 我家の北海の宅<sup>459</sup>

作寺南江濱 寺となる南江の浜<sup>ほとり</sup>。

空庭無玉樹 室庭 玉樹なく

高殿坐幽人 高殿 幽人を坐せしむ<sup>460</sup>。

書帶留青草 書帶<sup>461</sup> 青草を留め

琴堂暮素塵 琴堂 素塵に暮はる<sup>おほ</sup>。

平生種桃李 平生<sup>へいぜい</sup> 桃李を種えしが

寂滅不成春 寂滅して春をなさず<sup>462</sup>。

といつて、悲痛慷慨の気が溢れてゐることによつて知られる。

かく廷臣の争は天宝年代に至つて激しくなり、この争に常に勝利を占めたのは李林甫であつたが、やがて彼が天宝十一載に死するや、楊貴妃の族兄揚国忠がこれに代つて益々私党を樹て政権を壟断したのである。さつしてこの二人がいづれも無学文盲の小人であり、眼中国家なく君王なかつたことは周知の事実である。

濫刑が既に党争に因るとならば、ここに濫賞が行はれるのも当然である。賞は功なき者に与へられ、官には無能者が任ぜられた。これを史実に見れば、天宝五載、李林甫、陳希烈の二宰相の像を長安の太清宫、老子廟の老子の像の傍に置いた如きがそれである。李林甫の姦佞の小人なることは前述の如くであるが、陳希烈も安祿山の軍が長安に入るや、これに降参して宰相に任ぜられた無恥の徒である。これをもつて老子の侍人とするが如きはいかに玄宗に明のなかつたかを思はしめる。また七載には宦官の高力士に驃騎大將軍の官を与へ、九載には安祿山を東平郡王に封じてゐる。いづれも未曾有の待遇であるが、中でも蛮族の出身であり、戦功もない武將を皇族待遇としたが如きは濫賞極まるといはねばならない。官爵が濫りに与へられたばかりでなく、天宝年間には臣下への賜物が大規模に行はれた。楊貴妃の一族や安祿山への恩

459 わが李氏の

460 世を避けてゐる人

461 草の名と

462 弟子たちを沢山とりたてたが誰ひとり出世したものはない。

賜の厚大であったことは周知の如くである。他にも八載の正月に京官すべてに絹を賜ひ、春の遊に備へしめ、二月には百官を左藏庫に引いて錢幣を縦観せしめ絹を賜つて歸らせ、十一載八月にはまたこれを行ひ、十三載には躍龍殿門に出御し、群臣を宴して絹を賜ひ、歡を尽くし罷めたが如きいづれもその例とし得る。

然らば当時の経済状態はどうかといふに、国家財政は玄宗の豪奢と外征とによつて、既に赤字状態だったやうである。朝廷はこれを補はんがため種々対策をなしたが、それはいづれも官が民の利を奪ふ種類のものではあつた。しかもこの間、天災漸く多く、天宝十載の春には、陝郡（河南省陝県）の運送船が火を失して米船二百余隻を焼き、秋には広陵（揚州）に大風があり船数千艘を覆した。その直後には長安の武庫が火を失し、武器四十七万を焼失した。十二載には長安に永雨があり、米価が騰貴したので朝廷の米十万石を出して窮民を救はねばならなかつたが、十三載秋また六十余日に亘つて永雨があり、長安の家々は類れ、物價が騰貴したので太倉の米一百万石を出して貧民を救ふといふ有様であつた。元来、長安を中心とする陝西地方はこの頃に至り殆んど江南地方の物資に頼る形勢となつてゐた。隋の時に開かれた大運河と、天宝の初に韋堅や韓朝宗の開いた滹水、渭水の運河によつて、水運の便が急速に開けたことがこれを助長したのは事実であるが、江南肥沃なりといへどもその物資に頼らねばならぬほど華北の産業が衰へ、加ふるに長安の人口の稠密によつて、かかる物資の不均衡状態が発生したのである。一朝事あつて運河の水運が停止したならば、長安の支ふる能はざることは、かくて当然の帰結となつたのである。前述の運送船の火災も相当地な打撃であつたらうが、安祿山が河北に起つて汴、洛を隔るるや、官兵が食なくして敗れたのは、このことから予想し得ることであつた。

かく多くの問題を孕む天宝の末年に玄宗はまた雲南や吐蕃方面に大兵を送つて、唐朝の瓦壊を促進した。吐蕃の石堡城の攻防には唐は開元の末年より天宝八載に至る長年月を要し、哥敘翰の善戦によつてやうやくこれを確保し得たが、雲南方面では大失敗を演じた。雲南は当時唐の領土ではなく、今のタイ人の同族が建てた南詔国があり、その都は大理に近く大和城と呼ばれてゐた。唐にははやくより恭順の意を表し、質子を長安に遣してゐたのが、天宝八載頃より唐の辺吏の挑発によつて吐蕃と連合して命を聴かなくなつた。十載、劍南節度使の鮮于（センウ）仲通は六万の兵を率ゐてこれを伐ち、瀘水を渡つて攻めたが西洱河に大敗し、死者大半であつた。朝廷はこれに懲りず十三載には再び大軍を興し、李宓を將として攻めさせたが、またまた西洱河に大敗した。この間の兵糧運搬のため、兵丁の徵発多く、主戦論の筆頭たる楊国忠は怨みの的になつたのである。この当時の感情は白楽天の長詩「新豊折臂翁」や杜甫の「兵車行」によく表はれてゐる。

しかし以上に私が縷々数千言を費して説明した当時の唐朝の状況は、前述の「懷ヲ書ス」の詩に一層よく表はれてゐるのである。李白の詩はいたづらに浪漫的であつて、写實的な趣を能くしないといふものもあるが、これによつて彼は能くしないのではなくして、し得るが、それを好まなかつたのだといふことが知られる。野にある人間が時政を批評するは所謂処士横議であつて、大言壮語のみならばともかく、皮相的な事実を捉へて論ずればデマゴグとなることが多い。李白はそれを彼の主義として好まなかつたし、当時の唐朝の勢力も少くとも見かけではいまだかかることを許し、もしくは必要とするほど衰へてゐなかつたのである。「懷ヲ書ス」が彼としては未曾有の激越な詩でありながら、杜甫や白楽天の作と比べると、おのづから異なるのはかかる事情に基づくと思ふ。

なほまた題材から推してこの頃の作に相違ないものに有名な

哭晁卿衡 晁卿衡を哭す

日本晁卿辭帝都 日本の晁卿 帝都を辞し

征帆一片蓬蓬壺 征帆一片蓬壺を遠る。<sup>63</sup>

明月不歸沈碧海 明月 帰らず碧海に沈み

白雲愁色滿蒼梧 白雲 愁色 蒼梧に滿つ。<sup>64</sup>

の詩がある。これは周知の如く阿倍仲麻呂の遭難を聞いて作られた哀悼の詩である。仲麻呂は文武天皇の御代の二年の生れといふから、李白より長すること三歳、元正天皇の養老元年(唐の開元五年)の遣唐船に留學生として乗込んだ。この船には同じく留學生として吉備真備がおり後に問題を起した留學僧玄<sup>ケンボウ</sup>も同船してゐた。李白と交があつたのはその左補闕の官だつた頃で、李白が長安にゐた僅か三年間のことであつたが「あまのはらふりさけ見れば」の歌を詠んだ仲麻呂とこの詩人との交友が期間の短さにも拘らず深かつたことはこの詩が証明してゐる。仲麻呂が帰朝するため遣唐大使藤原清河の船に乗船したのは天寶十二載、国を出てから三十六年目のことであつた。長安を出発するに際しては王維が送別の詩「秘書晁監ノ日本國へ還ルヲ送ル」を贈つた。乗船の地は江南の蘇州、船は恒例の如く四船より成り、第一船には大使、第二船には副大使大伴古麻呂、第三船には吉備真備が乗つてゐた。この四つの船の中、第一船のみが奄美大島の近くより漂泊して遠く安南の驩州<sup>カンシュウ</sup>(今の越南のハノイの南)に着いたのである。この遭難のことが唐に知られたのは日本からの報知によつてであり、もとより越南に生存してゐるとは知る由もない日本、唐いづれでも清河、仲麻呂の溺死が確定的に考へられたのである。衡は朝衡と同じく仲麻呂が当時唐で与へられてゐた衛尉卿の雅称である。蒼梧は東海の仙島の称である。仲麻呂が幸ひに命を全うし得た清河とともに長安を目指して北上した時は、天寶十三載の半ば過ぎ、安祿山の乱の直前で、李白は江南にあり、これより再びと相見ることとはなかつたと思ふべきである。李白がこの詩を作つた地も仲麻呂が船出した蘇州もしくはその近辺であつたらう(杉本直治郎博士「阿倍仲麻呂伝研究」)。

天寶十三載の冬もしくは翌年の春、李白は南陵より再び宣城に赴いた。彼はここで長史の李昭やその長官の太守趙悦や録事參軍吳鎮の庇護の下に、悠々自適の生活に入らうとしてゐたのであるが、この時、李白の憂へてゐた唐の崩壊は、内よりには非ずして、外の安祿山の謀叛によつて始まつたのである。

463 蓬萊に同じ。  
464 東北海中の郁洲のこと、もと蒼梧から飛んで来た。



## 九 閨怨の詩人

### 九 閨怨の詩人

安祿山の乱とこれに対処した李白の事蹟とを述べる前に、ここで閨怨の詩人としての李白のことを一応のべておきたい。

前述の如く、李白の居住は少年時代以来、流転を極めてある。僅かに最初の結婚の頃、即ち安陸時代と後の開封居住の頃とにやや定住の跡が見られる位で、その他の住ひは永きは数年、短きは一年に足らず、羈旅の生涯といつても過言ではない。芭蕉の如き無配偶者、西行の如き世捨人ならいざ知らず、彼は妻子を有してゐたのである。子に対する愛情は既に述べた。妻に対してはどうであつたらうか。私はこれを李白に閨怨の詩の多い所以と解したい。

李白の旅には妻子を伴ふことは殆どなかつたと見られる。現に安祿山の乱後、彼が宣城より剡溪にゆき、また西に引返して廬山に赴かうとした途中、秋浦（安徽省貴池県）で妻に送った詩があり、

秋浦寄内 秋浦にて内に寄す

我今尋陽去 われいま尋陽に去り<sup>465</sup>

辭家千里餘 家を辞すること千里余。

結荷見水宿 結荷<sup>466</sup> 水宿<sup>467</sup>を見る

却寄大雷書 かへつて寄す大雷の書。 <sup>468</sup>

雖不同辛苦 辛苦を同じくせずといへども

愴離各自居 離れを愴<sup>いた</sup>んでのおのおのみづから居る。

465 唐の江州、今の江西省九江

466 荷物をとこのへる。

467 舟のやどり場

468 大雷池は湖北省の望江県にある。宋の鮑照がここで登大雷岸与妹書を書いた。

我自入秋浦 わが秋浦に入つてより

三年北信疏 三年 北信疎なり。<sup>469</sup>

紅顏愁落盡 紅顏 落日を愁へ

白髮不能除 白髮 除くあたはず。

有客自梁苑 客あり梁苑よりし<sup>470</sup>

手攜五色魚 手に五色の魚を携ふ<sup>471</sup>

開魚得錦字 魚を開きて錦字を得るに<sup>471</sup>

歸問我何如 帰つてわがいかんを問ふ

江山雖道阻 江山に道阻<sup>472</sup>たるといへども

意合不爲殊 意合すれば殊なれりとなさず。

といて、開封より家信を得たときの情を詠じてゐるが、これで見てもわかる通り、至徳元年には別離後すでに三年になつてゐるのである。また李白がこの妻に代つて詠じた詩もある。

自代内贈 自ら内に代りて贈る

寶刀裁流水 宝刀流水を裁つとも

無有斷絶時 断絶の時あるなし。

妾意逐君行 妾が意 君を逐うて行く

纏綿亦如之 纏綿<sup>473</sup>またかくのごとし。<sup>472</sup>

別來門前草 別れてこのかた門前の草

秋巷春轉碧 秋は黄<sup>474</sup>(<sup>475</sup>)に春はまた碧<sup>476</sup>なり。

掃盡更還生 掃ひ尽せば更にまた生じ

萋萋滿行跡 萋萋<sup>477</sup>として行跡に満つ。<sup>473</sup>

469 北からのたより

470 梁園に同じ、開封

471 錦に織りこんだ手紙、妻よりの手紙

472 まつはつて離れざるさま。

473 草の茂った様

鳴鳳始相得 鳴鳳はじめあひ得しが  
 雄鷲雌各飛 雄鷲いて雌おのおの飛ぶ  
 遊雲落何山 遊雲いづれの山にか落つ  
 一往不見歸 一たび往いて歸るを見ず。  
 估客發大樓 估客<sup>474</sup> 大樓<sup>75</sup>を発し  
 知君在秋浦 知る 君が秋浦にあるを。  
 梁苑空錦衾 梁苑むなく錦衾  
 陽臺夢行雨 陽台 行雨を夢む。  
 妾家三作相 妾が家は三たび相となりしが  
 失勢去西秦 勢を失つて西秦を去る。  
 猶以舊歌管 なほ旧歌管あり<sup>476</sup>  
 淒清聞四鄰 淒清 四鄰に聞ゆ。<sup>477</sup>  
 曲度入紫雲 曲度<sup>478</sup> 紫雲に入り  
 啼無眼中人 啼いて眼中の人なし。  
 妾似井底桃 妾は井底の桃のごとく  
 開花向誰笑 花を開けども誰に向つてか笑まむ。  
 君如天上月 君は天上の月のごとく  
 不肯一日照 あへて一たびも廻照せず。  
 窺鏡不自識 鏡を窺ふもみづからも識らず<sup>479</sup>  
 別多憔悴深 別多くして憔悴<sup>シヨクスイ</sup>深し。

行商人

秋浦の北の大樓山

ふるくからゐる楽人がをり。

すずしく清い音をたてて

曲のリズム

自分でも見わけがつかない。

安得秦吉了 いくんぞ秦吉了を得て<sup>480</sup>

為人道寸心 人のために寸心を道はしめん<sup>481</sup>

この詩は明清の詩人が多く作った閨怨の詩よりも清新である。ところでここで問題になるのは、その梁苑にゐる妻とは誰かといふことである。李白の結婚に関しては魏・以外に拠るものがない。魏・は李白が妻を四度娶ったことをいひ、最初は許氏を娶って「一男一女を生み(前述)次に劉氏を娶って離婚し、三たび魯の一人婦人を娶って一子頗黎(ハリ)を生んだといひ、四度目の結婚を「終に於宋二娶ル」といつてゐる。そこで開封にゐた妻は、この後の二人の中のどれかでなければならぬが、この詩でみると新婚の情を湛へてゐるやうな所もあるから、宋に娶った妻のやうである。ところでまたこの宋が地を指すのか、姓を指すのかが問題になるが、李白が後に夜郎に流される時、宗・といふ者に贈った詩があつて、その姉が自分に嫁いだ趣をのべてゐるから、宋は宗の誤りで、宗氏の婦人を娶ったと解すべきだらう。さつするとこの詩の「妾家三作相」といふのは、則天武后の治世に三度宰相になつた宗楚客の家の出といふことになり、この婦人の素性は一層はつきりして来る。至徳元年の初には、安祿山の兵は既に開封、洛陽に迫つてゐたのであるから、李白の心配もさこそと思はれるが、それよりもこの詩に表はれた孤閨にある自分の妻の心情をこれに代つて詠ずるといふ詩作の態度が、李白の多くの閨怨の詩の基盤であつたといふことが考へられる。即ち彼は自己の生活が常に羈旅にあり、そのため妻とは殆どすべて別居の状態にあつたが、この別居に関しては彼もたえず責任を感じてをり、従つて妻の立場になつて考へることも多かつたのであらう。ともかく李白の詩中の代表として、今なほ愛誦されてゐるものの中には、閨怨の詩が多く、これを看過しては李白の詩を論ずることができない。

さて閨怨を歌ふ際に、李白はおのが感情、おのが妻の感情を基としながら、これに種々の背景を設置して、これらの詩が千篇一律に陥ることを巧みに防いでゐる。かうした背景の一は、戦場にある夫を懐ふ妻である。例へば有名な

## 秋思

燕支黄葉落 燕支に黄葉落ち<sup>482</sup>

妾望自登臺 妾は望んでみづから台に登る。

海上碧雲斷 海上 碧雲断え

單于秋色來 單于に秋色来る<sup>483</sup>

480 九官鳥

481 心

482 匈奴内の山

483 單于大都護府はいまの綏遠省帰綏方面に置かれた。

胡兵沙塞合 胡兵 沙塞に合し

漢使玉關回 漢使 玉關より回る。<sup>484</sup>

征客無歸日 征客 歸る日なく

空悲・草摧 むなしく悲しむ・草クサイノウの推くだくるを。<sup>485</sup>

といふ詩がさつであつて、当時の西北方への用兵をテーマとしたのであるが、中に出て来る地名の矛盾からもわかる通り、写実といふよりはむしろ、前運の如く李白の夫婦生活の反映とし得る。さらに有名なのは「子夜呉歌」(秋)である。

長安一片月 長安 一片の月

萬戸擣衣聲 万戸 衣を擣つつの聲。

秋風吹不盡 秋風 吹いて尽きず

總是玉關情 すべてこれ玉關の情。

何日平胡虜 いつの目か胡虜を平げて

良人罷遠征 良人 遠征を罷やめん。

前二句で大都長安の秋の夜を正確に写し出し、そこにひかく砧の晋で戦地にある良人のための衣をうつ妻たちを越し来り、後二句でさらにその情あるはしめてゐる。李白の最も得意とする手法であつて、愛調されるのも当然である。また「子夜呉歌」の冬も同じ趣である。

明朝驛使發 明朝 驛使発せん<sup>486</sup>

一夜絮征袍 一夜 征袍フクに絮フる

素手抽針冷 素手 針を抽ひけば冷かに<sup>487</sup>

那堪把剪刀 なんぞ剪刀ニを把とるに堪へん。<sup>488</sup>

484 玉門関、西歐への関門

485 蘭の一種

486 飛脚

487 白い手

488 はさみ

裁縫寄遠道 裁縫して遠道に寄す

幾日到臨洮 幾日か臨洮(リントウ)に到らん。

489

塞い夜かじかむ手で衣を縫って送るのである。これは前首のやつな大きな情景をとらへず、ある家の一人をとらへて、思夫の情をいはしめてゐる。地味ではあるが、乾隆帝も真摯といつてゐる。この二篇の意をさらに敷衍したのが「掃衣篇」であり、これも佳作である。またやはり征夫を思ふ詩で「独り見エズ」といふ樂府は少し趣を異にしてゐて面白い。

白馬誰家子 白馬たが家の子ぞ

黄龍邊塞兒 黄龍辺塞の兒。

490

天山三丈雪 天山三丈の雪<sup>491</sup>

豈是遠行時 あにこれ遠行の時ならんや。

春・忽秋草 春・たちまちに秋草

莎雞鳴西池 莎雞<sup>サケイ</sup>西池に鳴く。

492

風推寒櫻響 風は寒棕<sup>カシノウ</sup>を推いて響き<sup>493</sup>

月入霜閨悲 月は霜閨に入つて悲しむ。

494

憶與君別年 憶ふ君と別るるの年

種桃齊蛾眉 桃を種ゑて蛾眉に齊し。

桃今百餘尺 桃いま百余尺

花落成枯枝 花落ちて枯枝と成る。

489 長城西南端、甘肅省

490 契丹との対陣の地

491 匈奴中の山

492 きりぎりす

493 しゅろの一種

494 霜夜の夫のぬない寢室

終然獨不見 終然としてひとり見えす

流淚空自知 流淚むなくみづから知る。

別れる時、自分の蛾眉の大きさであった桃が百余尺となり、更に枯れたといつて別れの時の長いのをいふのは、李白の得意の手法で、或は嫌ふ人もあるかと思ふが、私は好きである。五句の忽といふ字もこれとよく対応してゐると思ふ。

夫婦の別離を叙するに当り、李白の借りる背景の第二は商人の妻である。この頃になつて商人の行商も活発になり、特に江南の商人は長安、洛陽方面や揚子江上流方面に盛んに往来した。李白は巧みにこの世相をとらへ來つたのである。樂府「長干行」の如きがそれで、その一はいふ、

妾髮初覆額 妾が髪はじめて額を覆へば

折花門前劇 花を折つて門前に劇る。

郎騎竹馬來 郎は竹馬に騎りて來り

邊牀弄青梅 牀を遠つて青梅を弄ぶ。

同居長千里 同じく長千の里にをり

兩小無嫌猜 兩小 嫌猜なし。<sup>495</sup>

十四爲君婦 十四にして君が婦となり

羞顏未嘗開 羞顏 いまだかつて開かず。

低頭向暗壁 頭を低れて暗壁に向かひ

千喚不一迴 千たび喚ぶも一たびも迴(めぐ)らさず。

十五始展眉 十五にして始めて眉を展ぎ

願同塵與灰 塵と灰とを同じくせんと願ふ。

常存抱柱信 常に抱柱の信を存し<sup>496</sup>

495 きらつたりつらんだりすること  
496 尾生のご故事より、恋人に対する信頼

豈上望夫臺  
あに上らんや望夫台<sup>497</sup>

十六君遠行  
十六 君遠くに行く

瞿塘艷瀨堆  
瞿塘<sup>498</sup>の艷瀨堆<sup>499</sup>

五月不可觸  
五月 觸るべからず

猿聲天上哀  
猿声 天上に哀し<sup>かま</sup>

門前遲行跡  
門前の遲行の跡<sup>500</sup>

一一生綠苔  
一一 綠苔を生ず

苔深不能掃  
苔深くして掃ふ能はず

落葉秋風早  
落葉 秋風早し

八月蝴蝶黃  
八月 蝴蝶黃に

雙飛西園草  
双<sup>なご</sup>んで西園の草に飛ぶ

感此傷妾心  
これに感じて妾が心を傷ましめ<sup>いた</sup>

坐愁紅顏老  
そぞろに愁ひて紅顏老ゆ

早晚下三巴  
早晚 三巴<sup>01</sup>を下らば

預將書報家  
あらかじめ書をもつて家に報せよ

相迎不道遠  
あひ迎へて遠きを道はず<sup>い</sup>

直至長風沙  
ただちに至らん長風沙<sup>502</sup>

497 四川省忠県にありと

498 揚子江の峽

499 瞿塘の峽口にある岩礁

500 夫がくづくつしながら行ったあと

501 巴郡、巴東、巴西の三郡

502 安徽省貴池県の地名と

長干里は南京の秦淮の南に当り行商人の住地であった。この詩は冒頭の筒井筒の仲を絞したあたりも面白く、少女にして婦となり、夫婦の情を解せずといふ辺りも面白い。なほこれと同じ趣の詩に「江夏行」がある。

閨怨の第三は、宮中の美人が君王の寵を得ずして悲しみ怨むことをテーマとする詩である。かの「玉階怨」の如きはその代表的なものであつて、

玉階生白露 玉階に白露を生じ

夜久侵羅襪 夜久しくして羅襪を侵す。

卻下水精簾 水精の簾を却下して

玲瓏望秋月 玲瓏 秋月を望む。

の二十字は、寵愛を得ない婦人の無限の哀怨を湛へてゐる。李白の絶句、殊に五言絶句に至つては、古今にこれに比するものを見ないといはれるのも、この詩などより起つたことで、不当の語ではない。その他「妾薄命」、「長信宮」、「長門怨」二首、の如きみなこれと同じ趣を歌つてゐる。

以上のものとは異つて、夫婦の地位、別れの原因を具体的にしない閨怨の詩も多い。「遠上二寄ス」十二首はみなそれであり、「黃葛篇」もこの類である。

#### 黃葛篇

黃葛生洛溪 黃葛は洛溪に生じ<sup>07</sup>

黃花自綿冪 黃花おのづから綿冪<sup>08</sup>

青煙蔓長條 青煙 長條を蔓らじ<sup>09</sup>

503 うすぎめの足袋

504 水晶

505 おろして

506 水晶のすだれの明るいすきまから

507 洛水の谷間

508 こまかにおほひかぶさつてゐる。

509 長いえだ

繚繞幾百尺 繚繞<sup>リョウジョウ</sup> 幾百尺<sup>510</sup>

閨人費素手 閨人 素手を費し

採緝作絺綌 採緝<sup>サイシユウ</sup>して絺綌<sup>チゲキ</sup>を作る。<sup>511</sup>

縫為絶國衣 縫ひて絶国の衣となし<sup>512</sup>

遠寄日南客 遠く日南<sup>13</sup>の客<sup>14</sup>に寄す。

蒼梧大火落 蒼梧<sup>15</sup>に大火<sup>16</sup>落つるとも

暑服莫輕擲 暑服<sup>カウガクシ</sup> 軽く擲<sup>なげ</sup>つなかれ

此物雖過時 此の物 時を過ぐるといへども

是妾手中跡 此れ妾が手中の跡。

「子夜呉歌」に似た趣ながら、これは南方にある夫を思ふ情景に作り、また佳作たるを失はない。

妻の征夫を懐ふの情は一たび翻せば、兵士の思郷の情である。「關山ノ月」の篇はこれを歌ひ、塞外の広漢たる状景の中に兵士の思郷の情の極めて深きを歌ふ。恐らく夫子自身の中にある情がおのづからに発露したものであらう。

關山の月 關山の月

明月出天山 明月 天山を出づ

蒼茫雲海間 蒼茫たり雲海の間。

長風幾萬里 長風幾万里

吹度玉門關 吹き度<sup>わた</sup>る玉門關。

漢下白登道 漢は下る白登<sup>517</sup>の道。

510 もつれあふ。

511 細糸とあら糸の葛布

512 遠くへだたった國

513 漢の時、越南に置かれた郡

514 たびびと

515 同じく漢の時、越南に置かれた郡

516 大火は蝎座のアンタレス星、陰曆七月末から西に流れる。

517 漢と匈奴との対戦の地





## 十 茫茫走胡兵

### 十 茫茫走胡兵

天宝十四載十一月、唐の都なる長安には平盧、范陽、河東の三節度使を兼ね、東平郡王の爵を賜つてゐる東北の軍閥安祿山の謀叛の報が達した。安祿山はイラン系の父とトルコ系の母をもつ混血の蛮人で、營州（いま熱河省朝陽）の辺に住んでゐたが、范陽の節度使の張守珪にその叡智と勇敢とを愛されて養子となり、開元の中頃よりは唐軍の副将となり、二十九年には范陽の節度使に任ぜられ、爾後しきりに官を加へられたものである。体軀肥大、見るからに愛嬌があり、加ふるに巧言を以てしたから、高力士、李林甫とも善く玄宗の親任は極めて厚かった。

楊貴妃に対しても注意を怠らず、これに之つて養子たらんことを求め許された。天宝六載以来、御史大夫の官を加へられ、長安の親仁坊に宅を賜ひ、ここに妻子を置いて他意なきを示し、任地にあつては私兵を養ひ、商賈を各地に派して私富を積んでゐたが、漸く驕慢となり、異心を蓄へるに至つた。特に彼は李林甫の後を嗣いで宰相となつた楊国忠、及び西北方にあつて同じく巨兵を擁してゐた哥舒翰と善からず、これらとの軋轢が益々叛志を助長させて、この挙となつたものである。彼の兼ね任じてゐる三節度使の兵はすべてで十二万、これに私兵を加へて総兵数二十万と号し、しかも永年、これを私養した情誼はその軍をして父子軍と呼ばしめる程であり、量、質ともに侮り難い。加ふるに軍中には多くの漢人の幕僚がゐてこれに策を授ける。部将は概ね蛮人の出身で驍勇、他に比を見ない。これに対する官軍は如何にといふに、開元以来の太平は兵制の弛緩となり、兵はあつても武器なく訓練なき、無力の少兵が各地に駐してゐるにすぎず、特に長安の禁衛軍の如きは、数は多くとも将は華胄の子弟、卒はおほむね無頼の徒であつて、歌舞に長じても戦ふすべを知らない。従つて朝廷の恃むはただ哥舒翰、高仙芝、封常清、李光弼、郭子儀等の西北軍閥のみであつた。

安祿山はこれらの西北軍の到着以前に、既に河北の諸地を破竹の勢で席捲した。その祖考の墓に謁して南に発したのは十一月九日であるが、先づ太原の尹なる楊光翽を博陵郡（河北省定県）に捕へて殺し、鉅鹿郡（河北省順徳）を経て、靈昌郡（河南省滑県）を陥れて、黄河を渡つたのが、十二月二日であり、この間、直線距離にして五百料、その進軍の速度は驚異的であつたといはねばならぬ。尋いで六日には陳留郡（河南省）を陥れ、八日、滎陽を経て、洛陽に迫つたが、この時はじめて東に派遣された官軍の封常清の軍と遭遇し、十一日成臯（汜水ススイ西北）の嬰子谷でこれを撃滅し、翌十二日には早くも広の東都洛陽を陥れたのである。

洛陽を陥れた後は賊軍の進行は止った。これはその市の富裕に喜び、またここを擁して江南の物資供給の途を絶てば、長安の死命はゐながらにして制し得ると考へたからでもあらうが、また賊軍の背後に不安が生じたことにもよる。

はじめ安禄山が叛するや、その報は七日にして華清宮にあつた皇帝に届いたが、諸臣の愕然として色を失ふ中に、楊国忠のみは得々として、賊軍の亡びんこと日晷の間に在りといひ、玄宗も領(うなづ)いたといふ。然るに河北の諸城の戦はずして賊手に陥るの報の聞ゆるや、玄宗は嘆じて、「河北二十四郡、曾って一人の義士なきや」といつた。これに答ふる如く勇敢に義旗を翻したのは平原(山東省)の太守顔真卿であり、次いではその従兄常山(河北省正定)の太守顔杲卿であつた。何れも賊軍とその根拠地との聯絡を断つに足る要地である。そのため賊軍は一部を割いて後方に備へざるを得なくなつたのである。

安禄山ははじめ叛する時、君側の姦楊国忠を除くといふことを旗幟としたが、洛陽に入るや、その叛志を明らかにし、天宝十五載正月元旦、帝位に即き、国を大燕と号し、年号を聖武と定めた。これに対し、広の朝廷は哥舒翰をして二十一万六千の蛮漢軍を率ゐて洛陽を襲はしめ、李光弼、郭子儀をして山西方面より、李随等をして山東方面より、各々賊軍の背後を扼せしめて、これを包圍殲滅せんとする策をたてた。然るに哥舒翰は大兵を擁したま潼関に留つて進まず、朝廷から度々決戦を促されて、この年六月八日関を出でて靈宝(河南省)の西原で賊軍と合戦するや、大敗して関内に入った。その翌九日、その部将火拔歸仁は哥舒翰を捕へて安禄山に降り、ここに長安の防禦線は潰滅した。

ここに於いて玄宗は十一日長安退去を議し、翌日四川への巡狩の途に上つた。賊軍はこの後を追つて十七日長安に入り、残留した皇族、貴紳をはじめ一般人民の家を掠奪し、至るところ殺戮を行つた。これによつて花の如き大都長安は忽ち胡兵の住家となつたが、更に悲惨であつたのは、西狩の玄宗の一行であつた。

帝が長安を発した日は恰も一行の心中を象徴する如く細雨が降つてゐたが、その日まひるに至つても御鑣は供せられず、百姓のささげた妙によつて餓をしのぐ有様であつた。この日の宿りは望賢宮である。明けて翌十三日朝、馬嵬坡に駐するや、諸軍は騒擾して進まない。龍武大將軍陳玄礼の奏上で、国を誤つた宰相楊国忠を殺したが、諸軍はなほ不平の色を収めぬ。陳玄礼はまた乞つて、乱本を除かんといふ。玄宗は止むなく高力士に帛を賜ひ、楊貴妃を縊(くび)らせた。時に妃は齡三十八歳、帝はただ涙にくれるのみであつた。翌十四日、一行は馬嵬駅を發したが、百姓たちは路を遮つて皇太子の留らんことを乞ひ、帝はまたこれを許さざるを得なかつた。昨日は愛妃に、今日は愛子に、生別死別の差こそあれ、帝の心中は察するに余りある。翌十五日より十七日まで扶風県に止り、十八日ここを發して、陳倉(陝西省宝鸡)、散關(同西南五十支里)、河池郡(陝西省鳳県)、益昌県(四川省广元)、普安郡(四川省劍閣県)、巴西郡(四川省綿陽)を経て七月十日、蜀の成都に着く。この間、李白が嘗つて歌つた蜀道の難は、さらでだに打ちしめり勝の一行を一しほ苦しめたことであらう。

かかる大事件は江南にも逸早く伝つた。李白のゐた宣城に伝つたのは遅くとも一ヶ月を出でなかつたであらう。この時、李白は宣城より旧遊の地、剡溪に赴かんとし、宣城の太守に詩を贈つた。「乱ヲ経タルノ後將ニ地ヲ剡中ニ避ケントシ留メテ崔宣城ニ贈ル」といふ詩がそれである。

雙鵝飛洛陽 雙鵝 洛陽に飛び<sup>521</sup>

五馬渡江徼 五馬<sup>522</sup> 江徼<sup>523</sup>を渡る

何意上東門 なんぞ意<sup>おも</sup>はん上東門<sup>524</sup>

胡雛更長嘯 胡雛<sup>525</sup>さらに長嘯せんとは。

中原走豺虎 中原 豺虎を走らせ

烈火焚宗廟 烈火 宗廟を焚く。

太白晝經天 太白 昼 天<sup>わた</sup>を<sup>わた</sup>経<sup>わた</sup>り<sup>526</sup>

頽陽掩餘照 頽陽 余照<sup>527</sup>を<sup>おほ</sup>掩<sup>おほ</sup>ふ。 名残りの光さへもなくなった。

王城皆蕩覆 王城みな蕩覆<sup>528</sup>し

世路成奔峭 世路 奔峭となる。<sup>529</sup>

四海望長安 四海 長安を望み

嘖眉寡西笑 眉<sup>ひそ</sup>を<sup>ひそ</sup>嘖<sup>ひそ</sup>めて<sup>ひそ</sup>西笑<sup>すくな</sup>寡<sup>すくな</sup>し。<sup>530</sup>

蒼生疑落葉 蒼生 落葉と疑ひ

白骨空相吊 白骨むなしくあひ弔ふ。

521 晋の孝懷帝の時、二羽の鵝があらはれ国が乱れる前兆となった。

522 晋の太安中の童謡に五馬游渡江云々、その後五王江南にのがれた。

523 国境である揚子江

524 洛陽の門

525 石勒

526 革命の兆、太白は金星

527 夕日

528 ふるひつゝきひつくりかへり

529 さかしく

530 もとは長安を楽ししいところといって西の方をむいて笑ったが

連兵似雪山 兵を連ねて雪山に似たり

破敵誰能料 敵を破ることたれかよく料らん。

我垂北溟翼 われ北溟の翼を垂れ<sup>531</sup>

且學南山豹 しばらく南山の豹を学ぶ。<sup>532</sup>

崔子賢主人 崔子は賢主人

歡媒每相召 歡媒つねにあひ召す。

胡牀紫玉笛 胡牀 紫玉の笛

卻坐青雲叫 かへつて青雲に坐して叫ぶ。

楊花滿州城 楊花 州城に満ち

置酒同臨眺 酒を置いてともに臨眺す。

忽思剡溪去 ただちまち剡溪に去るを思ふ

水石遠清妙 水石 遠く清妙なり。

雪晝天地明 雲昼 天地明らかに

風開湖山貌 風は湖山の貌を開く。

悶為洛生詠 悶えて洛生の詠をなし<sup>533</sup>

醉發吳越調 酔つて吳越の調を発す。

赤霞動金光 赤霞 金光を動かす

日足森海嶠 日足 海嶠に森たり<sup>534</sup>

531 北海の鵬の凶南のつばさ

532 霧雨の中に隠れて毛の紋を作ると

533 洛陽の書生の詠音重濁と

534 海と山

獨散萬古意 ひとり万古の意を散じ

閑垂一溪釣 閑しづかに一溪の釣を垂る。

猿近天上啼 猿は天上に近づいて啼き

人移月邊棹 人は月辺に移って棹さす。

無以墨綬苦 墨ボクジユ綬の苦をもって<sup>535</sup>

來求丹砂要 来りて丹砂の要を求むるなかれ。<sup>536</sup>

華發長折腰 華髪 長く腰を折らば<sup>537</sup>

將貽陶公誚 まさに陶公の誚せしりを貽のこさんとす。<sup>538</sup>

この詩は「王城皆蕩覆」といってあるから、長安陥落後のものと思はれるが、賊軍の猖獗は江南にも大恐慌を捲き起したのであらう。この詩の前半は賊手に陥った人民の苦痛をいひ、官軍のなすすべを知らぬことをいってをり、後半では剡溪の様子を敘して、陶淵明の如く辞職せよといつて崔太守をもここへ誘ふ心配が見える。また「古風」の第十九の、

西上蓮花山 西 蓮花山に上れば<sup>539</sup>

迢迢見明星 迢チヨウチヨウ迢として明星を見る。<sup>540</sup><sup>541</sup>

素手把芙蓉 素手 芙蓉を把とり<sup>542</sup>

虚歩躡太清 虚歩543して太清544を躡ふむ。

535 県令のしるし

536 丹砂から不老長生の薬を作る要訣

537 白髪

538 陶淵明

539 華山

540 はるかに

541 明星天女

542 蓮花

543 空をふんで

544 大空

霓裳曳廣帶 霓裳ゲインヨウ 広帯を曳き

飄拂昇天行 飄払 天に昇りて行く。 546

邀我登雲臺 われを邀むかへて雲台ウネに登り

高揖衛叔卿 高く揖ユす衛叔卿。 548

恍恍與之去 恍恍としてこれとともに去り 549

駕鴻凌紫冥 鴻ノに駕りて紫冥シを凌ぐ。

俯視洛陽川 俯して洛陽川を視れば 551

茫茫走胡兵 茫茫として胡兵を走らす。 552

流血塗野草 流血 野草ノに塗れ

豺狼盡冠纓 豺狼 ことごとく冠纓カンエイ。 553

といふ詩はこれに先だち、長安陥落前の、安祿山が洛陽で帝を称し、百官を任命した直後の作であらう。いづれも悲痛の気には満ちてゐるが、官職もなければ、実力もなく、地方官の寄食者たる詩人に対しては、これらの詩に慷慨の気が薄いといって責めてやるのは苛酷なことのやうに思ふ。李白がこの時、実際に剡溪まで行ったかどうかは不明である。たとへ赴いたとしても、そこに留まってゐた期間は極く短かかったに違ひない。ともかく宣城から剡溪に赴くには杭州、紹興を過る。紹興は古への越の都である。有名な「越中覽古」の詩に溢れた亡国を嘆く趣は、製作をこの時とすれば一層深まる。

545 にじの衣裳

546 風の吹くさま

547 華山の東北の峰

548 神仙の名

549 うっとりして

550 青空

551 洛陽地方

552 広々としてく。

553 冠とそのひも、豺狼の如き奴原がみな官吏の服をつけてゐる。

越王句踐破吳歸 越主勾踐 吳を破って帰る

義士還家盡錦衣 義士 家に還ってことごとく錦衣す。

宮女如花滿春殿 宮女 花のごとく春殿に満ちしが

只今惟有鷓鴣飛 ただ今ただ鷓鴣の飛ぶあるのみ。

剡溪より李白は再び金陵に赴いた。「越中覽古」の姉妹作なる「蘇台覽古」は必ず同時の作である。

舊苑荒臺楊柳新 旧苑荒台 楊柳あらたなり

菱歌清唱不勝春 菱歌の清唱に春に勝へず。

只今惟有西江月 ただ今ただあり西江の月

曾照吳王宮裏人 かつて照す吳王宮裏の人。

何れも絶唱であるが、前者では前三句で昔を云ひ、後者では前三句で現状をいひ、いずれも緒句で反対の意味をいって、巧みな結束をなしてゐる点に興味がある。金陵でも李白は永く留まらず、その地の諸官に別れを告げて江を遡った。行先は廬山である。「金陵ノ諸公ニ留別ス」、「金陵白下亭ニテ留別ス」、「金陵ノ酒肆ニテ留別ス」の三首はこの時の作かとも思はれるが、或ひは李白が前に金陵を去つて宣城に赴いた時が、廬山へ行くつもりであつたかとも思はれるので、確かにはしがたい。廬山は周知の如く江西省の九江の南に聳える名山で、北は揚子江に臨み、南は鄱陽湖に影を映し、奇峰多く、天下の絶景をなしてゐる。太白がここに來つたのは必ずしもこれが最初ではないやうである。それゆゑ有名な、

望廬山瀑布其二 廬山の瀑布を望むその二

日照香爐生紫煙 日は香爐を照して紫煙を生じ

遙看瀑布挂前川 はるかに見る瀑布の前川を挂くるを。

飛流直下三千尺 飛流 直下三千尺

疑是銀河落九天 疑ふらくはこれ銀河の九天より落つるかど。

の絶句や「廬山ノ五老峰ヲ望ム」、「廬山ノ東林寺ノ夜懷」等の詩はこの時の作と断ずることは出来ない。但し李白に「内ガ廬山ノ女道士ノ李騰空ヲ尋アルヲ送ル」(二首)といふ詩があつて、彼の妻が廬山に住んでゐる李騰空といふ女道士を尋ねるのを送る詩であるが、この李騰空といふのは、かの宰相李林甫の女で、廬山の屏風疊の北に住んでゐたのである。これを訪ねた妻といふのは、李白の四人の妻の中いづれかといふと、この詩の中に「多トス君ガ相門ノ女ニシテ」といつて、宰相の女であることをいつてゐるから、許氏(圜師の孫女)か宗氏(楚客の女)のどちらかに違ひないが、久保博士(「続国訳漢文大成李太白詩集下」二〇二頁)は許氏と解してゐられる。私見ではこの訪問はただの訪問ではなく道門に入らんがためであり、従つてはじめの妻である許氏と見るよりも、宗氏のことであるとしたい。宗氏は前述の如く安祿山の前後には開封にゐる李白に便りをしてゐるのであるが、後には南昌のあたりにゐたやつであるから(後述)、この時、廬山へ来たとしても不思議でなく、その入山も安祿山の乱からの避難として額かれるのである。

李白自身も妻をここに送つた後に同じく李騰空を頼つて避難して来たのである。それは「王判官ニ贈ル。時ニ余帰隠シテ廬山屏風疊ニ居ル」といふ詩によつて知られる。屏風疊は廬山の五老峰の下にあり、前述の如く李騰空の居住したところだからである。この詩も、李白の心中を窺ひ得て面白い。

昔別黄鶴樓　むかし黄鶴樓555に別れ

蹉跎淮海秋　蹉跎556たり淮海557の秋。

俱飄零落葉　ともに零落の葉を飄ひるがへし

各散洞庭流　おのおの洞庭の流に散ず。

中年不相見　中年あひ見まみえず

踏踏遊吳越　踏踏ソウトツ遊吳越558に遊ぶ。

何處我思君　何の処かわれ君を思ふ

天臺・蘿月　天台　綠蘿リョラの月。559

555 武昌にあり

556 志を得ぬ様

557 唐の揚州の古称

558 道に疲れた様

559 天台山

會稽風月好 會稽 風月好し

卻繞剡溪迴 かへつて剡溪を繞つて廻る。

雲山海上出 雲山 海上に出で

人物鏡中来 人物 鏡中に来る。 560

一度浙江北 一たび浙江を度りて北し 561

十年醉楚臺 十年 楚台に酔ふ。 562

荊門倒屈宋 荊門に屈宋を倒し 563

梁苑傾鄒枚 梁苑には鄒枚を傾く。 564

苦笑我夸誕 苦笑すわが誇誕 565

知音安在哉 知音いづくにありや。 566

大盜割鴻溝 大盜 鴻溝を割く 567

如風掃秋葉 風の秋葉を掃ふがごとし。

吾非濟代人 われは代を濟ふの人にはあらず

且隱屏風疊 しばらく屏風疊に隠る。

560 人のすがたは鏡のやうな湖水にうつて来る。

561 錢塘江

562 昔の楚の地の諸台

563 荊州

564 荊州生れの屈原・宋玉などの詩人

565 梁の孝王の食客だった鄒陽、枚乘

566 大言や虚言

567 知己

568 安祿山

569 項羽と劉邦とが鴻溝を界として天下を二分したごとく、地を分けた。

中夜天中望 中夜 天中を望み

憶君思見君 君を憶うて君を見んことを思ふ。

明朝拂衣去 明朝 衣を払って去り

永與海鷗群 永く海鷗と群せん。

この詩の中の「吾八代ヲ濟フノ人ニ非ズ」といふ句に、李白が自身の無力を嘆く気持と、しかもこのままではゐたくないといふ気持とが見られる。一度機会にして来らんか、彼とても己れの一身の安泰のみをこひねがひ、山中にゐて世人の苦難を無視してゐる境地に甘んずる者でないことが、この詩によって知られるのである。

果して李白が廬山にゐる中にその機会は到来した。かくて彼の波瀾多き生涯は一層多彩となつたのであるが、同時に彼はこのため汚名を蒙つて遂に流罪の憂目にも遭ふのである。

# 十一 水軍

## 十一 水軍

はじめ玄宗が長安より四川へ蒙塵するや、途中、皇太子をして後に残らしめた。皇太子は途を別にして靈武方面に赴き、ここで群臣の推戴を受けて皇帝の位に即ぎ、玄宗を上皇と崇めることとした。これが肅宗であるが、この拳が玄宗との諒解なくして行はれたことは、後に父子の間柄に一抹の陰翳を投げかける結果となった。時に天宝十五載七月十二日であった。

一方玄宗はかくと知る由もなく、この月十五日、普安郡(剣閣県)で皇太子を天下兵馬元帥に充てると同時に、他の三人の皇子はそれぞれ地方を分つて、その地方の兵馬を統帥して賊軍を伐たしめんと計った。その一人に選ばれたのが、肅宗の弟なる永王璘である。彼はこの時、江陵府都督・統山南東路黔中江南西路等節度大使に充てられ、少府監の實昭なる者を副へられた。永王は郭順儀の出であるが、早く母を失ひ、肅宗に養はれたもので、長じて聡敏にして学を好んだが、容貌極めて揚らず、正視する能はなかつたといはれる。王はこの命に應じ、江陵(荊州)に至り、士を募つて数万を得、その中より郎官、御史等を任命した。しかるに王は揚子江流域の、黄河流域とは比較にならず豊かで、租税が至る所に山積してゐるのを見て、つひに異心を起して・薛鏐・李台卿・韋子春・劉巨鱗・蔡駟等を謀主としたといふ(「唐書」卷82)。但しこの永王の異心なるもの存在は実は不明である。そのことについては後述する。

ともかく李白は永王の野心には関係なく、この頃に、安祿山討伐のための永王を將とする軍中に招きに應じて加はつたのである。彼の仕事は幕僚の一人として、討伐の檄文を書いたり、軍中の無聊を慰め、將士の士気を鼓舞するため詩を作るに於つた。檄文の方は伝はつてゐないが、「永王東巡ノ歌」十一首は後の目的のために作られたものに相違ない。その第一首に曰く、

永王正月東出師 永王 正月 東に師を出だす

天子遙分龍虎旗 天子はるかに分つ龍虎の旗。

570

樓船一擧風波靜 樓船一擧 風波靜かに<sup>571</sup>

江漢翻為雁鷺池 江漢<sup>72</sup>がへつて雁鷺<sup>カシボネ</sup>の池となる。

この詩では堂々たる王師の様が写し出されてみて、永王の叛志などは決して見られない。

かくて李白の乗船をも含めた数千の樓船は揚子江を威風堂々と東下した。航行中、船上では盛大な酒宴が催され、将士の意気は天に沖した。この有様は李白の「水軍ノ宴ニ在リテ幕府ノ諸侍御ニ贈ル」及び「水軍ニ在リテ韋司馬ノ樓船ニ宴シ妓ヲ觀ル」などの詩に明らかである。韋司馬とは永王の幕僚中の韋子春であらう。

しかるに李白にとって不幸なことには、この堂々たる大軍は下江の時、概に叛軍の烙印を押されてゐたのである。即ち永王の東下を知つた肅宗は行在より使を發して、王に四川へ帰還すべしと命じた。永王はこの勅命を奉ぜずして下江の途に就いたのであつたが、このことは早くも明らかにせられてゐたと見え、王の先鋒軍が至るに先だち、吳郡の探訪使李希言は部將を遣してこれを丹陽に迎へ伐たしめたので、永王は止むなくこれを伐つて降した。

この事によつて永王の叛逆のことは決定したのであるが、これを仔細に考へると、永王の異心の有無は問題で、当時の玄宗と肅宗間の感情の纏れもここに介在し、単なる兄弟の嫉視と見るべきであり、むしろ肅宗の方が挑発者であつたのではないかと思はれる節が多い。しかし万乗の至尊に抗するものが、天地の容れぬ叛逆者であることはいふまでもない。ただこの二人が兄弟であつたことは、詩人李白をして甚しく悲しませた。彼の詩「上留田行」、「筵篔（コウコウ）謡」には兄弟の不和を諷するの意があり、これが肅宗と永王との間柄を歌つたものだとする説も敢へて無視し去れない。

#### 上留田行

行至上留田 行いて上留田に至れば

孤墳何崢嶸・ 孤墳<sup>574</sup>なんぞ崢嶸<sup>ソウコウ</sup>・たる。

積此萬古恨 この万古の恨を積んで

春草不復生 春草また生ぜず。

悲風四邊來 悲風 四辺より来り

戦艦

揚子江と漢江と

かりとあひる

高くそびえてゐる様

腸斷白楊聲 腸は断つ白楊の聲。 575

借問誰家地 借問す誰が家の地ぞ

埋没蒿里塋 埋没す蒿里の塋。 577

古老向余言 古老われに向つて言ふ

言是上留田 これはこれ上留田と。

蓬科馬鬣今已平 蓬科<sup>ホウカ</sup>馬鬣<sup>バキョウ</sup> いますでに平かなり

昔之弟死兄不葬 むかし弟死して兄葬らず

他人于此舉銘旌 他人ここにおいて銘旌を挙ぐ。 580

一鳥死 百鳥鳴 一鳥死して 百鳥鳴き

一獸走 百獸驚 一獸走つて 百獸驚く。

桓山之禽別離苦 桓山<sup>カンザン</sup>の禽 別離苦なり。 581

欲去回翔不能征 去らんと欲して回り翔び征くあたはず。

田氏倉卒骨肉分 田氏 倉卒 骨肉分れ。 582

青天白日摧紫荊 青天白日に紫荊を摧く。 583

交柯之木本同形 交柯の木はもと形を同じくするに。 584

東枝顛頼西枝榮 東枝は顛頼<sup>ショウライ</sup>して西枝は栄ゆ。 585

墓地に多く植ゑられるハコヤナギ  
死人の里

墓の上の草

墓のもり土

葬儀を行ふ。銘旌は葬旗。

完山の鳥は四子を生み、その四海に離れるときには哀鳴して送ると。

にはかに

「統齊譜記」に見えた田真兄弟の分産説話。

毎年東西の枝が代るがはる栄枯する木

やせ衰へる。

無心之物尚如此 無心の物すらなほかくのごとし

參商胡乃尋天兵 參商なんぞすなはち天兵を尋ぬる。

587

孤竹延陵 孤竹<sup>588</sup> 延陵<sup>89</sup>は

讓國揚名 國を讓つて名を揚ぐ。

高風緬邈 高風 緬邈<sup>590</sup>として

頽波激清 頽波 激清<sup>591</sup>

尺布之謠 尺布の謠<sup>592</sup>也

塞耳不能聽 耳を塞いで聴くあたはず。

原因が何であらうとも、永王の軍は丹陽の戦の後は全く叛軍となつてしまつた。翌至徳二年二月、永王の軍は広陵(揚州)に迫つた。しかしここでは官軍が既に守つてゐて、その旗幟のひるがへるのを見ると、永王以下はじめておそれる色があり、部将の中で李広琛(チン)といふものが先に立つて王に叛かうとの仲間を集め、兵を率ゐて逃亡した。

この夜、江北の官軍は晝を束ねて燃した。その影が水上に映ると、篝火の数は倍に見えた。哨者がこれを王に報ずると、王は子女をつれて逃げたが、翌日、真相がわかるとまた還つて来て、官軍と新豊で戦つた。しかしこの戦でも敗れたので、王は鄱陽に逃れ、ついで華南に逃れようとしたが、官軍の追跡にあつて殺された。

かやうに永王の謀叛は実に呆気<sup>あき</sup>なかつたが、李白がこの王に随つて朝敵安祿山を破る際に功を立て、国恩に報じようとの希望も、同じく呆気なく破れ去つたのであつた。前述の如く、李白は丹陽の戦のあと、永王の形勢が非なるを見てはじめて逃亡した。けだし彼が永王の軍に加はつたのは、王の幕僚中の李台卿との関係によるらしいことは、彼に「舍人弟台卿ノ江南ニ之クニ贈別又」の詩があることで知られるが、この時ともに逃れたのであらう。この詩はその後、李白が夜郎に流され、台卿も江南に謫される時、洞庭方面で会つての作である。

この間の事情は、丹陽から逃れる途中、李白の作つた「南奔懷ヲ書ス」といふ詩に見えてゐる。

586 參はオリオン座、商は心宿に同じく蝸座のアルファ、シグマ、タウ、この天の一部は同時には空に見えない。

587 不和で天の軍兵をもつて交戦する。

588 孤竹君の子伯夷叔齊

589 呉王の子季札、兄の譲りを受けず、延陵の季子と称せられた。

590 はるかに遠し

591 意味不明

592 漢の文帝と淮南王との不和をそしつた民謡

遙夜何漫漫 遙夜<sup>593</sup>なんぞ漫漫たる<sup>594</sup>

空歌白石爛 むなしく歌ふ白石の爛<sup>595</sup>たるを。

・戚未匡齊 ・戚<sup>ネイセキ</sup>いまだ齊<sup>たいた</sup>を匡<sup>た</sup>さず

陳平終佐漢 陳平<sup>596</sup>つひに漢<sup>た</sup>を佐<sup>す</sup>く。

攬槍掃河洛 攬<sup>ザン</sup>槍<sup>597</sup> 河洛<sup>598</sup>を掃<sup>は</sup>ひ

直割鴻溝半 ただち<sup>599</sup>に割<sup>ま</sup>く鴻溝<sup>600</sup>の半。

曆數方未遷 曆數<sup>601</sup>まさにいまだ遷<sup>うつ</sup>らざれど

雲雷屢多難 雲雷<sup>602</sup>にしばしば多難<sup>603</sup>たり。

天人乘旄鉞 天人<sup>604</sup> 旄<sup>ボウ</sup>鉞<sup>599</sup>を乗<sup>の</sup>り

虎竹光藩翰 虎竹<sup>605</sup> 藩翰<sup>606</sup>に光<sup>あ</sup>る。

侍筆黃金臺 筆<sup>607</sup>に侍<sup>ま</sup>す黄金<sup>608</sup>台

傳觴青玉案 觴<sup>609</sup>を伝<sup>つ</sup>ふ青玉<sup>610</sup>案。

永き夜

夜の長き様

・戚が齊の桓公の前で歌った。

漢の高祖の功臣、はじめ項羽の臣だった。

彗星、安祿山にたとふ。

黄河と洛水

中国の半ばを占領した。

帝王のかはる運

皇子である永王

天子の将のもつはたほことまさかりをもって

銅虎符や竹使符などいくさのわりふ(二)皇室の藩屏としての永王

机、食卓

不因秋風起 秋風の起るによらずして<sup>605</sup>

自有思歸嘆 おのづから思歸の嘆あり。

主將動讒疑 主將ややもすれば讒疑し<sup>ザンギ</sup>

王師忽離叛 王師たちまちに離叛す。

自來白沙上 白沙のほとりに来りしより<sup>606</sup>

鼓噪丹陽岸 鼓噪す丹陽の岸。<sup>607</sup>

賓御如浮云 賓御は浮雲のごとく<sup>608</sup>

從風各消散 風に從ひておのおの消散す。

舟中指可掬 舟中に指 掬すべく

城上骸爭鬪 城上には骸 争つて鬪<sup>かし</sup>ぐ。

草草出近關 草草 近關を出で<sup>609</sup>

行行昧前算 行行 前算に昧<sup>くら</sup>し。<sup>610</sup>

南奔劇星火 南奔 星火よりも劇<sup>はや</sup>く

北寇無涯畔 北寇 涯畔<sup>かぎり</sup>なし。

顧乏七寶鞭 顧みるに乏し七宝の鞭の<sup>611</sup>

留連道傍玩 留連して道傍に<sup>もてあそ</sup>び<sup>び</sup>し。

605 晋の張翰、秋風の起るを見て辞職した。

606 白沙洲、儀真県にあり

607 戦鼓がさわがしく鳴りひびいた。

608 食客や馬丁など

609 いそがしく、あはてて

610 行先のあてどもない。

611 晋の明帝が道はたにのこしていった七宝の鞭も自分はずもたず。

太白夜食昴 太白 夜 昴すばらを食し

長虹日中貫 長虹 日中に貫つらぬく。

秦趙興天兵 秦・趙 天兵を興し

茫茫九州亂 茫茫として九州乱る。<sup>612</sup>

感遇明主恩 明主の恩に遇ふに感じ

頗高祖邀言 すこぶる祖邀ソテキの言を高しとす。<sup>613</sup>

過江誓流水 江を過わたりて流水に誓ひ

志在清中原 志は中原を清むるにあり。

拔劍擊前柱 劍を抜いて前柱を撃つ

悲歌難重論 悲歌して重ねて論じ難し。

この詩によつて、丹陽より諸幕僚がみな逃れ、その敗戦の状甚しかった様が知られ、勤王のために従軍した李白の途方にくれた様も知られる。かくて李白は尋陽(九江)まで来ると遂に捕はれて獄に繋がれた。その獄中の作としては「尋陽ノ非所ニ在リテ内ニ寄ス」がある。先に廬山に避難してゐた妻へ送る詩であることは勿論である。

聞難知慟哭 難を聞いて慟哭を知る

行啼入府中 ゆくゆく啼いて府中614に入りしならん。

多君同蔡琰 多615とす君が蔡琰サイエンと同616じく

流淚請曹公 涙を流して曹公に請ひしを。<sup>617</sup>

612 中原全土

613 晋の將軍。「中原ヲ清ムル能ハズンバ、マタ大江ヲワタランヤ」といふ。

614 役所

615 立派なことである。

616 後漢の董祀の妻

617 曹操

知登呉章嶺 知る呉章嶺に登り<sup>618</sup>

昔與死無分 むかし死と分なきを。<sup>619</sup>

崎嶇行石道 崎嶇として石道を行き<sup>620</sup>

外折入青雲 外折して青雲に入る。

相見若愁嘆 あひ見てもし愁歎せば

哀聲那可聞 哀声なんぞ聞くべけん。

非所は牢獄のことである。李白の妻が蔡琰と同じく、死罪を犯した夫のため、哀泣して上官たちのところへ運動してまはった様子が知られる。李白の獄中の作としては、また「張秀才ノ高中丞ニ調スルヲ送ル」といふ詩があり、その序で「自分はその時、尋陽の獄に繋がれて留侯伝（「史記」の張良の伝）を読んでゐた。張孟熊といふ秀才が安祿山を亡ぼす策を立てて、広陵に行つて高中丞に謁しようとした。自分はこの人を張良の風があると思ひ、この詩を作つて送るのだ」といつてゐる。李白が獄中でも元氣を失つてゐない様子が知られる。ところでこの秀才が謁しようとする高中丞とは詩人の高適である。李白と高適とは前述の如く相識であるが、高適の方はこのとき永王討伐のため、御史大夫・揚州大都督府長史・淮南節度使といふ大官として、安州（湖北省安陸）まで来ると、乱の平いだのを聞いたが、そのまま任地の広陵（揚州）に到つてゐたのである。得意の友と失望の自己とをくらべて、李白の感慨は深かつたことであらう。

なほこの外にも「獄中ニ于崔相渙ニ上ル」、「尋陽ニ繫ガレテ崔相渙ニ上ル（三首）」、「崔相ニ上ルノ百憂草」と五首の詩があり、いづれも時の宰相崔渙<sup>サイクワン</sup>にたてまつつて、自己の冤<sup>モシ</sup>をいひ救助を求めるとある。

崔渙は少年より德行を以て聞え、経籍を博く読み、談論を善くしたが、天宝の末に楊国忠に憎まれて劍州（四川省）の刺史に任ぜられた。李白とはその前に長安での知合ではないかと思はれる。玄宗が四川に逃れて来ると、これを途中に迎へ、忠義の言があつたとて宰相に任ぜられたが、至徳元年十一月、江南の士を任用するため江淮宣諭補使に任ぜられ、この頃は九江の辺りにゐたのであらう。李白が旧交に頼つて、叛軍についたのは知らないでしただと弁解して、雪冤を依頼したのはむりからぬことだが、この時も一人有力な同情者が現はれた。即ち御史中丞の宋若思である。彼はこの時、江蘇方面の兵三千を率ゐて河南に赴くとて、尋陽にしばらく駐屯してゐたが、李白のことを聞くと、これを獄より出し、一方朝廷に李白の冤罪であることを奏上して、軍中の参謀とした。宋若思と李白との従来関係は不明だが、李白の詩人

としての名声を惜んだか、その人となり傾倒してこれを救ったのか、いづれにしても李白が至るところで人の敬愛を受ける、きはめて得な性質であったことは、このことによっても知られる。

李白が宋若思の幕僚としての詩文は、「中丞宋公兵兵三千ヲ以テ河南軍ニ赴キ尋陽ニ次シ余之囚ヲ脱セシメ幕府ニ參謀タラシム因テ之ニ贈ル」、「宋中丞ニ陪シ武昌ニテ夜飲ミ古ヲ懷フ」との二篇の詩と、「宋中丞ノ為ニス金陵ニ都スルヲ請フノ表」、「宋中丞ノ為ニス自薦表」、「宋中丞ノ為ニス九江ヲ祭ルノ文」等の文がある。詩はあげるほどのものではないが、金陵(南京)に都を遷さうと宋若思が乞うた事実は、他の史料には見えず、あるひはこの地にたびたび遊んだ李白の献言かとも思はれて興味がある。「自薦表」は宋若思が李白の、冤を解いたのち、さらにその任用を奏請する上表文なのであるが、これを李白自身に作らしめたので、その内には、

「臣伏シテ見ルニ、前ノ翰林供奉ノ李白ハ、年五十有七ナリ。天宝ノ初、五府コモゴモ辟セドモ聞達ヲ求メズ。マタ子真谷口ニヨリ、名、京師ヲ動カセリ。上皇聞シテコレヲ悦ビ召シテ禁掖ニ入ル。既ニシテ鴻業ヲ潤色シ、アルヒ八間々王言ヲ草ス。雍容掄揚、特ニ褒賞セラレシガ、賤臣ノ詐詭ノタメニ、ツヒニ山ニ放チ歸サレ、閑居シテ製作シ、言、数万ニ盈ツ。属逆胡ノ暴乱スルヤ、地ヲ廬山ニ避ケ、永王ノ東巡ニ遇ヒ、脅カサレテ行キシガ、中道ニシテ奔走シ、却イテ彭沢ニ至リ、ツブサニスデニ陳首セリ。前  
後ニ宣慰大使崔渙及ビ臣ノ推覆清雪ヲ經、ツイテ奏聞ヲ經タリ……」

といひ、李白のこの頃の事情を知るに必要な史料である。

李白はまた至徳二年八月、河南節度探訪等使・都督淮南諸軍事の任に就けられて、この方面に來た宰相張鎰にも詩を贈って依頼するところがあった。いかに李白が自己の失策をとりかへさんがために汲々としてゐたかが知られる。しかし君王に対して忠義の志こそあれ、叛逆の意志のなかつた者が、叛逆罪で処罰されるおそれが生じたのなら、この誤解を解くためにはいかなる手段をも惜しまないのは当然である。殊に張鎰にしろ、崔渙にしろ、いづれも書に通じ、気骨のあつた宰相であるから、李白を権勢に阿付すると責めるのは当たらない。張鎰に贈つた詩は二首、原註には「時に難を逃れ、病んで宿松山に在って作る」とある。宿松は九江の対岸である。これで見ると、この時は既に宋若思の陣中から去つてゐたやうである。

かく李白が険阻な途を辿つてゐる間に、唐の国運は反対に好転してゐた。即ち長安を陥れた安祿山には、もはや四川乃至江南へ兵を派する意志も余力もなく、相変らず洛陽を都として、長安には張通儒や安守忠を派して鎮せしめたのみであつた。はじめ賊軍の長安に入るや、その兵は府庫、兵甲、文物、圖書のみならず、後苑中に飼養されてゐた犀・象・舞馬の類から、後宮の美人たちすべてを手に入れた。かつての日、玄宗・楊貴妃のために清平調を奏した梨園の弟子たちも、賊將のために樂を奏した。諸官の捕へられて降つた者はみな洛陽に赴かせて偽官に任じた。その中に李白を讓した張「士白」のあつたことは既に述べたが、有名な詩人兼画人の王維も偽官を授けられた一人であつた。彼はしかし心中快々として樂まず、ひそかに詩を詠じた。

「万戸傷心野烟ヲ生ジ、百官何ノ日力更ニ朝セン。秋槐葉八落ツ空宮ノ裏、凝碧池頭管絃ヲ奏ス。」

これは梨園の弟子らが賊のために奏樂するのを悲しみ憤った詩である。のちに兩京回復の時、賊に降った百官はみな罰を受けたが、王維がこの一篇のために忠義の志を認められて免れたことは有名な挿話である。

しかし賊の長安を占拠したのは永くなかった。はじめ彼等は入京するや人を多く屠った。皇族及び楊国忠の党派は一人のこさず殺した。杜甫の「哀王孫」はこのために作られたが、かかる惨虐行為は人をしてすべて眉をひそめさせた。次には私人の財産を掠奪し、反抗すれば殺した。故にまもなく長安の郊外には、官軍に付く者が出沒しだしたが、賊軍は勇あつて智なく、日々荒酒を事とするのみであつた。

この間に、靈武にあつた肅宗を中心とする朝廷は、東のかた長安の回復のみを計つてゐた。特に朝廷をして心強からしめたのは、至徳二年の正月に、安祿山がその子安慶緒に殺されたことである。子として父を弑するには、いくら賊軍にしても服しない者があるに相違ない。父子軍と号した安祿山の軍の団結もここに至つてはゆるんだのが知られたわけである。肅宗の朝廷は、この機に乗じて一挙に長安の回復を計るべきだつたが、これは中々はかどらなかつた。この頃になると、官軍の諸將中、恃みになるものは、かの李白と太原で会つたといふ郭子儀と李光弼とだけである。兩將は従来、今の山西省方面で策動して、機を見ては河北省や河南省方面に出動して来る。これが相当の効果をおぼせてゐたが、長安を陥れるとなると、やはり正面作戦が必要である。肅宗は兩將に行入へ来ることを命じた。郭と李が五万の兵を率ゐて來つた時、朝廷では始めて根本が定まつた。ただし郭子儀らの力だけでは、いまだ賊に勝つには足らなかつたので、おそらく彼の献策によつてと思はれるが、このころいま一つの策が考へ出された。即ち回紇への求援である。回紇とはトルコ種のウイグル族であつて、突厥に代つて沙漠の北に勃興し、東は興安嶺、西は天山に至る地域を占めてゐた。その酋長は突厥と同じく可汗と稱し、この頃は葛勒可汗の代であつた。唐ではこの回紇に対し、皇族を遣つて和親と援軍とを求めたところ、承諾を得た。この際に種々条件が付いたことは勿論であるが、かく外氏族の力を借りて、侵入者を伐つことを中国では古来「夷ヲ以テ夷ヲ制ス」といひ、策の上々なるものとしてゐる。果して回紇の援兵四千を加へた郭子儀らの軍が、長安に西方から迫り、香積寺の西北で戦ふや、賊の背後に奇襲を行つた回紇兵の功によつて、賊は大敗して洛陽に逃れ、玄宗、肅宗ともに行在所から還御した。時に至徳二年十月で、長安は失陥後わづか一年余りでまた朝廷のものとなつたのである。しかし還御のとき、長安の土民は泣いて駕を拝し、「凶らざりき、またわが君を見んとは」といつたといふ。実に耐へがたい一年余りだつたのである。

賊に降つてゐた百官もこの月洛陽がとりかへされると、また官軍に降つた。朝廷ではこれらの処分を議して、情状の酌量によつて罪を六等とし、それぞれ処分を終へた。斬刑となつた者は達奚・ら十八人、もとの宰相陳希烈は特旨をもつて自殺を命ぜられ、張説の子の張均、張「王自」の兄弟の中、弟はもう死んでゐたから、兄のみ合浦郡（広東省）に流された。これがすむと、つづいて永王の事件の処分が議せられたやうである。李白は前述の如く、宋若思や崔涣らの尽力によつて、謀叛の罪ももう解けてゐたかと思つてゐたのが、実はさうでなかつた。彼の運命は極めて危いものとなつたのである。

## 十二 夜郎への流謫

### 十二 夜郎への流謫

李白の罪名は謀叛罪の連坐であつて、罰は死刑に当る。李白及びその同情者は、脅かされて従つたのだと主張するが、朝廷ではさう取らない。それもむりはないので、永王が肅宗の命に反して長江を下つたことは李白も知つてゐた筈である。それ以前に逃れてゐればともかく、永王の形勢が悪くなつてから、はじめて逃亡したのである。なほまた永王に召された時、多額の金を得てゐるのも、彼の嫌疑を深めた。これらのことを李白自身の弁明に聞かうとするならば前に一部を引いた江夏(武昌)の太守韋良宰に贈つた詩のつづきを見ればいい。

.....

炎涼幾度改 炎涼幾度か改まり<sup>621</sup>

九土中・潰 九土<sup>622</sup> 中より横潰す。

漢甲連胡兵 漢甲<sup>623</sup>胡兵に連り

沙塵暗雲海 沙塵 雲海暗し。

草木搖殺氣 草木 殺氣を揺がし

星辰無光彩 星辰 光彩なし。

白骨成丘山 白骨 丘山を成す

蒼生竟何罪 蒼生 つひに何の罪ぞ。

621 幾年かたつて

622 九州に同じ、中国の本土。

623 官軍

函關壯帝居 函關 帝居壯に<sup>624</sup>

國命懸哥舒 國命 哥舒に懸る<sup>624</sup>

長戟三十萬 長戟<sup>チヨウゲキ</sup>二十萬

開門納凶渠 門を開いて凶渠<sup>キョウキョ</sup>を納る<sup>625</sup>

公卿奴犬羊 公卿 犬羊のごとく

忠讜醜與蒞 忠讜<sup>チュウタン</sup>も醜<sup>カイ</sup>と蒞<sup>ソ</sup>となる<sup>626</sup>

二聖出遊豫 二聖出でて遊予し<sup>628</sup>

兩京遂丘墟 兩京つひに丘墟

帝子許專征 帝子 專征を許され

乘旄控強楚 旄<sup>ボウ</sup>を乗<sup>と</sup>つて強楚<sup>ヒカ</sup>を控ふ<sup>630</sup>

節制非桓文 節制<sup>セツセイ</sup>桓文<sup>カンブン</sup>にあらず<sup>632</sup>

軍師擁熊虎 軍師 熊虎を擁す

人心失去就 人心 去就を失ひ

賊勢騰風雨 賊勢 風雨を騰<sup>あ</sup>ぐ

624 長安の守りをなす函谷關

625 わるもののかしら

626 正しい議論をする者

627 しほからと塩漬の肉

628 玄宗と肅宗

629 行幸に同じ

630 昔の楚に当る江南の地方を治める。

631 とりしまり方

632 齊の桓公、晋の文公は節制を以て称せられた。

惟君故房陵 ただ君 房陵を固め<sup>633</sup>

誠節冠終古 誠節 終古に冠たり。<sup>634</sup>

僕臥香爐頂 僕は香爐の頂に臥し<sup>635</sup>

餐霞漱瑤泉 霞を餐<sup>くら</sup>ひ瑤泉<sup>ヨウセン</sup>に漱<sup>くわそ</sup>ぐ。<sup>636</sup>

門開九江轉 門開けば九江轉じ

枕下五湖連 枕下に五湖連る。

半夜水軍來 半夜 水軍來り

尋陽滿旌旗 尋陽 旌旗<sup>セイセン</sup>に滿つ。

空名適自誤 空名たまたまおのづから誤られ

迫脅上樓船 迫脅せられて樓船に上る。

徒賜五百金 いたづらに五百金を賜りしが

棄之若浮煙 これを棄つること浮煙のごとし。

辭官不受賞 官を辭し賞を受けざりしに

翻謫夜郎天 かへつて夜郎の天<sup>そら</sup>に謫<sup>タツ</sup>せらる。

しかしこの詩にはたぶん嘘があるだらう。いかにも五百金は李白にとっては浮煙のごとくだったらうが、永王の軍には脅迫されて入ったのではなく、王師と思って参加したにちがひない。「永王東巡歌」十一首の堂々たる調は脅迫では出て来ない筈である。

李白の運命は絶体絶命であったが、この時すくひ手が意外な方向から現はれた。即ち李白がかつて太原で主将に就いて罰から免れさせた一小校郭子儀が、今は西京回復の第一の功臣として、中書令・関内河東副元帥となつてをり、自分の官をもつて李白の罪を贖<sup>あがな</sup>はつと申し出た

633 いま湖北省房県

634 古より永久に

635 廬山の峰

636 玉のごとく美しい泉

のである（「唐書」）。これは乾元元年七月の彼の入朝の時のこととも考へられるが、はつきりとはわからない。ともかくそのおかげで、李白は罪一等を減ぜられて、夜郎に流罪のこととまいった。

李白のこの間の煩悶は察するにあまりある。彼は自己の行為に対し、後悔や良心の苛責は感じなかったにちがひないが、愛国的行為が罪と認められたこと、しかもそれが彼の反対派や相変らず朝廷にはびこつてゐる俗人どもの、三百代言的法律を以て定められつつあったことに対しては、満腔の不平を禁じ得なかつた。この感情は九江の獄中ですでに郎中魏某に投じた「万憤詞」によくあらはれてゐる。

海水渤滴 海水渤滴として様<sup>637</sup>

人罹鯨鯢 人は鯨鯢に罹る。<sup>638</sup>

翁胡沙而四塞 胡沙を翁めて四塞し

始滔天於燕齊 始めて天に燕齊に滔る。<sup>639</sup>

何六龍之浩蕩<sup>640</sup> なんぞ六龍の浩蕩として

遷白日於秦西 白日を秦西に遷せる。<sup>643</sup>

九土星分 九土 星分し<sup>644</sup>

嗷嗷悽悽 嗷嗷悽悽たり。<sup>645</sup>

南冠君子 南冠の君子<sup>646</sup>

呼天而啼 天を呼びて啼く。

637 水の沸き上る

638 くぢら、貪汚の小人。ここでは安祿山にたとふ。

639 天までひびこるほどの勢で河北山東方面にひろがった。

640 日をのせた車をひくもの

641 志のほしいままの様

642 天子

643 蜀

644 バラバラになり

645 さがしくいそがしげ

646 囚へられた詩人李白みづからをいふ。

戀高堂而掩泣 高堂を恋ひて泣なみだを掩おほひ<sup>647</sup>

類血地而成泥 地に血となつて泥となる。

獄戸春而不草 獄戸 春にして草もえず

獨幽怨而沉迷 ひとり幽怨して沈迷す。

兄九江兮弟三峽 兄は九江に弟は三峽に

悲羽化之難齊 羽化ひとの齊ひとしうし難きを悲しむ。

穆陵關北愁愛子 穆陵ボク關北には愛子を愁へ<sup>648</sup>

豫章天南隔老妻 予章天南には老妻を隔つ。<sup>649</sup>

一門骨肉散百草 一門の骨肉 百草に散じ

遇難不復相提攜 難に遇ふもまたあひ提携せず。<sup>650</sup>

樹榛拔桂 榛シを樹シ系シて桂シを抜き<sup>651</sup>

囚鸞籠雞 鸞ランを囚シへて雞シを籠シす。

舜昔授禹 舜シユンはむかし禹ウに授け

伯成耕犁 伯成 耕犁コウリす。<sup>652</sup>

・自此衰 徳これより衰ふ

吾將安棲 われまさあはにいつくにか棲あはまんとする

好我者恤我 われを好しとする者はわれを恤あはれみ

647 朝廷

648 山東省にあつた関

649 南昌

650 たすけあふ。

651 榛は雑木、桂は香木。

652 舜の諸侯

不好我者何忍臨危而相擠 われを好しとせざる者もなんぞ危きに臨んであひ擠すに忍びんや。

子胥鳴夷 子胥は鳴夷となり<sup>653</sup>

彭越醢醢 彭越は醢醢となる。<sup>654</sup>

自古豪烈 古より豪烈

胡為此繫 なんぞかくなる ああ

蒼蒼之天 蒼蒼の天は

高平視低 高きより低きを覗る。

如其聽卑 もしその聽卑ければ

脱我牢狴 われを牢狴より脱せしめよ。<sup>655</sup>

儻辨美玉 もし美玉を弁ずれば

君收白珪 君 白珪を牧めよ。<sup>656</sup>

春になつても草も萌えない獄中で、彼はみづからを伍子胥や彭越など、功あつて罪なくして殺された豪傑にたとへて、万腔の不平をもらしてゐる。しかも念頭から去らないのは山東にある二人の子と、廬山にあつた妻とのことであつた。

ついでであるが、この詩中の「兄九江兮弟三峽」といふ句の意味がわからない。九江の獄に繋がれてゐた李白が兄とすれば、このとき三峽にゐた弟とは誰のことであらう。李白の詩文では、父のこともあまり見えないし、母のことは一ヶ所も見えない。兄弟のことも聞かないのである。ただし李白は半ばはこの頃の風習に随つて、半ばは多分みづからが唐の皇室と同じく隴西の李氏の出であることを強調するために、詩文のいたるところで、兄弟叔姪を以て呼んでゐるものが多い。しかし従兄、従弟と呼ぶも絶対いところではないし、本当の肉身はこれらの中に一人もゐないのである。ただこの弟だけはさうでないやうであるが、この三峽にゐたといふ弟の名と履歴とは一向に不明である。

さて牢からは出され、死刑もゆるされたが、流罪の地となつた夜郎とはいかなる地であらうか。唐代の夜郎県は今の貴州省の桐梓県の東にあつたといふ。貴州省でも北境で四川省に接した地である。ただに辺僻な地であつたばかりでなく、実に唐のこの頃の最南境で、南詔国と

<sup>653</sup> 呉王の功臣伍子胥は讒言で殺されたがその屍骸を盛つた馬の革の大きな袋。

<sup>654</sup> 漢の高祖の功臣彭越は疑はれて殺されその肉は干肉とされて諸侯に分けられた。

<sup>655</sup> 牢獄

<sup>656</sup> 珪は瑞玉、李白みづからをたとへる。

の対陣の地である。南詔とはタイ族の建てた国で、はじめは唐に朝貢したが、天宝七載からは唐に叛いて吐蕃チベットと同盟した。そこで唐は鮮于仲通と李宓リッパとを將として、二回に亘ってこの方面に遠征軍を出したが、二度とも失敗に終わった。唐人がこの遠征をいやがった有様は、後の作であるが白楽天の「新豊折臂ノ翁」といふ詩によくあらはれてゐる。李白みづからもこの方面に対しては、世人と同じ感情をいだいてゐたことは、かつて詩人の王昌齡が龍標湖南省黔陽の尉に貶された時に贈った詩によつて明らかである。曰く、

聞王昌齡左遷龍標遙有此寄 王昌齡が龍標に左遷されると聞き遙にこの寄あり

楊花落盡子規啼 楊花落ち尽して子規啼ほとと啼すく

聞道龍標過五溪 聞くならく龍標は五溪を過ぐと。 657

我寄愁心與明月 われ愁心を寄せて明月に与ふれば

隨風直到夜郎西 風に随つてただちに到らん夜郎の西。

龍標が夜郎の西にあると考へたのは思ひちがひであるが、夜郎に近い地と想像しただけで、他人事でも傷心したのが、今はわが身の上のこととなつたのである。従つて李白の道中ははかどらず、その心事もまた暗かつたことは、道中の詩によつて明らかである。

九江出發の時に作られた詩として知られてゐるものには、先にその一部を引いた妻の弟なる宋・にあてた詩「夜郎二竄サレ烏江ニ於テ宗十六・二留別ス」があり、また九江の諸官吏の送別宴後の作たる「夜郎二流サレ永華寺ニテ潯陽ノ群官ニ寄ス」がある。舟はますます西し、江夏武昌に至つた。

ここではしばらく留まつた見えて、詩が多く、またこの地の諸官との交誼も知られる。まづ江夏のてまへ八十五里の西塞駅では、裴隱といふ者に詩を寄せてゐる。江夏の興徳寺の南園には長史の李某と薛某とに招待されて遊んであり、江夏とは揚子江をへだてた沔州漢陽にも行つて、ここにゐた旧知の尚書郎張謂テウヰキらと城南の湖に遊び、張の請に依つて、この湖に郎官湖の名を与へてゐる。これが秋八月のことであつたのは註でしられる。ところでこれより先に、宰相張鎰がこれまた左遷されて、荊州江陵に来てゐたのが、使者をして李白に衣服と詩とを贈つてくれたので、李白は大いに感激して、五月五日に答詩を作つて贈つてゐる。してみると彼は流罪になつたとはいひながら、江夏だけでも悠々と三個月は留り得たのである。

この間に相愛らず赦免の運動はしてゐたのであらうが、その許しは出ない。どうしても西に行かねばならないと、覚悟をきめて出發する。ここから江陵、宜昌を経て、巴東秭歸からはいよいよ四川省の地に入る。省境をすぎると、ここには巫山フサイがあり、江は名高い三峡の險所を

なしてゐる。「三峽ヲ上ル」、「巴東自リ舟行シ瞿唐峽ヲ經テ巫山ノ最高峰ニ登リ晚ニ還リテ壁ニ題ス」の二詩はおそらくこの時の作であらう。さすがの天才も涙枯れ想尽きたと見えて、この頃の作に紹介したいものも見えない。

張鎬が左遷されたのは、至徳三載が改元された乾元元年の五月のことであつた。前のことを従つてこの年の事件とすると、この年には二月と四月と十一月との三回の大赦があつた。しかし李白が少くとも初めの二回には、その選から漏れたことには疑がない。この大赦に漏れたことと、その時の心境とは「夜郎ニ流サレ酺ヲ聞ケドモ預ラズ」こといふ詩によつて知られる。翌乾元二年三月になつては、洛陽が郭子儀らの率ゐる官軍によつてとりかへされた。これより先、永王の謀叛と殆ど時を同じうして、安祿山がその子安慶緒に殺されたが、この不孝の子もそれより二年後に、部下の史思明に殺されたので、官軍は賊中の内訌で、やすやすと長安、洛陽をとりかへしたのである。

李白が運命いよいよ決して、瘡痍の地なる夜郎に赴くべく、巫山まで来て放免のしらせを聞いて雀躍（こをどり）したのは、おそらくこの時のことであらう。彼に「夜郎ニ流サレ半道ニテ恩ヲ承ケテ放還サレ兼ネテ剋復之美ヲ欣ビ懷ヲ書シテ息秀才ニ示ス」と題する詩があることからこれが知られる。

黄口爲人羅 黄口は人に羅せられ<sup>658</sup>

白龍乃魚服 白龍はすなはち魚服す。<sup>659</sup>

得罪豈怨天 罪を得るもあに天を怨まんや

以愚陷網目 愚をもつて網目に陥る。

鯨鯢未剪滅 鯨鯢いまだ剪滅せず

豺狼屢翻覆 豺狼しばしば翻覆す。<sup>660</sup>

悲作楚地囚 楚地の囚となるを悲しむ

何日秦庭哭 いづれの日か秦庭に哭せん。<sup>661</sup>

遭逢二明主 二明主に遭逢すれども

前後兩遷逐 前後ふたたび遷逐さる。

658 ぐちばしの黄色い小雀

659 白龍も魚服すれば人に苦しめられる。

660 豺狼の如き賊徒はあつちへついたりこつちへついたりする。

661 申包胥の如く国を救ふために働けようか。

去國愁夜郎 国を去つて夜郎に愁ひ

投身竄荒谷 身を投じて荒谷に竄ながざる。

半道雪屯蒙 半道にして屯蒙トンモウを雪はらひ<sup>662</sup>

曠如鳥出籠 曠コウとして鳥の籠を出づるがごとし。<sup>663</sup>

逢欣尅復美 是るかに尅復コウフクの美を欣よろこび<sup>664</sup>

光武安可同 光武もいづくんぞ同じうすべけん。<sup>665</sup>

天子巡劍閣 天子 劍閣けんかくを巡めぐり

儲皇守扶風 儲皇チョウコウ<sup>666</sup> 扶風ふふうを守る。<sup>667</sup>

揚袂正北辰 袂たもとを揚げて北辰ほくしんを正し<sup>668</sup>

開襟攬群雄 襟えだを開いて群雄ぐんゆうを攬とる。<sup>669</sup>

胡兵出月窟 胡兵 月窟げつこくを出で<sup>670</sup>

雷破關之東 雷破らいぱす關かんの東。<sup>671</sup>

左掃因右拂 左掃よりて右払

旋收洛陽宮 かへつて収む洛陽宮。

662 艱難を払ひのけ。

663 障害物がなくなつて明らかとなつた様。

664 国難に勝つて平常に復する。

665 英明なる後漢の光武帝也。

666 太子

667 鳳翔郡

668 北辰は天子の位

669 手にとりもつ。

670 根拠地なる長安を出て香積寺で戦ひ。

671 函谷關の東では陝県の西で大破した。

廻輿入成京 輿を廻らして成京に入り

席卷六合通 席卷して六合通ず。

叱咤開帝業 叱咤して帝業を開き

手成天地功 てづから天地の功を成す。

大駕還長安 大駕 長安に還り。

兩日忽再中 兩日たちまちにふたたび中す。

一朝讓寶位 一朝 宝位を譲り

劍璽傳無窮 劍璽 無窮に伝ふ。

媿無秋毫力 媿づ 秋毫の力なきを。

誰念豐鑠翁 誰か念はん豐鑠の翁

弋者何所篡 弋者なんの篡ふところぞ

高飛仰冥鴻 高飛して冥鴻を仰ぐ。

棄劍學丹砂 劍を棄てて丹砂を学ぶ

臨爐雙玉童 爐に臨む双玉童

672 片はしから巻きおさめて  
673 六方

674 天子のりもの

675 玄宗と肅宗

676 微小なるもの

677 老いて勇健なる様

678 いくるみで鳥をとる者

679 大空をとび鴻を理想とする。

680 不老長生の薬を作る法

寄言息夫子 言を寄す息夫子ソクツツシ

歳晚陟方蓬 歳晚方蓬に陟らん。681

自分の才と忠心とを理解しないで、讒言によって長安から去らしめた玄宗と、永王の軍に従ったことで流刑に処した肅宗とに対する恨みはあるが、遠流赦免と兩京回復の二つの喜びを兼ねた彼の心中は、ほぼこの詩によってうかがはれる。

時すでに春の終りである。彼はおそらく長江下流へ還ることを志したであらう。すでに往路で、放還の時があれば、そこでの生活を望んでゐたことが次の詩によって知られるからである。

憶秋浦桃花舊游時 鼠夜郎 秋浦の桃花の旧遊を憶ふ。時に夜郎みやに鼠ねがさる

桃花春水生 桃花 春水生じ

白石今出沒 白石いま出沒す。

搖蕩女蘿枝 女蘿82の枝を搖蕩83し

半挂青天月 なかば青天の月を挂かく。

不知舊行徑 知らず旧行徑

初拳幾枝蕨 はじめて幾枝の蕨わらびを拳ケンする。684

三載夜郎還 三載夜郎より還らば

于茲煉金骨 ここにおいて金骨ねを煉ねらん。685

秋浦は乱の直前に廬山に赴く途中とどまったところであるが、ここで仙道を修行したいとの思ひが結句で見られるからである。名高い「早二帝城ヲ発ス」の詩もこの放免の時のものとする、東帰の喜びを兼ねて一層趣が深くならう。

朝辭白帝彩雲間 朝あしたに辞す白帝 彩雲の間

千里江陵一日還 千里の江陵 一日いちにちにして還る。

681 方丈、蓬萊の二仙山

682 ひかげのかつら

683 ふりうごかし

684 拳のかたちをしたわらびが出たか。

685 仙人に化する術を学ばう。

兩岸猿聲啼不住 兩岸の猿声 啼いて住まらざるに  
 輕舟已過萬重山 輕舟すでに過ぐ万重の山。

江を上るとき思ひにくらべて、下りの舟の速かったのは水流のせめのみではなかったのである。

江陵での滞在はなかったかもしれないが、李白の姿はまもなく江夏(武昌)に現はれる。流罪の途中でもここでは長く滞在したのであるが、今度は憚るところなく交遊をなし得たであらう。かくては揚子江下流への帰還は延引することとなったのも、やむを得ないことであった。

ここを歌った詩は数多く見られる。前にも引いたこの太守韋良宰に贈った詩では、ともに黄鶴樓に上ったことが知られるし、またそのために作った、「天長節使鄂州刺史韋公ノ徳政ノ碑」の文によって、玄宗の生誕の日なる八月五日にここにゐたことも知られる。「江夏使君叔ノ席上史郎中ニ贈ル」、「史郎中ト飲ンテ黄鶴樓上笛ヲ吹クヲ聴ク」の詩によって、黄鶴樓の近くで宴したことも、一度二度ではないことが知られる。後者は李白の絶句の例にもれずいい詩である。

一爲遷客去長沙 一たび辺客となつて長沙に去り<sup>686</sup>

西望長安不見家 西 長安を望めども家を見ず。

黄鶴樓中吹玉笛 黄鶴樓中 玉笛を吹く

江城五月落梅花 江城<sup>687</sup> 五月 落梅花<sup>688</sup>

漢陽の太守の王某と交遊の繁かつたことも、これに贈った詩が四首あることで知られる。即ち「王漢陽ニ贈ル」、「漢陽自り酒ニ病ンテ歸リ王明府ニ寄ス」、「早春王漢陽ニ寄ス」、「漢陽ノ柳色ヲ望ミ王宰ニ寄ス」の四篇がそれであるが、後の二首は題名の示す如く、漢陽の春をつたつてゐるので、李白はここで越年し、巫山での希望とちがって、直に秋浦方面へはゆかなかつたやうである。しかもここでも例の如く、毎日飲酒で日を送ったことは、最後の詩に「連日壺觴ニ酔フ」の句のあることでも知られるが、殊に第二の詩の題では、酒のために健康をそこねたことがわかるのに、本文では、

去歲左遷夜郎道 去歲は左遷さる夜郎の道

琉璃硯水長枯槁 琉璃<sup>ルリ</sup>の硯水<sup>ケンスイ</sup>ながく枯槁<sup>コウコウ</sup>す。<sup>689</sup>

流された人

687 武昌

688 笛の曲の名

689 水がなくなる。

今年敕放巫山陽 今年 敕して放たる巫山の陽みやまのやま

蛟龍筆翰生輝光 蛟龍の筆翰 輝光を生ず。690

聖主還聽子虛賦 聖主また聴く子虚の賦(フ)691

相如卻與論文章 相如かへつてもに文章を論ず。

願掃鸚鵡洲 願はくは鸚鵡オウムの洲を掃(はら)ひ692

與君醉百場 君と百場酔はん。693

嘯起白雲飛七澤 嘯うそけは白雲を起して七沢に飛び694

歌吟淥水動三湘 歌へば淥水ロラスに吟695して三湘696を動かす。

莫惜連船沽美酒 惜むなけれ連船もて美酒を沽かふを

千金一擲買春芳 千金一擲して春芳を買はん。697

といて、まだ飲むつもりだったので、李白の面目は相変らずだなど思はせる。

「武昌ノ宰韓公ノ去思頌碑」の文は同じく武昌での作で、韓公とはかの韓愈(退之)の父仲卿である。ただしその作は安祿山の乱後であることに間違ひないが、巫山へゆく途中か、帰路のことかははっきりしない。

この頃、洞庭湖にも遊んでゐることは、「荊州ノ賊平ギ洞庭ニ臨ンテ懷ヲ言ヒテ作ル」、「九日巴陵ニ登リテ置酒シ洞庭ノ水軍ヲ望ム」の二篇で知られる。荊州(江陵)の賊とは、この年八月に乱を起し、南楚の霸王と称した康楚元の部下張嘉延のことで、九月に荊州を陥れたが、十一月には官軍に平定された。洞庭に集められた水軍もこれを伐つためだったのである。巴陵は今の岳陽にある丘。洞庭の水、秋の雲、堂々た

690 筆

691 司馬相如の作

692 武昌にあり。

693 あまたたび

694 楚の国の大沢

695 清らかな水

696 湘潭、湘郷、湘源

697 酒の名か。

る水軍を眺めたのは、おそらく岳陽楼からであつたらう。水軍のことをいはなくとも洞庭の秋を歌つてゐる李白の詩の多くは、この時の作と見て誤りなからう。それらの中で最も好いのは次の一首である。

秋登巴陵望洞庭 秋巴陵に登り洞庭を望む

清晨登巴陵 清晨 巴陵に登り

周覽無不極 周覽 極まらざるなし。

明湖映天光 明湖 天光に映じ

徹底見秋色 徹底して秋色見<sup>あらは</sup>る。 698

秋色何蒼然 秋色なんぞ蒼然たる

際海俱澄鮮 海に際<sup>いた</sup>るまですべて澄鮮。

山青滅遠樹 山青くして遠樹滅し

水・無寒煙 水緑にして寒煙なし。

來帆出江中 來帆は江中より出で

去鳥向日邊 去鳥 日辺に向ふ。

風清長沙浦 風は清し長沙の浦

山空雲夢田 山は空<sup>むな</sup>し雲夢<sup>ウンボウ</sup>の田。 699

瞻光惜頽發 光を瞻<sup>み</sup>て頽髮<sup>タイハツ</sup>を惜<sup>み</sup>み 700

閱水悲徂年 水を閱<sup>み</sup>て徂年を悲しむ。 701

北渚既蕩漾 北渚<sup>ホクシヨ</sup>すでに蕩漾<sup>トウヨウ</sup> 702

東流自潺湲 東流おのづから潺湲<sup>センカク</sup> 703

底まで

699 洞庭湖の南北の沢地

700 禿げてゆく髪

701 すぎゆく年

702 波がうごく。

703 水の流れる様

郢人唱白雪

郢人<sup>704</sup> 白雪<sup>705</sup>を唱<sup>うた</sup>ひ

越女歌采蓮

越女<sup>706</sup> 採蓮<sup>707</sup>を歌ふ。

聽此更腸斷

これを聽<sup>き</sup>いてさら<sup>よ</sup>に腸<sup>はらわた</sup>断え

馮・淚如泉

馮<sup>きし</sup>・淚<sup>よ</sup>如<sup>よ</sup>泉<sup>よ</sup>の<sup>よ</sup>ことし。

李白も既に老いたのである。明るい日光を見てはおのが頭髪を思ひ、逝く水を見てはすぎ去つた年を思ふと歌ふところには、五十九歳の彼の年齢が現実感を伴つてゐて、読者をもそぞろに悲しませる。

704 俗曲を巧みにつたふ者

705 歌の名

706 浙江方面の女

707 歌の名



## 十三 晩年・あとがき

### 十三 晩年・あとがき

李白が巫山で憧憬した揚子江下流の秋浦方面での静かな生活は、武昌での滞在と交友とで中実現しなかったが、年号が上元と改まり、李白も還暦の齢を越えた上元二年には、彼の姿はやつとこの方面に現れた。この時、山東にゐた子の伯禽をこの辺へ呼んだことは確かであるが、九江で別れた妻のことは遂に詩にも文にも見えない。

後にその死所となった当塗が家居の地であったが、秋浦（貴池）、宣城、南陵等の安徽省内の諸地はもとより、金陵、揚州方面にも往来したことは間違ひない。

中でも宣城は李白の最も崇拝した詩人謝朓（シヤオウ）が刺史の任にあつたところだから、度々ここへ赴き、その詩に現はれる敬亭山、その別荘のあつた東田に足をとどめ、詩心をともした。ただし李白がこの方面に来たのがはじめてでないことは、既に述べた如く明らかであるから、李白の詩に多い宣城での作は、いづれがこの時期の作か定めがたい。

例へば、「宣城ニテ杜鵑花ヲ見ル」は、この花を見て杜鵑（トケンカ）の啼声を憶ひ、この鳥の多い蜀を懐ふ。蜀の思ひ出は少年時代のことであらうし、その作もこの時のことは定めがたいが、この頃またここでこの花を見て、思ひを新たにすることは疑ひない。

蜀国曾聞子規鳥 蜀国かつて聞く子規鳥

宣城還見杜鵑花 宣城また見る杜鵑花。

一叫一回腸一断 一叫（キョウ）一回 腸一断

三春二月憶三巴 三春 三月 三巴を憶ふ。

この詩が春の作であるのに対し、宣城での秋の吟としては、

觀胡人吹玉笛 胡人の笛を吹くを觀る

胡人吹玉笛 胡人 玉笛を吹く

一半是秦聲 一半はこれ秦声。<sup>708</sup>

十月吳山曉 十月 吳山の曉

梅花落敬亭 梅花 敬亭に落つ。<sup>709</sup>

愁聞出塞曲 愁へて出塞の曲を聞けば

淚滿逐臣纒 淚は滿つ逐臣の纒。<sup>710</sup>

卻望長安道 かへつて望む長安の道

空懷戀主情 むなしく懷おもふ主を恋こふの情。

この詩は長安を逐はれてから、天宝十三載に宣城に來た時の作だらうと思ふが、このたびも敬亭山に上つて、同じく玄宗のことを思つて淚纒をつるほしただらうか。李白はまだ知らなかつたかもしれぬが、玄宗は上元元年に、睿宗との不和の中に長安で崩じてゐるのである。人変り、世移り、おのが齡のみいたづらに重つたのを念ふ悲しみは、昔と愛らぬ山川を見るとき、いよいよ深かつたことと思ふ。

これと異り、秋浦での作の中、少くとも「秋浦歌」十七首はこの頃の作に違ひない。十七首を通じて表はされてゐる孤寂感こは、特に老をうたふ詩に深く、「李白老いたり」の感を強からしめるからである。その一はいふ、

秋浦長似秋 秋浦長しへに秋に似たり

蕭條使人愁 蕭條シヨウジョウ 人をして愁へしむ。<sup>711</sup>

客愁不可度 客愁 度すべからず。<sup>712</sup>

行上東大樓 行いて上る東大樓。

正西望長安 正西に長安を望み

下見江水流 下に江水の流るるを見る。

708 胡歌でなく秦(陝西)の曲である。

709 人が吹いたのは落梅花の曲だった。

710 冠のひも。

711 さびしき様。

712 たびのつれひ

713 消度する。

寄言向江水 言を寄せて江水に向ふ

汝意憶儂不 汝が意いわれを憶しふやいなや。

逢傳一掬淚 是るかに一掬の涙を伝つたふ<sup>714</sup>

爲我達揚州 わがために揚州に達せよと。

得意の場たりし長安、青年時代思ひ出の多い揚州のいづれもが詩中に見えてゐるが、揚州に向つて流れる長江への伝言は、江水におとす一掬の涙を伝へよとのみである。その四は、

兩鬢入秋浦 兩鬢リョウポン 秋浦に入れば

一朝颯已衰 一朝サツ颯としてすでに衰ふ。<sup>715</sup>

猿聲催白髮 猿声 白髮を催し

長短盡成絲 長短ことごとく糸を成す。

秋浦の地名からおのが人生の秋を連想して実感を交へずにはゐられなかつたのである。中でもその十五は有名な、

白髮三千丈 白髮三千丈

綠愁似箇長 愁ひによつてかくのごとく長し

不知明鏡裏 知らず明鏡の裏

何處得秋霜 いづこよしか秋霜を得たる。

の詩である。最初の「白髮三千丈」といふ句が誇大にすぎると考へる者もあつたが、鏡につつるわが白髮を見た失意の李白自身は、かう詠ふより外なかつたといふであらう。

家を構へた当塗の風景は「姑熟十詠」に表はれてゐる。姑熟(コジユク)は当塗の古名である。ここを流れる姑熟溪、東にある丹陽湖を題としての作が、この中にあるが、後に李白の墓所となつた青山の謝朓の家の址をたつねての「謝公宅」が特に佳い。

青山日將暝 青山 日まさに暝れんとす

寂寞謝公宅 寂寞セキバクたり謝公の宅。

竹裏無人聲 竹裏 人声なく

池中虚月白 池中 虚月白し。<sup>716</sup>

荒庭衰草徧 荒庭には衰草あまな徧く

廢井蒼苔積 廢井には蒼苔つも積る。

惟有清風「間」 ただ清風の閑かなるあり

時時起泉石 時時 泉石に起る。

当塗の北には黄山があり、山上の陵リョウケイダイ「敵台」は宋の武帝の離宮の址 桓公井は城東にあつて桓温の遺蹟である。みな十詠の中に入るが、「陵敵台」はとりわけ佳作である。

曠望登古臺 曠望に古台に登れば<sup>717</sup>

臺高極人目 台高くして人目を極む。

疊嶂列遠空 疊嶂ジョウショウ 遠空に列り<sup>718</sup>

雜花間平陸 雜花<sup>19</sup> 平陸まじに間はる。<sup>20</sup>

「間」雲入窓牖 閑雲サイソウ 窓牖まじに入り<sup>721</sup>

野翠生松竹 野翠 松竹に生ず。

欲覽碑上文 碑上の文を覽みんと欲するも

716 池に映つた月

717 とほく眺めよつて

718 重つた峰

719 いろいろの花

720 平地

721 まで

苔侵豈堪讀 苔侵してあに読むに堪へん。

晩年のしづかな心境がよく表はれてゐて、かつての日の作とは別人の看がある。剣を学び、揚州に三十余万金を投じた放蕩無頼の青少年時代、天子の召に応じながら酒気を帯びて入内し一気呵成に詩を草した壮年時代と異り、老年の李白は閑寂である。

当塗の北には望夫山がある。松浦佐用姫の伝説と同じく、旅に出て帰らぬ夫を待ち望んで石になった女の伝説をもつ山である。閨怨を歌ふことを好んだ李白は、ここでも感興を起したのではあるが、同じ趣を歌ひながらも、昔の作とくらべると静かである。

### 望夫山

願望臨碧空 願望キョウボウ 碧空に臨み<sup>722</sup>

怨情感離別 怨情 離別を感ず。

江草不知愁 江草 愁ひを知らず

巖花但爭發 巖花 ただ争つて発ひびく。

雲山萬重隔 雲山 万重隔たり

音信千里絶 音信 千里絶ゆ。

春去秋復來 春去り秋また來る

相思幾時歇 相思幾時か歇やまん。

李白がかくも老いながら、死と死後とを歌はないのは、中国人の通性による。詩や文に限らず、会話でも一切不吉なことを表現するのを好まないのだから、これは当然なのだが、ひるがへって考へると不老不死、化仙、長寿などの觀念が、人間の死なねばならないといふことを前提として生れ出たものである。してみれば、李白の晩年の作に見られる白髮の詩も悲しいものといはねばなるまい。

李白の死は、肅宗が崩じ、その子代宗が即位した宝應元年の十一月、当塗でのことであつた。

李陽冰によると、危篤になつた時、草稿一万余を枕辺にゐた彼にわたし、序を作つて刊行するやうに頼んだといふ。李華の墓誌によると、臨終の辞を作つたといふ。しかし万巻の草稿はいま千篇足らずとなり、臨終の辞も伝はらない（「臨路歌」といふ題で残つてゐるのがそれだとの説もある）。

李白の死に関しては、彼にふさはしい伝説が古くからある。それは周知の如く、李白が江上で酔ひ、采石磯に至つて、水にうつる月影をとりへようとして、水中に陥り、溺れたのだといふのである。「旧唐書」には飲酒過度のためとある。いづれも存しておく方が似つかはしいであらう。

ただ哀れなのはその子孫のことである。李白が死した時、その屍は当塗の東南の青山に葬られたが、その墓誌は詩人李華によって記された。これを見ると、

「子有り、伯禽トイフ。天然長シテ能ク持シ、幼クシテ能ク弁ジ、公ノ徳ヲ数梯ス。必ズマサニソノ名ヲ大ニセン」

といつてゐる。しかし范伝正の墓碑銘序文によると、彼はその父范倫が李白と潯陽で夜宴をしてともに詩を作った縁もあり、李白の詩をも愛してゐたから、この地方の觀察使に任ぜられて赴任すると、直ちにその墓を訪ねた。さうして墓辺の樹木の樵採を禁じ、墓碑を清掃する一方李白の子孫を探したが、三四年たつて、やっと孫女二人のゐることが判明した。一人は陳雲といふ者の妻、一人は劉歡の妻であるが、ともに夫はただの農民である。郡の役所に召して会ったところが、衣服も飾らずかたちも朴野である。ただ振舞のみは閑雅で、応対もはきはきしてゐた。聞けば、父の伯禽は、李白の死後三十年の貞元八年に、官吏にもならないで死んだ。兄が一人ゐたが、旅に出てから十二年、今では行方不明である。父兄ともゐないので困窮し、やむを得ずして農夫に嫁いだ。さやうなわけで役所からの調査があつた時にも、父祖の恥になると思つて隠してゐたが、このごろ皆から強ひられるので、恥を忍んで参つた、といひ、いひ終つて泣くのを、范伝正自身も泫然とした。聞けば、李白は謝朓にゆかりのある青山に葬つてほしいといつたが、それも思ふ通りにゆかず龍山の東麓に葬つた。墳の高さ三尺、次第に盛土が崩れて来る、といふ。范伝正はこれをあはれんで、下僚の当塗の県令で、これも詩の好きな諸葛縦に命じて、新墓を青山の南に造つた。これが元和十二年の正月二十三日で、旧墳を西に去ること六支里であつたといふ。

これによると、李華の碑文に最初から青山に葬つたやうにあるのと矛盾するが、范伝正の父は李華とも親しかつたといひ、嘘をいふ必要があつたとも思はれないので、いづれを是とも定められない。

范伝正はまたこの二人の孫女を、士族に改嫁させようとしたが、いづれも夫婦の道は天命であり天分だといつてこれを肯んじないので、ただその税と徭役とを免じるにとどめたといつてゐる。李白の死後五十五年目のことである。

これよりまた二十数年後の会昌三年に、范伝正と同じことをしたのが裴敬である。彼もこの二孫女に会つてゐるが、既に墓を拝しないことと五六年といつてをり、税役もまた復せられてゐたとみえ、裴敬が再び時の当塗県令の李都傑にいつて、これを免除せしめてゐる。この少し前、唐の文宗皇帝自らが、唐の三つのすぐれたものとして、李白の詩歌と裴敬の曾叔祖なる裴旻の劍舞と張旭の草書とをあげてゐるのである。李白の名はいよいよ高く、かやうに多少の縁故でわざわざ墓を訪ねて来る者さへあるのに、五六年もの長い間、墓の掃除もしない孫女とは、不肖の子孫といはねばなるまい。しかし詩酒の人にとっては、かへつてこの方が似つかはしいといへないこともない。

中国は革命の国である。王朝を易へること数十、革命に當つては、君主の子孫をも留めないのが普通である。詩人李白の子孫と称するものが現在ゐないのは当然であるが、考へてみると詩人が子孫をのこさないのは、あながち中国のみとは限らない。李白の没後千年、いまもなほその詩を愛する者の絶えないことを知つたら、彼も以て瞑するに足るといふことだらう。

初版（日本評論社 1944年4月21日） あとがき

この本を書くやうにとの話を受けたのは昭和十六年の五月、書きはじめたのが十一月も終りに近い頃だったか。米英の圧迫に国民すべてが憤激してゐる時だったので、筆をとりながらも考へることが多かった。その中に宣戦の御詔勅の煥発で、私の心は一層戦争の方へ傾いてしまつたが、年も明けて十七年の正月には私自身が思ひがけずも南方に従軍を命ぜられ、書きかけた原稿はそのままにして、日本刀を持ち軍装をして出発した。ただ予想と異り、私の任地はすでに戦闘の終了してゐた昭南とスマトラで、持参の刀には用なく、任務は筆を執ることのみ、従つて本を読む暇もあつた。殊に昭南とスマトラのメダンとともに華僑勢力の中心地で、彼等との応対には、支那学の必要も感ずることが多かった。そんなわけで昭南のサウスブリッジ路で書肆に入つて、李太白全集を偶然見つけて購つたりすることもある。

幸ひに帰還した後、出発前のままに残されてゐた原稿を読みかへして、その不十分なものには憤ろほしく思ったが、従軍中に痛感した支那民族の理解の一助にもなるならばと、書き改め得る限りは改めてこれを梓に上す。最後ながら参考書や忠言で助けてくれた小山正孝、小高根太郎、竹内好の三友、ならびに日本評論社の赤羽尚志氏に対する感謝を述べさせていただきます。

昭和十八年十月

田中克己

再版（元々社 1954年7月10日） あとがき

この本は昭和十六年の五月に、日本評論社の社員だった赤羽尚志君が訪ねて来て、「東洋思想叢書」の一冊として李太白を書くやうにといったので出来た。同君は詩、小説、歴史、評論と、何でも来いの器用な人で、前から名を知ってゐたが、私が引受けたのは、杜甫なら書く人はあるが、李白は他に書く人がない、といふ同君の言にうまうまと引かされたのである。ひと通り調べて筆をとりだすとすぐ大東亜戦争の勃発、またすぐに私は報道班員として徴用され、シンガポールやスマトラへ行つたので、いよいよ仕事がおくれ、本になつたのは、内地に空襲がそろそろ始まる昭和十九年の四月であつた。

出来上つたあと評判が良く、恩師和田清先生にはおほめにあづかるとともに、誤つた箇所も指摘していただいた。売切れたとかで再版の交渉を受け、承諾してすぐ召集を受け、華北で私が二等兵となつてゐる間に、内地は出版どころではなくなつた。終戦後、幸ひ復員帰国して出版社を訪ねたが、戦争中の約束などもうどこへやら、再版などとは、といふ顔をされた。尤も世の中も中国への関心はすっかりなくなり、アメリカ一辺倒だつたのである。

しかし私としては好きな本の一つだし、このごろ人からもほしがられるので、齋藤响、浅野晃の二先輩のお言葉に甘へ、最少限度の訂正をして出してもらふこととした。初版のとき参考書や忠言で助けてくれた小山正孝、小高根太郎、竹内好の三友とも住地を別にしてめつたに逢へない。この機会に重ねてお礼をいっておく。なほ清書の一部は小野和子君が手伝ってくれた。これもありがたいと思ふ。

【参考】『蘇東坡』(研文出版 1983.3.1) あとがき

山本敬太郎氏は古くからわたしの知己である。戦争の末期、『東洋思想叢書』というのを日本評論社で計画し、編集の一人には戦後、共産党と名乗りをあげ、党の幹部の一人であった筆名赤木健介氏がいて、この人が昭和十六年、陋居を訪れ、叢書の計画を説明して、わたしには李太白をといつのであった。同氏の「杜甫なら書く人は山ほどあるが、李白はありません」という言葉にわたしはうまうまと乗せられたのである。

当時わたしは三十歳はすぎたが、まだ働き盛りで、岩波文庫の漆山又四郎選『李太白詩集』と久保天随『李太白詩集』上・中・下(統国訳漢文大成本)、森槐南『李詩講義』(文会堂刊)しかなく、これらは李白を愛せしめる書とは思えなかった。宿題にしている内に文士徴用、わたしも詩人のはしくれということで、マラヤ軍に徴用されたが、皇軍の本領を見聞きして吃驚、そのことを述べようと帰還すると、情報部長談話で「このごろ外地から帰り無用の 実状」と称する談話をする者があるが云々」とラジオで報が入った。その前日、陸海軍の参謀(私服)二人のいるところで、わたしはマラヤ・スマトラの軍政について実況を話したばかりで、わたしは軍は軍部以外の意見を聞く耳をもたないと直感した。従って中国を知らすために全力をそそぐと李白研究には熱が入り、昭和十八年、島々の全滅つづく中を、大陸はまだと筆を執り、年末には完成、翌年四月には店頭と並べた。忽ち売切れとなった様子であるが、うれしかったのは、差入れを許された獄中の共産党の某氏が「この本は面白い」と愛読したこと、たまたま店頭を訪れたわたしに「あの叢書では武田泰淳さんの『司馬遷』とあなたの『李太白』とが双壁ですね」と評された山本書店主山本敬太郎さんのかざりけななおことばとで、わたしはここに知己がいたかと喜んだ。

長々とかいたが、同叢書の竹内好の『魯迅』は出征を覚悟しての早書きで未完のものだし、その他の老大家の御著作は、わたしは不遜にもこの非常時に何を考えての御仕事か、と首をかしげさす態の物が多かった。武田泰淳君とは竹内を通じての知りあいであつたから、さもあらんとした。

その山本さんから「蘇東坡を書け」とのお話があつたのは、三年前の夏休み直前だった。わたしはこの保守反動と悪名高い詩人を、どうしてわたしにお書かしになるかと二心不審には思ったが、『祖国』という京都刊の地方雑誌に蘇東坡の伝記を三回にわたってかき(昭和二十八年～二十九年)、ついで大阪の女子短大の学報に「海南島の蘇東坡」といつつづきを載せ(昭和二十九年)、岩波書店の中国詩人選集の『蘇東坡』の挿みこみペーパーに「蘇東坡の妹」について書いたなどの前歴を思い出し、この際この詩人との関係に結着をつける決心をし、参考書を集め出した。一応、手に入る限りは集めたが、林語堂の評伝が一等面白かった。他の本はまあまあ。気になったのはやはり保守反動、王安石の富国強兵への新政策に反対し、国論を二つに分け、党争の結果が彼の死後すぐに徽宗・欽宗の二帝の東北への流謫という中国史上でも比類を見ぬ悲劇を来たした(明の崇禎帝の北京の煤山での自殺はやはり悲劇であるが、二帝の流謫と最後は時間的に長いだけ悲痛である。小説『宣和遺事』は従って読者をして読むにたえざらしめる)。

とまれ王安石(東坡の文学と政治二方面での好敵手)の評判は宮崎市定先生をはじめ史学者で高く買う人が多いが、東坡に関しては、詩人としてはともかく、その主義主張は保守反動と感ずる向きが多いかと思う。新・旧両党の党争は主義よりも党争そのものと化し、遼・金など

への対外策は全く軽視されたきらいはあるが、孔子・老子も兵法・法制・軍事行動など現実の面では全く無力だった点わたしは同感である。恕していただければというのが、華北派遣至武兵团元陸軍一等兵のわたしの願いである。そう腹がきまるまで、この伝記はなかなか書きつらかった。そのため足かけ三年にわたった期間、黙って待つて下さった研文出版の御一同にも感謝して筆を擱く。

(研文出版の許可を得て載録させて頂きました。ありがとうございました。)

## 付記

テキスト化に当っては再版を定本としたほか、原詩以外は漢字を新しく、また漢音ルビと促音便についても現代かな遣ひにあらためた。(中嶋康博)